

平成 25 年度 ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

試掘調査

- 磯崎東古墳群（第 10 次調査）
- 老ノ塚遺跡（第 2 次調査）
- 柴田遺跡（第 3 次調査）
- 雷遺跡（第 1・2・3 次調査）
- 高野富士山遺跡（第 7 次調査）
- 岡田遺跡（第 24 次調査）
- 西中島遺跡（第 4 次調査）
- 堀口遺跡（第 13・14 次調査）
- 市毛上坪遺跡（第 13 次調査）
- 枯松戸遺跡（第 3 次調査）

本調査

- 三反田蛭塚遺跡（第 6 次調査）
- 西中島遺跡（第 5 次調査）

2014

ひ た ち な か 市 教 育 委 員 会
公 益 財 団 法 人 ひ た ち な か 市 生 活 ・ 文 化 ・ ス ポ ー ツ 公 社



三反田蛭塚遺跡第6次調査区



西中島遺跡第5次調査区第1号住居跡

序 文

ひたちなか市は、関東地方の北東部、那珂川の河口の左岸に位置しております。関東平野の北端にほど近く、阿武隈山系へとつながる那珂台地が市域の大半を占めておりますが、那珂川沿いは水田の広がる沖積低地であり、東側は太平洋に面し、その海岸には砂丘や磯が広がるなど、大変バラエティに富んだ景観を呈しています。

このように海・山・川がバランスよくそろった多様な自然環境に恵まれたひたちなか市域は、原始・古代から人々の生活の地として栄えており、面積 99.07 km²の市域には合計約三百箇所のにぼる埋蔵文化財包蔵地が確認されております。

このなかでも古墳時代の埴輪作りの遺跡である馬渡埴輪製作遺跡や装飾壁画で知られる虎塚古墳は国の史跡指定を受け、市を代表する遺跡として市民の誇りであるとともに、研究者等の注目も集めております。

このようにひたちなか市は緑豊かな自然に恵まれ、人口も僅かながら増加を続けておりますが、その代償として毎年活発な開発行為等が行われており、それに伴う発掘調査により多くの埋蔵文化財が出土しております。やむを得ぬ理由で失われていく文化財を少しでも後世に遺していくため、この市内遺跡発掘調査事業は、大きな意義を持っています。

今年度は、公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に委託し、市内 11 箇所の埋蔵文化財包蔵地内において調査を実施いたしました。専門性豊かな職員を擁する同公社の手によって調査が行われることによって、出土した貴重な文化財がより有効に活用されるであろうと考えております。

最後になりますが、快く調査のご承諾をいただきました地権者や関係各位、また調査に参加されました皆様に感謝申し上げますとともに、本報告書が郷土ひたちなかの歴史について、新たな知見を加え、市民の皆さんが歴史に触れる縁となれば幸甚に存じます。

平成 26 年 3 月

ひたちなか市教育委員会
教育長 木下 正善

例 言

- 1 本書は、平成 25 年度国費補助事業として、ひたちなか市教育委員会の委託を受けて、公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が実施したひたちなか市内の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、平成 25 年 1 月から 12 月にかけて実施された発掘調査についての報告であり、磯崎東古墳群・老ノ塚遺跡・柴田遺跡・雷遺跡・高野富士山遺跡・岡田遺跡・西中島遺跡・堀口遺跡・市毛上坪遺跡・枯松戸遺跡の計 11 遺跡について、13 件の試掘・確認調査を実施し、三反田蜷塚遺跡・西中島遺跡の 2 件について本調査を実施した。調査期間は次のとおりである。

磯崎東古墳群	1 月 23 日～ 25 日	老ノ塚遺跡	1 月 23 日～ 30 日
三反田蜷塚遺跡	2 月 13 日～ 3 月 5 日	柴田遺跡	2 月 20 日～ 3 月 4 日
雷遺跡	2 月 28 日～ 3 月 9 日, 5 月 28 日～ 31 日, 11 月 28 日～ 12 月 5 日		
高野富士山遺跡	3 月 19 日～ 22 日	岡田遺跡	3 月 19 日～ 22 日
西中島遺跡	6 月 18 日～ 25 日, 8 月 20 日～ 9 月 12 日		
堀口遺跡	7 月 9 日～ 12 日, 12 月 17 日～ 21 日	市毛上坪遺跡	7 月 9 日～ 16 日
枯松戸遺跡	11 月 28 日～ 12 月 6 日		

- 3 発掘調査および整理報告は、ひたちなか市教育委員会文化振興室の指導のもとに、公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社の文化課文化財調査事務所が実施したものであり、組織は次のとおりである。

理 事 長	永盛 啓司		
副 理 事 長	木下 正善		
常 務 理 事	兼山 隆 山田 博		
理 事	佐藤 良元	薄井 宏安	榎 和美 大和田 健 綱川 正 後藤 芳文 白土 利明
監 事	住谷 勝男	安 智範	
文 化 課 文化財調査 事 務 所	次 長 兼 課 長	合田 雅人	
	副 参 事 兼 所 長	鈴木 素行	
	係 長	佐々木 義則 稲田 健一	
	嘱 託	菊池 順子 鈴鹿 八重子	

- 4 発掘調査の従事者は次の通りである。
調査員：佐々木義則
調査補助員：石井雅志，海老原四郎，菊池順子，坪内治良，廣水一真，福原雅美，矢野徳也，渡辺恵子
- 5 整理作業及び本書の作成に従事したものは、次の通りである。
石井雅志，稲田健一，海老原四郎，菊池順子，桐嶋美子，栗田昌幸，後藤みち子，佐々木義則，佐藤富美江，鈴鹿八重子，鈴木素行，坪内治良，西野陽子，廣水一真，福原雅美，矢野徳也，渡辺恵子
- 6 本書は、佐々木義則が編集した。
- 7 本書の執筆と分担は以下のとおりである。
栗田昌幸（調査経緯） 鈴木素行（弥生時代以前の遺物，IV章） 矢野徳也（岩石同定）
稲田健一（雷遺跡・堀口遺跡・市毛上坪遺跡・三反田蜷塚遺跡・西中島遺跡の古墳時代の遺物）
佐々木義則（上記以外）
- 8 発掘調査の出土資料は、ひたちなか市埋蔵文化財調査センターで一括保存している。
- 9 本書の作成にあたっては、次の方々に御協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。
相田美樹男，磯野光昭，磯前勲，打越建設有限会社，大井勇四郎，鹿志村とよ子，川崎純徳，川崎昇，川又貫一，後藤商事株式会社，小林忠夫，照沼利浩，鴛崎美由紀，前嶋聡，安敬司，柳橋美輝，和田健太郎（50 音順・敬称略）
- 10 事務局は、ひたちなか市教育委員会総務課文化振興室内に置き、組織は次のとおりである。

総 務 課 文化振興室	課 長	岩崎 龍士		
	文化振興室長	小澤 功		
	主 任	栗田 昌幸		
	主 事	住谷 光男	栗田 貴祥	栗原 久枝
		横須賀 賢		

目次

I 概要	1
II 試掘調査報告	3
1 磯崎東古墳群	3
(1) 過去の調査	3
(2) 第10次調査報告	3
2 老ノ塚遺跡	4
(1) 過去の調査	4
(2) 第2次調査報告	4
3 柴田遺跡	5
(1) 過去の調査	5
(2) 第3次調査報告	5
4 雷遺跡	11
(1) 第1次調査報告	11
(2) 第2次調査報告	13
(3) 第3次調査報告	13
5 高野富士山遺跡	14
(1) 過去の調査	14
(2) 第7次調査報告	15
6 岡田遺跡	16
(1) 過去の調査	16
(2) 第24次調査報告	16
7 西中島遺跡	16
(1) 過去の調査	16
(2) 第4次調査報告	16
8 堀口遺跡	18
(1) 過去の調査	18
(2) 第13次調査報告	18
(3) 第14次調査報告	19
9 市毛上坪遺跡	20
(1) 過去の調査	20
(2) 第13次調査報告	21
10 枯松戸遺跡	23
(1) 過去の調査	23
(2) 第3次調査報告	23
III 本調査報告	25
1 三反田蛭塚遺跡第6次調査報告	25
(1) 過去の調査	25
(2) 発掘調査の経緯	25
(3) 調査の経過	25
(4) 住居跡	26
(5) 土坑・ピット	33
(6) 縄文土器・弥生土器	33
(7) 調査区からの出土遺物	38
2 西中島遺跡第5次調査報告	39
(1) 発掘調査の経緯	39
(2) 調査の経過	39
(3) 住居跡	39
(4) 調査区からの出土遺物	44

IV 柴田遺跡における縄文時代中期 「加曾利E式」の集落跡について 47

1 はじめに	47
2 集落跡としての柴田遺跡	47
3 柴田遺跡第1次調査区の土器群	49
4 柴田遺跡と西中根遺跡	49
5 柴田遺跡と君ヶ台貝塚	51
6 中丸川流域における遺跡群の検討に向けて	55

写真図版

報告書抄録

奥付

挿 図 目 次

第1図 調査遺跡の位置	1
第2図 磯崎東古墳群の調査地点	3
第3図 磯崎東古墳群第10次調査区	4
第4図 老ノ塚遺跡の調査地点	5
第5図 老ノ塚遺跡第2次調査区	5
第6図 柴田遺跡の調査地点	6
第7図 柴田遺跡第3次調査区	6
第8図 柴田遺跡第3次調査区出土遺物(1)	7
第9図 柴田遺跡第3次調査区出土遺物(2)	8
第10図 柴田遺跡第3次調査区出土遺物(3)	9
第11図 雷遺跡の調査地点	11
第12図 雷遺跡第1次調査区	11
第13図 雷遺跡第2次調査区	12
第14図 雷遺跡第3次調査区	12
第15図 雷遺跡第3次調査区第2号住居跡出土遺物	12
第16図 雷遺跡第3次調査区出土遺物	12
第17図 高野富士山遺跡の調査地点	14
第18図 高野富士山遺跡第7次調査区	14
第19図 岡田遺跡の調査地点	15
第20図 岡田遺跡第24次調査区	15
第21図 西中島遺跡の調査地点	17
第22図 西中島遺跡第4次調査区	17
第23図 西中島遺跡第4次調査区出土遺物	17
第24図 堀口遺跡の調査地点	18
第25図 堀口遺跡第13次調査区	19

第26図	堀口遺跡第13次調査区第1B号住居跡出土遺物	19
第27図	堀口遺跡第14次調査区	20
第28図	堀口遺跡第14次調査区出土遺物	20
第29図	市毛上坪遺跡の調査地点	21
第30図	市毛上坪遺跡第13次調査区	22
第31図	市毛上坪遺跡第13次調査区第1号住居跡	22
第32図	市毛上坪遺跡第13次調査区第1号住居跡出土遺物	22
第33図	枯松戸遺跡の調査地点	23
第34図	枯松戸遺跡第3次調査区	23
第35図	枯松戸遺跡第3次調査区出土遺物	23
第36図	三反田蜆塚遺跡の調査地点	25
第37図	三反田蜆塚遺跡第6次調査区	26
第38図	三反田蜆塚遺跡第6次調査区第1号住居跡(1)	27
第39図	三反田蜆塚遺跡第6次調査区第1号住居跡(2)	28
第40図	三反田蜆塚遺跡第6次調査区第1号住居跡掘形	29
第41図	三反田蜆塚遺跡第6次調査区第1号住居跡遺物出土状況	30
第42図	三反田蜆塚遺跡第6次調査区第1号住居跡出土遺物	31
第43図	三反田蜆塚遺跡第6次調査区第11号住居跡	32
第44図	三反田蜆塚遺跡第6次調査区土坑・ピット(1)	34
第45図	三反田蜆塚遺跡第6次調査区土坑・ピット(2)	35
第46図	三反田蜆塚遺跡第6次調査区土坑・ピット出土遺物	36
第47図	三反田蜆塚遺跡第6次調査区出土縄文・弥生土器	37
第48図	三反田蜆塚遺跡第6次調査区出土遺物	38
第49図	西中島遺跡第5次調査区の位置	39
第50図	西中島遺跡第5次調査区	40
第51図	西中島遺跡第5次調査区第1号住居跡	41
第52図	西中島遺跡第5次調査区第1号住居跡掘形	42
第53図	西中島遺跡第5次調査区第1・2号住居跡遺物出土状況	43
第54図	西中島遺跡第5次調査区第1号住居跡出土遺物	44
第55図	西中島遺跡第5次調査区第2号住居跡出土遺物	45
第56図	西中島遺跡第5次調査区第1号住居跡覆土出土円面硯	45
第57図	西中島遺跡第5次調査区出土縄文・弥生土器	46
第58図	加曾利B式の参考資料	46
第59図	柴田遺跡と西中根遺跡の調査区	47
第60図	柴田遺跡第1・2次調査の遺構	47
第61図	柴田遺跡第1次調査出土土器	48
第62図	西中根遺跡第1次調査出土土器	50
第63図	藤本武による西中根貝塚のメモ	51
第64図	君ヶ台貝塚の調査区	51
第65図	君ヶ台貝塚第2次調査の遺構	51
第66図	君ヶ台貝塚第2次調査1号遺構出土土器	52
第67図	君ヶ台貝塚第2次調査3号住居址出土土器	53
第68図	君ヶ台貝塚第2次調査4号住居址出土土器	54
第69図	君ヶ台貝塚第6次調査の貝層	55
第70図	三反田蜆塚貝塚第9次調査第1号住居跡出土土器	56

表 目 次

第1表	平成25年市内遺跡発掘調査一覧	2
第2表	磯崎東古墳群調査一覧	3
第3表	高野富士山遺跡調査一覧	14
第4表	岡田遺跡調査一覧	16
第5表	西中島遺跡調査一覧	17
第6表	堀口遺跡調査一覧	19
第7表	市毛上坪遺跡調査一覧	21

写 真 目 次

写真1	遺構確認状況	25
写真2	調査風景	25
写真3	遺構確認状況	39
写真4	博物館学芸員実習生による調査風景	39

写真図版目次

図版1	試掘調査(1)
図版2	試掘調査(2)
図版3	試掘調査(3), 本調査(1)
図版4	本調査(2)

凡 例

- 遺構図及び遺物図の縮尺は、原則として以下のとおりである。
遺構図 1/20, 1/40, 1/60, 1/80
遺物図 1/4, 1/3
- 遺構図の方位は磁北を使用している。
- 遺構図にみられる「K」の記号は攪乱を示す。
- 遺物図における断面の表現は、黒塗りが須恵器であることを示す。
- 遺物観察表における法量で単位のないものはcmである。また()の付いた法量は推定値である。

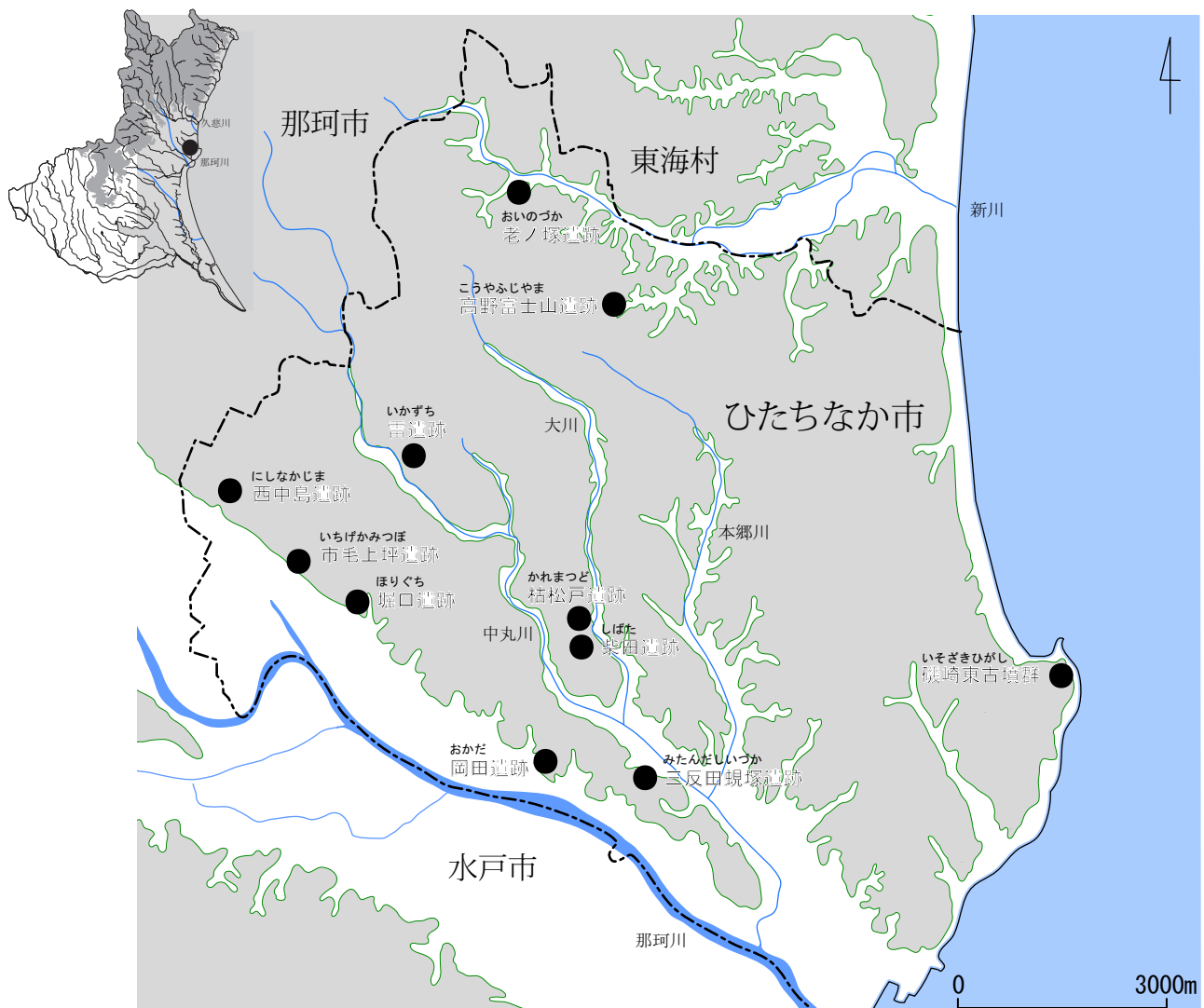
I 概要

ひたちなか市は、茨城県の中央部に位置し、面積 99.07 km²、人口約 15 万 9 千人（平成 26 年 1 月末）を擁する地方中心都市である。市域南側を東流する那珂川は栃木県那須岳に源を発し、茨城県のほぼ中央部を東西に横断し太平洋へと注ぐ全長 150km の河川であり、古くから流域の文化形成に大きな役割を果たしてきた。本市は、この那珂川河口左岸域に位置する。市域是那珂川の支流である中丸川・大川・本郷川により開析され、小支谷が発達する。市域の北側を東流する新川付近の低地は、近世まで真崎浦という入り江であったが、現在は広く水田化され、東海村との境となっている。

現在市内には、約 300 か所以上の遺跡が所在する。市域では昭和 30 年ごろから都市化が進み、周知遺跡内

における個人住宅建設件数も増加の一途をたどり、そうした事態に対応すべく、昭和 54（1979）年から、国・県の補助を受け、市教育委員会を主体とした市内遺跡発掘調査事業を継続して実施してきた。市内遺跡発掘調査は市内各地で実施されてきたこともあり、市域の埋蔵文化財の全体的状況を知る上で、その調査の成果は貴重な資料となっている。

平成 20 年度から、市内遺跡発掘調査は市教育委員会から財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社（現公益財団法人生活・文化・スポーツ公社）に委託されるようになり、公社が主体となり実施されるようになった。本年度はその 6 年目となるが、11 カ所の遺跡において、試掘調査 13 件・本調査 2 件が実施され、三反田蛭塚遺跡や西中島遺跡における古墳時代後期住居跡の調査や、柴田遺跡における縄文時代住居跡の確認等の成果を得ている。



第 1 図 調査遺跡の位置

第1表 平成25年市内遺跡発掘調査一覧

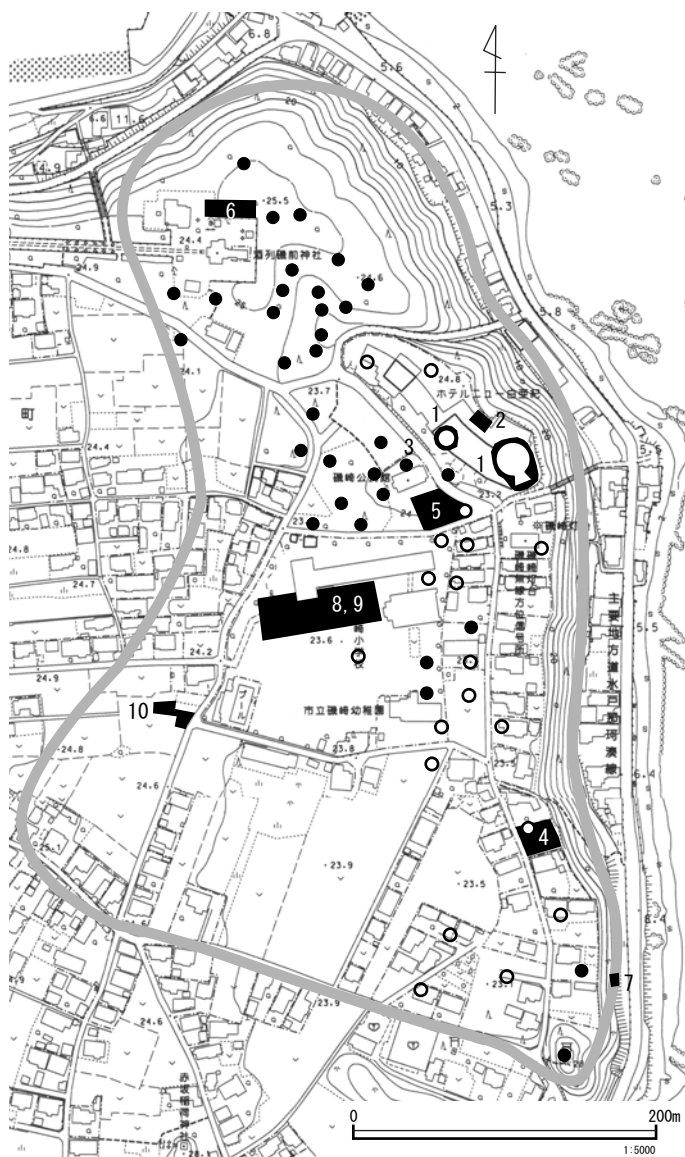
No.	遺跡名	調査回数	所在地	調査期間	調査種別	調査面積	出土遺構	主な出土遺物
1	磯崎町古墳群 磯崎町4426番1, 3	10次	磯崎町4426番1, 3	1月23日～25日	試掘調査	39㎡	古墳1基(石室1, 周溝), 溝2条(時期不明), 土坑1基(時期不明)	なし
2	老ノ塚遺跡 稲田字老ノ塚630番2, 9, 10, 11, 12, 18	2次	稲田字老ノ塚630番2, 9, 10, 11, 12, 18	1月23日～30日	試掘調査	33㎡	なし	なし
3	三反田峠塚遺跡 三反田字天王前5115番6, 1	6次	三反田字天王前5115番6, 1	2月13日～3月5日	本調査	92㎡	住居跡3基(弥生1, 古墳2), 土坑5基(江戸時代2基, 時期不明3基), ビット4基(時期不明)	縄文土器, 石鏃, 弥生土器, 土師器, 白玉, 鉄製品, 煙管, 陶磁器
4	柴田遺跡 中根字柴田5184番14	3次	中根字柴田5184番14	2月20日～3月4日	試掘調査	54㎡	住居跡3基(縄文後期), 土坑1基(時期不明), ビット9基(縄文後期3基, 時期不明6基)	縄文土器, 磨り石, 石皿, 蔽石, 打製石斧
5	雷遺跡 東石川字雷3405番	1次	東石川字雷3405番	2月28日～3月9日	試掘調査	125㎡	住居跡2基(古墳), 溝2条(時期不明), ビット4基(時期不明)	縄文土器, 土師器
6	高野富士山遺跡 高野1692番7	7次	高野1692番7	3月19日～22日	試掘調査	39㎡	なし	なし
7	岡田遺跡 三反田3608番10, 11, 12	24次	三反田3608番10, 11, 12	3月19日～22日	試掘調査	57㎡	住居跡1基(奈良・平安)	縄文土器, 土師器, 須恵器
8	雷遺跡 東石川字雷3408番4, 6, 9, 同番7, 8の一部	2次	東石川字雷3408番4, 6, 9, 同番7, 8の一部	5月28日～31日	試掘調査	40㎡	溝1条(時期不明)	なし
9	西中島遺跡 津田字向井3166番1, 6	4次	津田字向井3166番1, 6	6月18日～25日	試掘調査	51㎡	住居跡2基(古墳1, 平安1)	縄文土器, 土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 石器
10	堀口遺跡 堀口字表坪71番1	13次	堀口字表坪71番1	7月9日～12日	試掘調査	34㎡	住居跡2基(古墳)	土師器, 鉄製品
11	市毛上坪遺跡 市毛字上坪1258番1の一部	13次	市毛字上坪1258番1の一部	7月9日～16日	試掘調査	67㎡	住居跡1基(古墳前期)	土師器
12	西中島遺跡 津田字向井3166番1, 6	5次	津田字向井3166番1, 6	8月20日～9月12日	本調査	97㎡	住居跡2基(古墳1, 平安1)	土師器, 須恵器, 近代瓦・磁器
13	枯松戸遺跡 中根字枯松戸2900番28, 2991番1	3次	中根字枯松戸2900番28, 2991番1	11月28日～12月6日	試掘調査	343㎡	溝1条(時期不明)	弥生土器
14	雷遺跡 田彦字雷土1492番6	3次	田彦字雷土1492番6	11月28日～12月5日	試掘調査	22㎡	住居跡2基(古墳1, 古墳中期1)	土師器, 礫
15	堀口遺跡 堀口字新地坪163番1	14次	堀口字新地坪163番1	12月17日～21日	試掘調査	40㎡	住居跡2基(古墳中期1, 平安1), 溝2条(時期不明)	土師器, 須恵器

Ⅱ 試掘調査報告

1 磯崎東古墳群

(1) 過去の調査

磯崎東古墳群では、これまで9次の調査が実施されている。ホテルニュー白亜紀建築に伴う第1次調査においては、2段の葺石をもつ帆立貝式古墳1基（6世紀前半）、珠文鏡を出土した円墳1基（5世紀後半）が調査された。第2・3次調査では、石棺2基、横穴式石室1基が調査されたようであるが、報告書未刊のため詳細は明らかではない。第4次調査においては、自然石を積んだ横穴式石室の一部が調査されたが遺物は出土しなかった。第5次調査においては円墳の周溝の一部が調査され、7世紀第3四半期に位置づけられる須恵器平瓶



第2図 磯崎東古墳群の調査地点（数字は調査回数。●は現存する古墳）

第2表 磯崎東古墳群調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1989	調査会	本調査	古墳2	1
2	1990	那珂湊市教委	本調査	石棺2	なし
3	1991	調査会	本調査	横穴式石室1	なし
4	1995	市教委	本調査	石棺1	2
5	2004	市教委	試掘調査	周溝1	3
6	2007	市教委	試掘調査	なし	4
7	2011	市教委	試掘調査	石棺1	なし
8	2011	公社	試掘調査	石室4, 古墳1 (横穴式石室1)	5
9	2011	市教委	本調査	同上	なし

文献

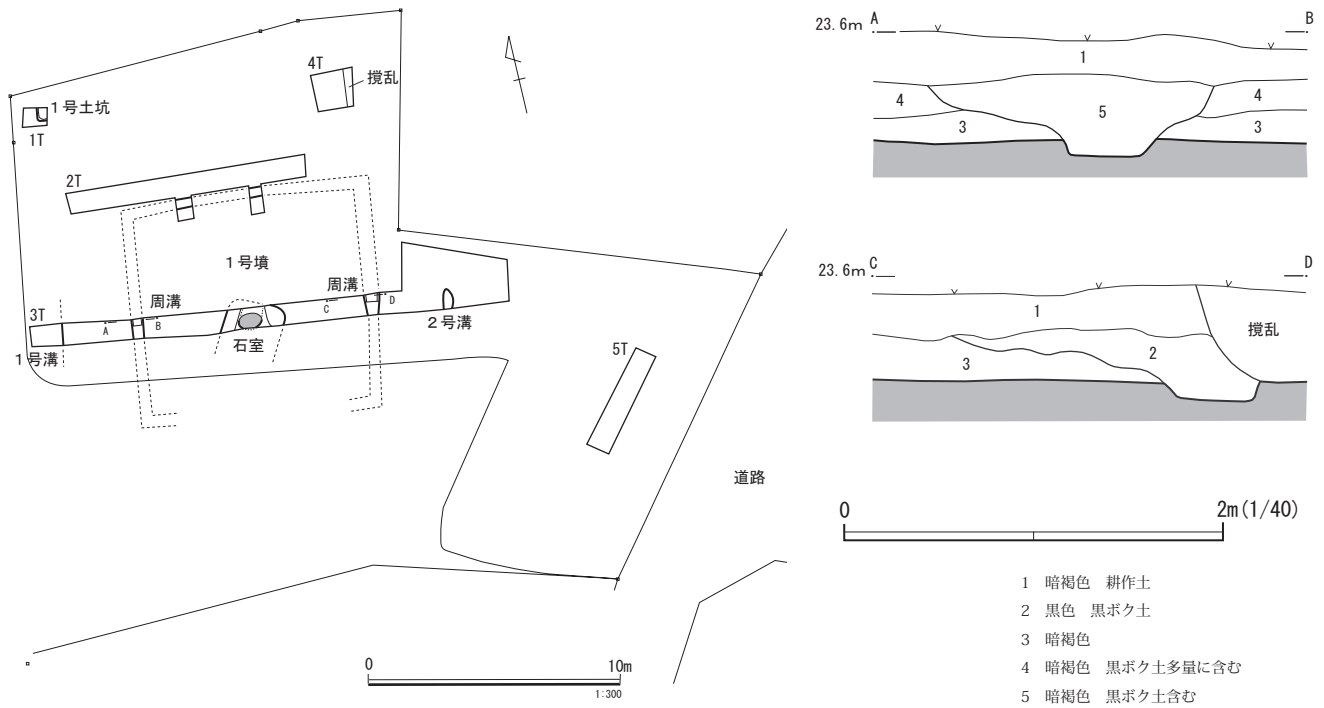
- 1 那珂湊市磯崎東古墳群
- 2 平成7年度市内遺跡発掘調査報告書
- 3 平成16年度市内遺跡発掘調査報告書
- 4 平成19年度市内遺跡発掘調査報告書
- 5 平成23年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

が出土している。第7次調査は、海岸部の崖に長軸1.5mほどの小型の石棺が露出していたため平成23年4月に実施されたものである。人骨以外の遺物はなかった。第8次調査は、磯崎小学校仮校舎建築に伴う試掘調査であり、調査の結果、長軸2m強を測る小型の石室4基と、横穴式石室を持ち周溝が巡る（周溝外径約20m）円墳1基が確認された。出土遺物は、第1号石室の確認面からフラスコ形長頸瓶を含む須恵器片が散在して出土している。なおこれらの遺構は、第9次調査において本調査が実施されている。

(2) 第10次調査報告

調査経緯 磯崎町4426-1,3に所在する土地について、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が提出された。現地は磯崎東古墳群の範囲内に当たっており、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。つづいて個人住宅の建設に係る文化財保護法93条1項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は1月23日から25日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、太平洋に望む海食崖から240mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査対象地内に5か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面まで



第3図 磯崎東古墳群第10次調査区

の深さは0.5～0.6mを測る。調査の結果、小型の石室と小規模な周溝を持つ方墳1基、溝2条、土坑1基が検出された。

第1号墳は、第3トレンチで石室の一部が確認され、その規模からみて磯崎小学校で調査された小型の石室と同様の石室であろうと思われる。石室掘形の周囲にはローム土混じりの暗褐色土が認められ、奥壁と思われる幅0.9mほどの石の一部が確認された石室部分には暗褐色土が堆積していた。石室掘形は短軸長2.3mを測り長軸長は不明である。第3トレンチの石室の両側3m強ほど離れたところで検出された2つの溝は、いずれも確認面幅0.4m、深さ0.1mほどを測る同規模の溝であることから、周溝の可能性があると考え、第2トレンチ南側2か所で周溝の検出を試みたところ、第2トレンチと平行するように幅0.4mほどの溝を確認した。これらの溝が周溝であるとするれば、石室を方形に巡るものと考えられ、第1号墳は方墳であった可能性が高い。第1号墳の時期は出土遺物がないため不明である。

なお古墳のほかに溝と土坑が検出されているが、出土遺物がなく時期は不明である。

2 老ノ塚遺跡

(1) 過去の調査

老ノ塚遺跡においては、昭和58年8月に試掘調査(第1次調査)が実施され、土師器・須恵器片が出土したようであるが、調査の詳細は不明である。

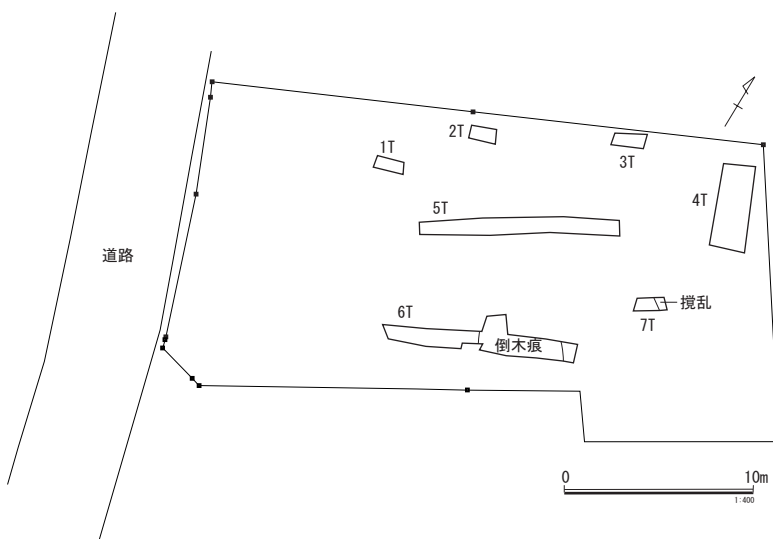
(2) 第2次調査報告

調査経緯 稲田字老ノ塚630番2外5筆に所在する土地について、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が提出された。現地は老ノ塚遺跡の範囲内に当たっており、調査したところ過去に開発行為がない土地であったため教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法93条1項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は1月23日～30日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、新川上流域の支谷に臨む台地縁部から350mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は篠藪であった。調査区東方は林地となっており、そこに北から南に入り込む浅い谷地形が認



第4図 老ノ塚遺跡の調査地点 (数字は調査回数)



第5図 老ノ塚遺跡第2次調査区

められる。調査は篠藪を刈り払ったのち、調査対象地内に7か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.5～0.7mを測る。調査の結果、第6トレンチで大きな倒木痕が検出されたのみで、遺構・遺物は確認されなかった。

3 柴田遺跡

(1) 過去の調査

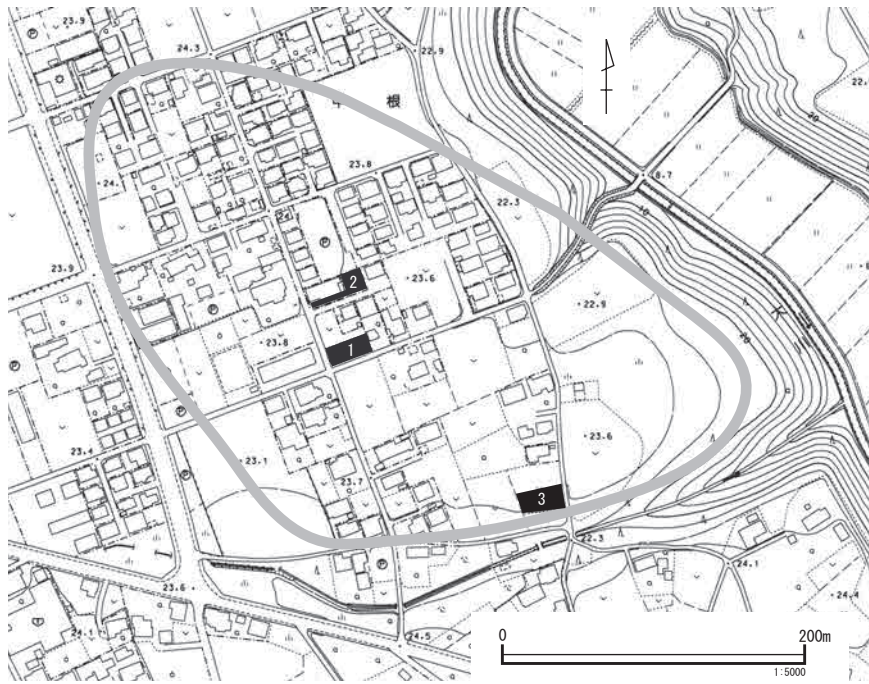
柴田遺跡においては、これまで2次の調査が実施され、縄文時代中期の住居跡が3基調査されている。これまでの調査区は、遺跡中心部に位置するものであるが、今回の試掘調査区は遺跡南端部であり、そこでも縄文時代後期の住居跡が検出されたことをみると、柴田遺跡では遺跡全面にわたって、かなりの密度で縄文時代の住居跡が展開しているものと考えられる。

(2) 第3次調査報告

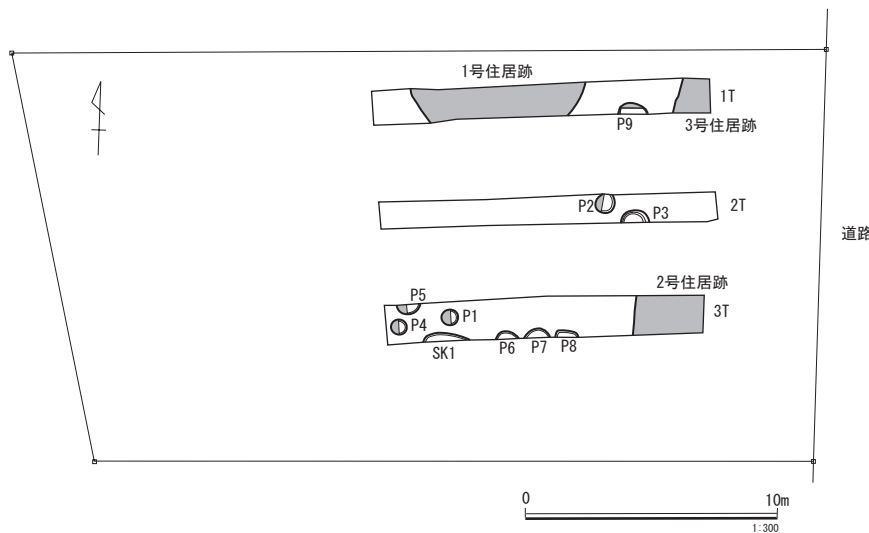
調査経緯 中根字柴田5184番

14に所在する土地について、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が提出された。現地は柴田遺跡の範囲内に当たっており、調査したところ過去に開発行為がない土地であったため教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法93条1項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は2月20日～3月4日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、大川が流れる谷に



第6図 柴田遺跡の調査地点 (数字は調査回数)



第7図 柴田遺跡第3次調査区

臨む台地縁辺部から150mほど離れた地点に位置する。調査地は平坦な地形を呈し、調査時は畑地であった。その南東部には、東方の谷から小さな谷が西方に入り込んでいる。今回の調査は、3か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.2～0.3mを測る。調査の結果、住居跡3基(縄文時代後期)、土坑1基(時期不明)、ピット9基(縄文後期3期、時期不明6基)が検出された。住居跡からは縄文時代後期の土器片が出土している。また縄文時代のピット(P1・2・3)からは土器片のほか、磨り石や石皿が出土した。なお表土より、縄文土器片、敲石、打製石斧が出土している。

遺物説明

第8図

- 1 出土位置: pit3 覆土 注記: pit3 フク土 時代時期: 縄文時代中期(加曾利E4式) 器種: 把手付深鉢形土器 法量: 胴径214mm(残存率11%) 文様: 橋状把手, 無節縄文(L)
- 2 出土位置: 1住覆土 注記: 1住フク土 時代時期: 縄文時代中期(加曾利E4式) 器種: 深鉢形土器 法量: 口径170mm(残存率5%) 文様: 隆起線文, 単節縄文(LR) 備考: 器外面炭化物付着
- 3 出土位置: 1住覆土 注記: 1住フク土 時代時期: 縄文時代中期(加曾利E4式) 器種: 深鉢形土器 法量: 最大径138mm(残存率16%) 文様: 隆起線文, 単節縄文(RL) 備考: 器外面炭化物付着
- 4 出土位置: 1住覆土 注記: 1住フク土 時代時期: 縄文時代中・後期 器種: 深鉢形土器 法量: 最大径114mm(残存率18%) 文様: 単節縄文(LR) 備考: 器内面炭化物付着
- 5 出土位置: pit1 覆土 注記: pit1 フク土 時代時期: 縄文時代中・後期 器種: 深鉢形土器 法量: 最大径150mm(残存率43%)
- 6 出土位置: pit2 覆土 注記: pit2 フク土 時代時期: 縄文時代中期 器種: 鉢形土器か 法量: 底径70mm(残存率100%) 文様: 単節縄文(LR)
- 7 出土位置: 1住覆土 注記: 1住フク土 時代時期: 縄文時代中・後期 器種: 深鉢形土器 法量: 底径70mm(残存率58%)
- 8 出土位置: pit2 覆土 注記: pit2 フク土 時代時期: 縄文時代中期 器種: 深鉢形土器

法量: 底径70mm(残存率20%)

9 出土位置: 3トレ表土 注記: 3T表土 時代時期: 縄文時代中期 器種: 深鉢形土器 法量: 底径72mm(残存率25%) 備考: 器内面が発泡状に剥落

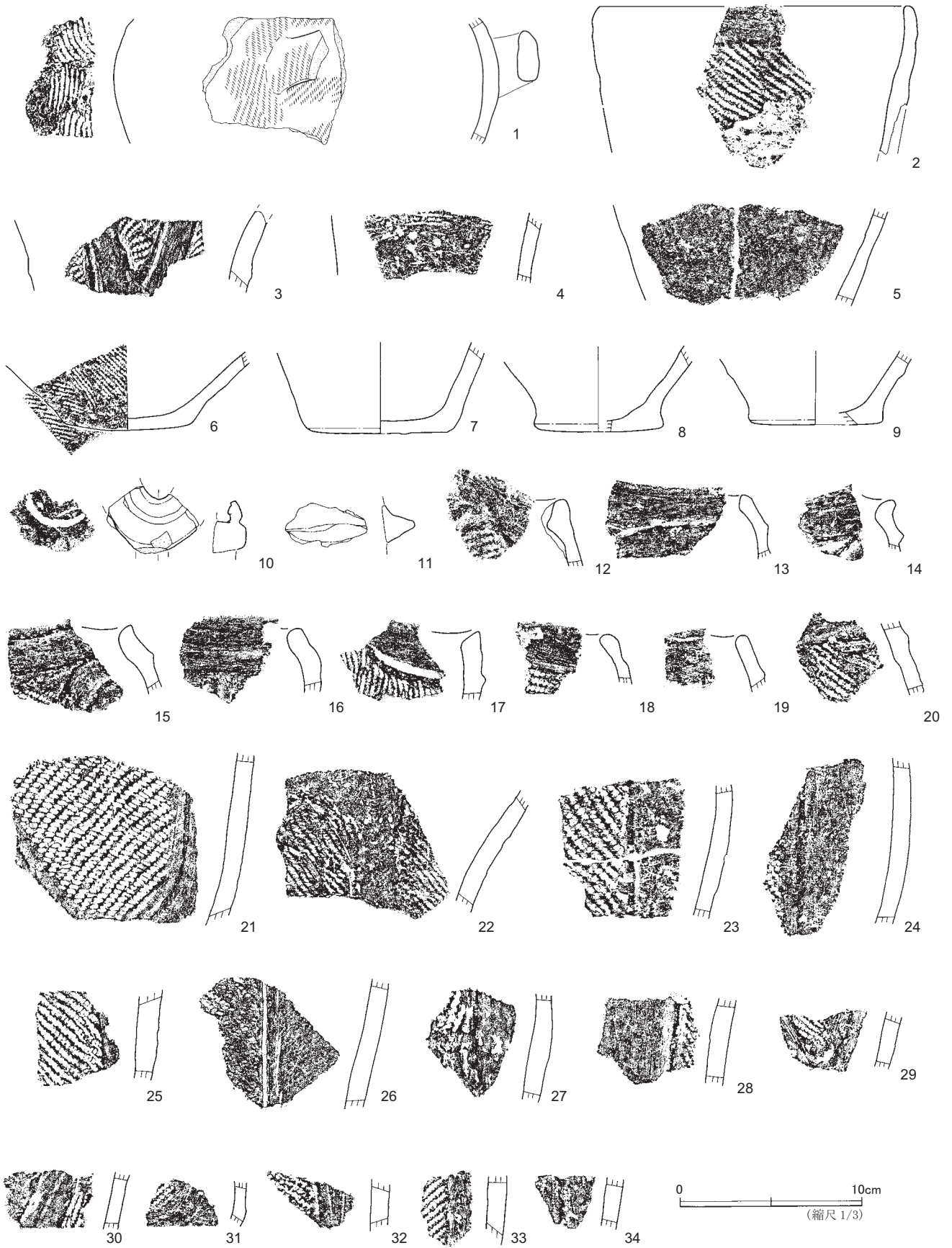
10 出土位置: 2住覆土 注記: 2住フク土 時代時期: 縄文時代後期 器種: 把手部分 文様: 沈線文

11 出土位置: 1住覆土 注記: 1住フク土 時代時期: 縄文時代中期

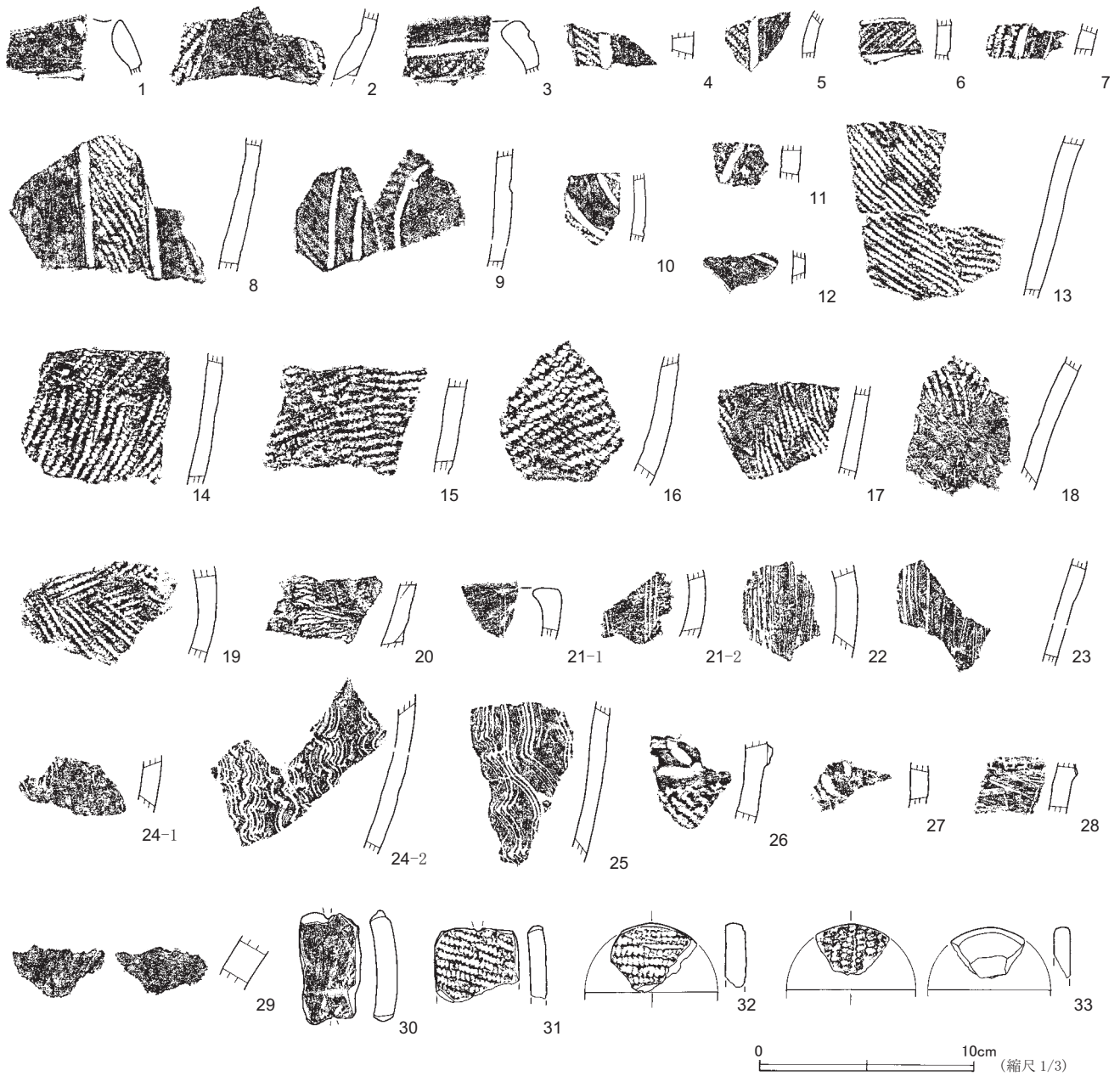
12 出土位置: pit1 覆土 注記: pit1 フク土 時代時期: 縄文時代中期(加曾利E4式) 器種: 深鉢形土器 文様: 隆起線文, 単節縄文(RL), 口縁部器内面に突起

13 出土位置: 1住覆土 注記: 1住フク土 時代時期: 縄文時代中期(加曾利E4式) 器種: 深鉢形土器 文様: 隆起線文 備考: 胎土に白雲母を多量に含む

14 出土位置: 1トレ表土 注記: 1T表土 時代時期: 縄文時代中期(加



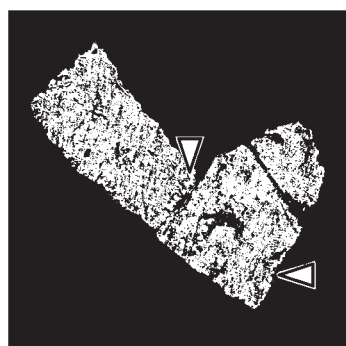
第8図 柴田遺跡第3次調査区出土遺物 (1)



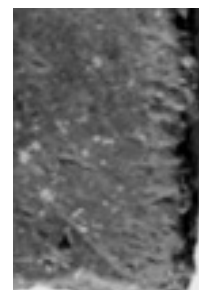
24-1 の内面



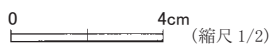
(写真倍率 ×2)



24-2 の内面



(写真倍率 ×2)



第9図 柴田遺跡第3次調査区出土遺物(2)

曾利E 4式) 器種: 深鉢形土器 文様: 隆起線文

15 出土位置: pit3 覆土 注記: pit3 フク土 時代時期: 縄文時代中期

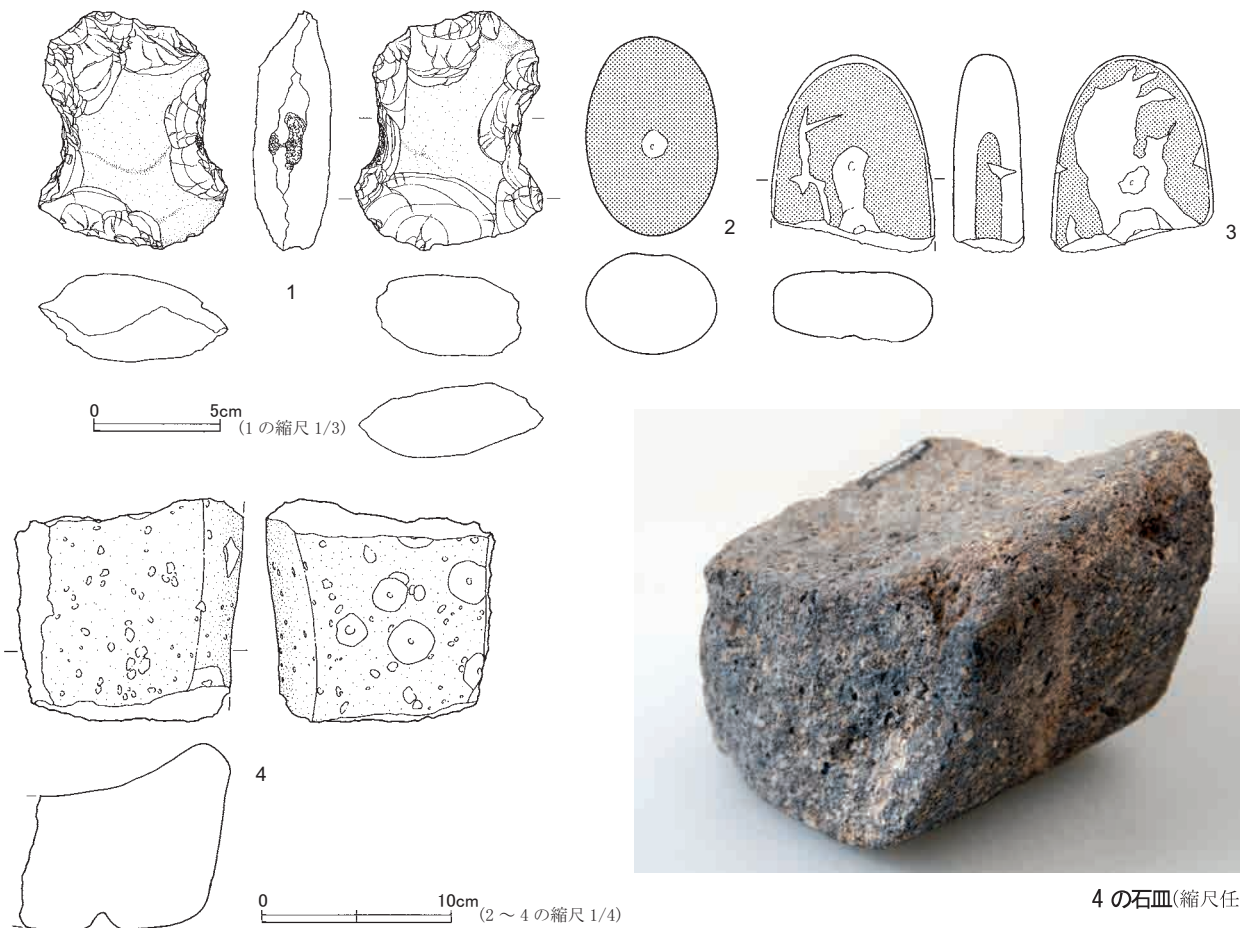
(加曾利E 4式) 器種: 深鉢形土器 文様: 隆起線文, 単節縄文 (LR)

備考: 胎土に金雲母を多量に含む

16 出土位置: 表採 注記: 表採 時代時期: 縄文時代中期(加曾利E

4式) 器種: 深鉢形土器 文様: 隆起線文 備考: 胎土に金雲母を多量に含む

17 出土位置: pit3 覆土 注記: pit3 フク土 時代時期: 縄文時代中期



第10図 柴田遺跡第3次調査区出土遺物(3)

(加曾利E4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,単節縄文(LR)
 18 出土位置:1住覆土 注記:1住フク土 時代時期:縄文時代中期(加曾利E4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,単節縄文(LR)
 19 出土位置:pit3覆土 注記:pit3フク土 時代時期:縄文時代中期(加曾利E4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文
 20 出土位置:2住覆土 注記:2住フク土 時代時期:縄文時代中期(加曾利E4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,単節縄文(LR)
 21 出土位置:1住覆土 注記:1住フク土 時代時期:縄文時代中期(加曾利E4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,単節縄文(LR) 備考:胎土に金雲母を多量に含む
 22 出土位置:表採 注記:表採 時代時期:縄文時代中期(加曾利E4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,無節縄文(L) 備考:器内外面炭化物付着
 23 出土位置:1住覆土 注記:1住フク土 時代時期:縄文時代中期(加曾利E4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,単節縄文(LR)
 24 出土位置:1住覆土 注記:1住フク土 時代時期:縄文時代中期(加曾利E4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,単節縄文(LR) 備考:胎土に金雲母を多量に含む
 25 出土位置:1トレ表土 注記:1T表土 時代時期:縄文時代中期(加曾利E4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,単節縄文(LR)
 26 出土位置:3トレ表土 注記:3T表土 時代時期:縄文時代中期(「続E4式」) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,沈線文,単節縄文(LR)

27 出土位置:1住覆土 注記:1住フク土 時代時期:縄文時代中期(加曾利E4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,複節縄文(LRL)
 28 出土位置:3トレ表土 注記:3T表土 時代時期:縄文時代中期(加曾利E4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,単節縄文(LR)
 29 出土位置:pit3覆土 注記:pit3フク土 時代時期:縄文時代中期(加曾利E4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,単節縄文(LR)
 30 出土位置:pit2覆土 注記:pit2フク土 時代時期:縄文時代中期(加曾利E4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,単節縄文(LR)
 31 出土位置:3住覆土 注記:3住フク土 時代時期:縄文時代中期(加曾利E4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,単節縄文(LR) 備考:胎土に白雲母を多量に含む
 32 出土位置:pit3覆土 注記:pit3フク土 時代時期:縄文時代中期(加曾利E4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,複節縄文(LRL)
 33 出土位置:表採 注記:表採 時代時期:縄文時代中期(加曾利E4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,単節縄文(LR)
 34 出土位置:pit3覆土 注記:pit3フク土 時代時期:縄文時代中期(加曾利E4式) 器種:深鉢形土器 文様:隆起線文,単節縄文(LR)

第9図

1 出土位置:2住覆土 注記:2住フク土 時代時期:縄文時代中期(加曾利E4式) 器種:深鉢形土器 文様:沈線文 備考:胎土に白雲母を含む
 2 出土位置:pit3覆土 注記:pit3フク土 時代時期:縄文時代中期(加

曾利 E 4 式) 器種:深鉢形土器 文様:沈線文, 単節縄文 (RL) 備考:胎土に金雲母を含む

3 出土位置:pit1 覆土 注記:pit1 フク土 時代時期:縄文時代後期(称名寺式) 器種:深鉢形土器 文様:沈線文, 単節縄文 (LR)

4 出土位置:3 トレ表土 注記:3T 表土 時代時期:縄文時代後期(称名寺式) 器種:深鉢形土器 文様:沈線文, 単節縄文 (LR)

5 出土位置:2 トレ表土 注記:2T 表土 時代時期:縄文時代後期(称名寺式) 器種:深鉢形土器 文様:沈線文, 単節縄文 (LR)

6 出土位置:1 トレ表土 注記:1T 表土 時代時期:縄文時代後期(称名寺式) 器種:深鉢形土器 文様:沈線文, 単節縄文 (LR)

7 出土位置:2 トレ表土 注記:2T 表土 時代時期:縄文時代後期(称名寺式) 器種:深鉢形土器 文様:沈線文, 単節縄文 (LR)

8 出土位置:pit3 覆土 注記:pit3 フク土 時代時期:縄文時代後期(称名寺式) 器種:深鉢形土器 文様:沈線文, 単節縄文 (LR) 備考:器外面炭化物付着

9 出土位置:pit2 覆土 注記:pit2 フク土 時代時期:縄文時代後期(称名寺式) 器種:深鉢形土器 文様:沈線文, 単節縄文 (LR)

10 出土位置:3 トレ表土 注記:3T 表土 時代時期:縄文時代後期(称名寺式) 器種:深鉢形土器 文様:沈線文, 縄文 (LR)

11 出土位置:3 トレ表土 注記:3T 表土 時代時期:縄文時代後期(称名寺式) 器種:深鉢形土器 文様:沈線文, 縄文(原形不明)

12 出土位置:2 トレ表土 注記:2T 表土 時代時期:縄文時代後期(称名寺式) 器種:深鉢形土器 文様:沈線文, 縄文(原形不明)

13 出土位置:pit1 覆土, 3 トレ表土 注記:pit1 フク土, 3T 表土 時代時期:縄文時代中・後期 器種:深鉢形土器 文様:単節縄文 (LR)

14 出土位置:3 トレ表土 注記:3T 表土 時代時期:縄文時代中・後期 器種:深鉢形土器 文様:単節縄文 (LR)

15 出土位置:pit1 覆土 注記:pit1 フク土 時代時期:縄文時代中・後期 器種:深鉢形土器 文様:単節縄文 (LR)

16 出土位置:pit3 覆土 注記:pit3 フク土 時代時期:縄文時代中・後期 器種:深鉢形土器 文様:単節縄文 (LR) 備考:胎土に金雲母を多量に含む

17 出土位置:pit3 覆土 注記:pit3 フク土 時代時期:縄文時代中・後期 器種:深鉢形土器 文様:単節縄文 (LR)

18 出土位置:3 住覆土 注記:3 住フク土 時代時期:縄文時代中・後期 器種:深鉢形土器 文様:単節縄文 (RL)

19 出土位置:1 トレ表土 注記:1T 表土 時代時期:縄文時代中・後期 器種:深鉢形土器 文様:単節縄文 (LR) 備考:羽状縄文は同一原体の縦回転と横回転による

20 出土位置:pit1 覆土 注記:pit1 フク土 時代時期:縄文時代中・後期 器種:深鉢形土器 文様:無節縄文 (R) か

21 出土位置:pit3 覆土 注記:pit3 フク土 時代時期:縄文時代中・後期 器種:深鉢形土器 文様:条線文(直状)

22 出土位置:表探 注記:表探 時代時期:縄文時代中・後期 器種:深鉢形土器 文様:条線文(直状)

23 出土位置:pit2 覆土 注記:pit2 フク土 時代時期:縄文時代中・後期 器種:深鉢形土器 文様:条線文(直状)

24 出土位置:pit2 覆土 注記:pit2 フク土 時代時期:縄文時代中・後期 器種:深鉢形土器 文様:条線文(波状) 備考:器内面及び断面

にげっ歯類が齧ったような痕跡あり

25 出土位置:pit2 覆土 注記:pit2 フク土 時代時期:縄文時代中・後期 器種:深鉢形土器 文様:条線文(波状)

26 出土位置:1 住覆土 注記:1 住フク土 時代時期:縄文時代後期 器種:深鉢形土器 文様:隆帯, 隆帯上刻み(棒状), 単節縄文 (LR)

27 出土位置:1 住覆土 注記:1 住フク土 時代時期:縄文時代後期 器種:深鉢形土器 文様:隆帯, 隆帯上刻み(籠状), 沈線文もしくは条線文

28 出土位置:pit2 覆土 注記:pit2 フク土 時代時期:縄文時代後期 器種:深鉢形土器 文様:刺突文

29 出土位置:3 トレ表土 注記:3T 表土 時代時期:縄文時代中期 器種:浅鉢形土器 備考:胎土に金雲母を多量に含む, 器内面に赤彩か

30 出土位置:3 トレ表土 注記:3T 表土 時代時期:縄文時代中期 器種:土器片錘 法量:長さ 51 mm, 幅 28 mm, 厚さ 11 mm 重量:20.1g 備考:加曾利 E 4 式の破片を素材とする, 側縁には部分的に研磨痕が残る

31 出土位置:pit1 覆土 注記:pit1 フク土 時代時期:縄文時代中・後期 器種:土器片錘 法量:長さ 34 mm, 幅 39 mm, 厚さ 8 mm 重量:13.8g 備考:側縁のほぼ全体に研磨痕が残る, 土器片の胎土には金雲母を多量に含む

32 出土位置:1 住覆土 注記:1 住フク土 時代時期:縄文時代中・後期 器種:土製円盤 法量:長さ 32 mm, 幅 40 mm, 厚さ 9 mm 重量:11.4g 備考:側縁のほぼ全体に研磨痕が残る, 直径は 60 mm ほどであったと推定される

33 出土位置:pit1 覆土 注記:pit1 フク土 時代時期:縄文時代中・後期 器種:有孔土製円盤 法量:長さ 24 mm, 幅 34 mm, 厚さ 8 mm 重量:6.2g 備考:側縁のほぼ全体に研磨痕が残る, 直径は 540 mm ほどであったと推定される, 器内面側から穿孔されている, 土器片の胎土には金雲母を多量に含む

第 10 図

1 出土位置:2 トレ表土 注記:2T 表土 時代時期:縄文時代中・後期 器種:打製石斧(分銅形) 石材:ホルンフェルス 法量:長さ 88 mm, 幅 72 mm, 厚さ 31 mm 重量:260.8g 備考:両面に自然面が残る, 右側面に敲打痕が形成されている

2 出土位置:pit3 覆土 注記:pit3 フク土 時代時期:縄文時代中・後期 器種:磨石・敲石 石材:砂岩 法量:長さ 105 mm, 幅 69 mm, 厚さ 53 mm 重量:508.2g 備考:両面のほぼ全体に磨痕が残る, 片面の中央 1 箇所には敲打痕が形成されている

3 出土位置:2 トレ表土 注記:2T 表土 時代時期:縄文時代中・後期 器種:磨石・敲石 石材:砂岩 法量:長さ 104 mm, 幅 86 mm, 厚さ 37 mm 重量:444.8g 備考:表裏面と両側面に磨痕が残る, 表裏面とも中央付近の 2 箇所に敲打痕が集中して形成されている, 後世の耕作に伴うガジリあり

4 出土位置:pit3 覆土 注記:pit3 フク土 時代時期:縄文時代中・後期 器種:石皿・多穴石 石材:多孔質安山岩 法量:長さ 118 mm, 幅 120 mm, 厚さ 102 mm 重量:1973.8g 備考:石皿の使用面は平滑, 裏面の凹穴の断面形状は整った円錐形を呈する

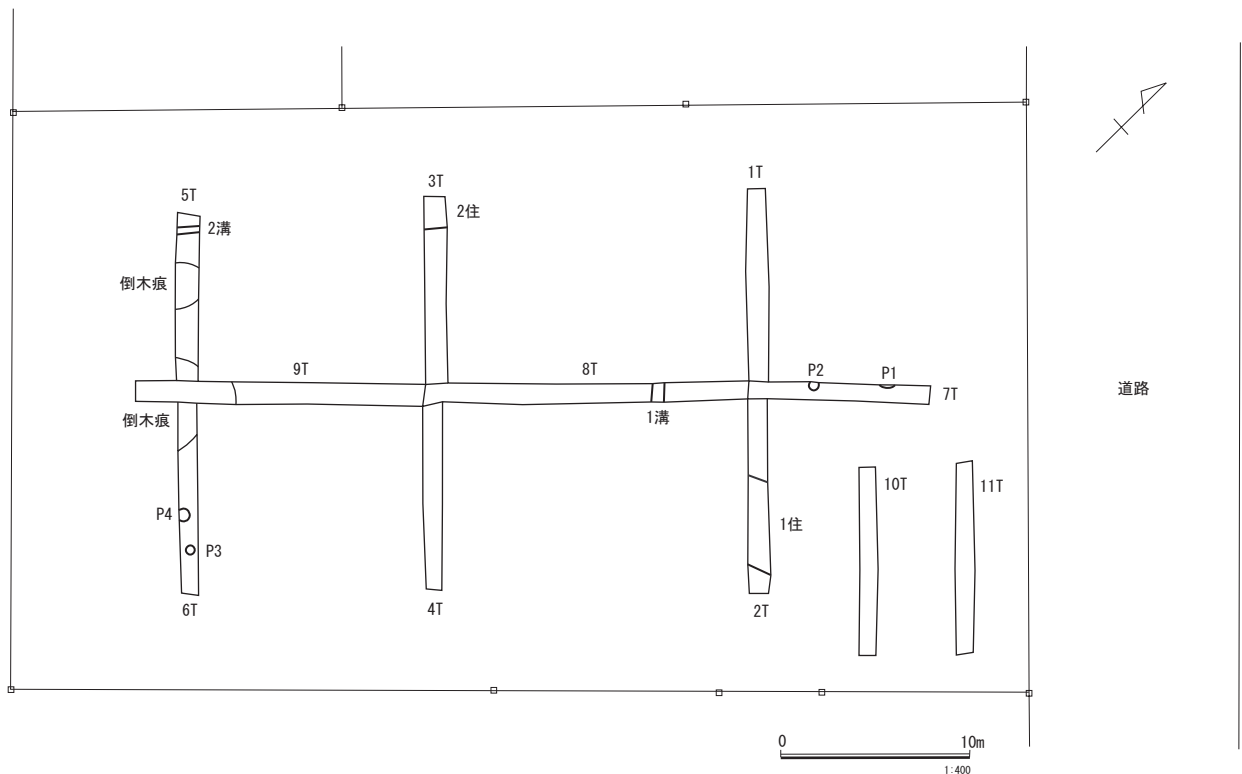
4 雷遺跡

(1) 第1次調査報告

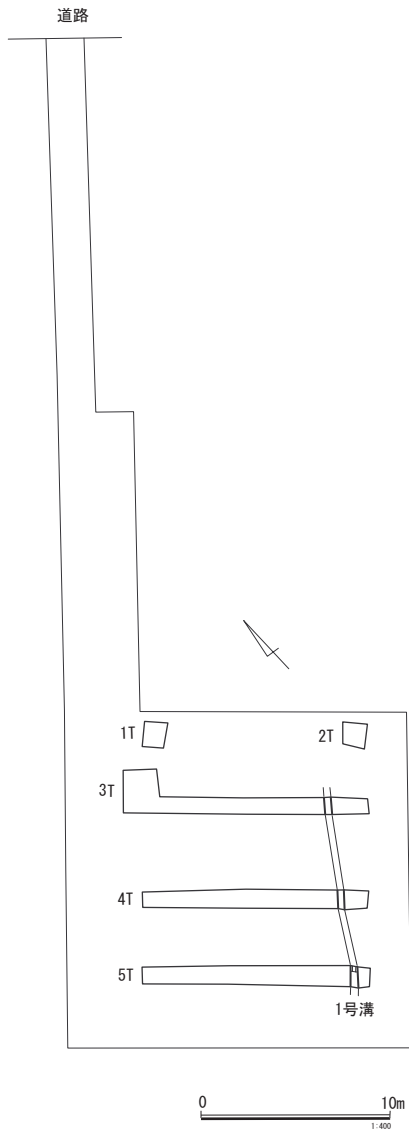
調査経緯 東石川字雷 3405 に所在する土地について宅地造成の計画があり「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が提出された。現地は雷遺跡に当たっており、踏査を行なったところ、土師器片などの遺物の散布を認めた。教育委員会は建築・土木工事を行なう際は事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。続いて、文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 2 月 28 日～3 月 9 日にかけて行われた。



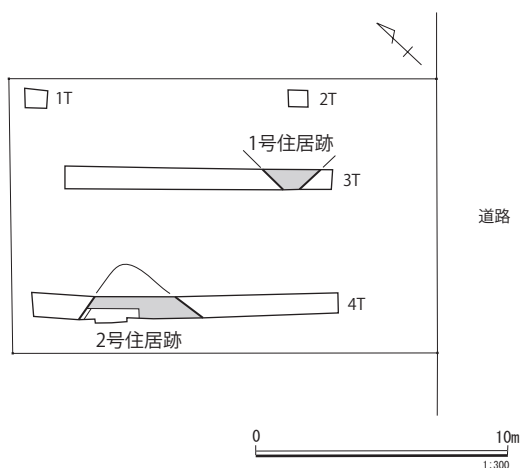
第 11 図 雷遺跡の調査地点 (数字は調査回数)



第 12 図 雷遺跡第 1 次調査区

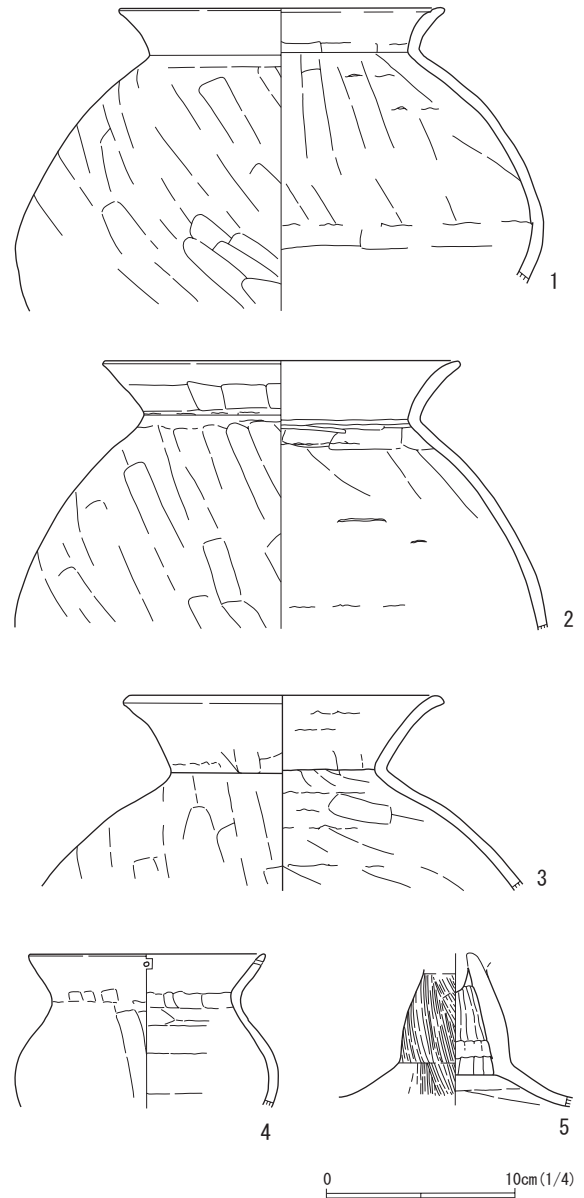


第13図 雷遺跡第2次調査区

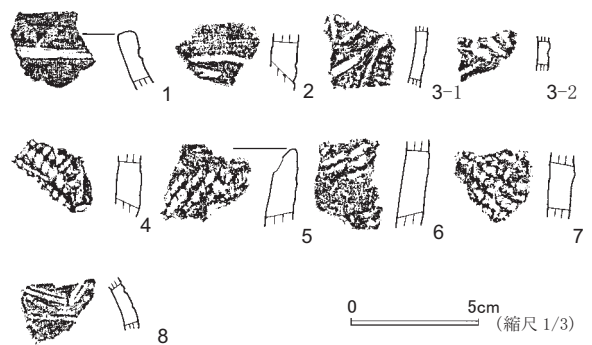


第14図 雷遺跡第3次調査区

調査結果 調査地は、中丸川が流れる谷に臨む台地縁辺部から150mほど離れた地点に位置する。調査地は平坦な地形を呈し、調査時は畑地であった。遺跡東部には、中丸川の谷から浅い谷が東北方に入り込んでおり、



第15図 雷遺跡第3次調査区第2号住居跡出土遺物



第16図 雷遺跡第3次調査区出土遺物

そこは大島公園として市民の憩いの場となっており、雷池という大きな溜池が存在している。

今回の調査は、11か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.5～0.7

mを測る。調査の結果、住居跡2基（古墳時代）、溝2条（時期不明）、ピット4基（時期不明）、倒木痕2か所を確認した。住居跡からは古墳時代の土師器片が出土している。なお縄文土器片は倒木痕付近から出土した。

(2) 第2次調査報告

調査経緯 東石川字雷 3408番4外4筆に所在する土地について個人住宅建築の計画があり「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が提出された。現地は雷遺跡に当たっており、踏査を行なったところ、土師器片などの遺物の散布を認めた。教育委員会は建築・土木工事を行なう際は事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。続いて、文化財保護法93条1項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は5月28日～5月31日にかけて行われた。

調査結果 今回の調査地は、第1次調査区の隣接地であり、調査時は荒地であった。調査は5か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.4～0.7mを測る。調査の結果、溝1条（時期不明）を確認した。遺物は出土していない。

(3) 第3次調査報告

調査経緯 田彦字雷土 1492番6に所在する土地について個人住宅建築の計画があり「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が提出された。現地は雷遺跡に当たっており、踏査を行なったところ、土師器片などの遺物の散布を認めた。教育委員会は建築・土木工事を行なう際は事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。続いて、文化財保護法93条1項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は11月28日～12月5日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、中丸川が流れる谷に臨む台地縁辺部から70mほど離れた地点に位置する。調査地は平坦な地形を呈し、調査時は荒地であった。

調査は4か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.3～0.4mを測

る。調査の結果、住居跡2基（古墳時代）を確認した。第1号住居跡は、床面まで掘り下げた第2トレンチから古墳時代の土師器片が出土したが、破片が少量出土したのみであったため詳細な時期は不明である。第2号住居跡は、床面の深さを確認するために覆土の一部掘り下げを実施したところ、土師器甕や高杯等が出土した。それら土器からみて第2号住居跡は古墳時代中期と思われる。なお遺構覆土や表土中から縄文時代中・後期の土器片も少量出土した。

遺物説明

第15図

1 台帳:P2～5・7～9・12、フク土 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部90%、胴部上位70% 法量:口径17.3、胴部最大径27.9、器高(16.1) 色調:橙～にぶい褐～褐色 胎土:礫(白微)、砂(白多、透多、黒多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ・ナデ。使用痕:— 備考:—

2 台帳:P1・13、フク土 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部100%、胴部上位30% 法量:口径19.0、器高(14.3) 色調:橙～にぶい褐～褐色 胎土:砂(白多、透多、黒多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ・ナデ。使用痕:— 備考:—

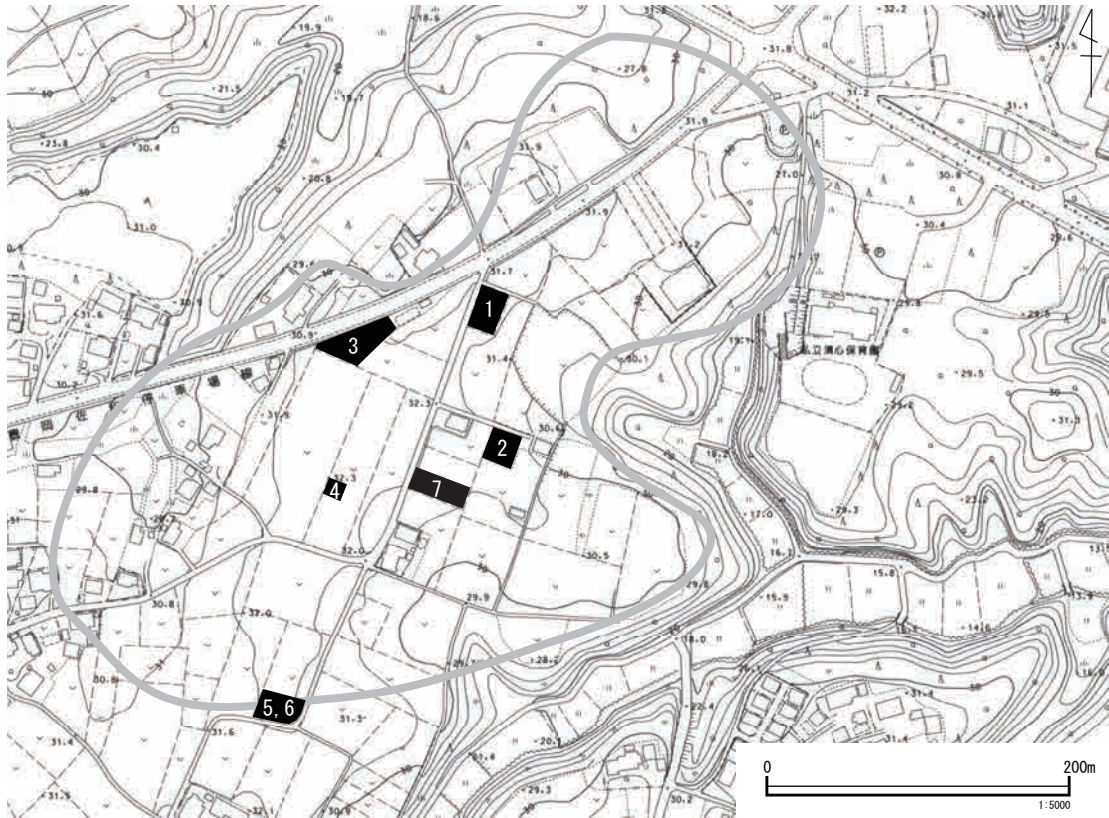
3 台帳:P6・9～12、フク土 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部90%、胴部上位20% 法量:口径17.0、器高(10.3) 色調:外面橙～にぶい褐～褐色、内面橙～にぶい褐～褐色 胎土:小石(白微)、礫(白少)、砂(白多、透多、黒多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ・ナデ。使用痕:外面の一部に炭化物の付着がみられる。備考:—

4 台帳:フク土 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部80%、胴部上位10% 法量:口径12.6、器高(8.2) 色調:外面橙～にぶい褐～褐色、内面にぶい黄橙色 胎土:小石(白微)、礫(白微、灰微)、砂(白多、透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ・ナデ。口縁部に径2mmの孔が1つある。孔は焼成前穿孔。使用痕:外面が二次焼成を受けている。備考:—

5 台帳:P3 材質:土師器 器種:高杯 残存:脚部100%、裾部20% 法量:器高(8.1) 色調:黄橙～にぶい黄褐色 胎土:砂(白多、透多、黒少) 焼成:良好 技法等:外面ハケ調整。内面脚部指ナデ、裾部ヘラナデ。脚部と杯部の接合はソケット状。使用痕:— 備考:—

第16図

1 出土位置:2住覆土 注記:2住フク土 時代時期:縄文時代後期



第 17 図 高野富士山遺跡の調査地点 (数字は調査回数)

第 3 表 高野富士山遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1982	勝田市教委	試掘調査	なし	1
2	1989	勝田市教委	試掘調査	住居跡 1 (古墳)	2
3	2001	市教委	本調査	土坑墓 1 (近世), 住居跡 1 (古墳)	3
4	2007	市教委	試掘調査	なし	4
5	2010	公社	試掘調査	住居跡 3 (平安), 土坑 2	5
6	2010	公社	本調査	住居跡 1 (平安)	5

文献

- 1 昭和 57 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 2 平成元年度勝田市内遺跡発掘調査報告書
- 3 平成 13 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 4 平成 19 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 5 平成 22 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

文様：沈線文 備考：器外面赤彩か

2 出土位置：4 トレ表土 注記：4T 表土 時代時期：

縄文時代後期 文様：沈線文，刺突文

3 出土位置：4 トレ表土 注記：4T 表土 時代時期：

縄文時代後期 文様：沈線文，単節縄文 (RL か)

4 出土位置：2 住覆土 注記：2 住フク土 時代時期：

縄文時代中・後期 文様：沈線文，単節縄文 (RL)

5 出土位置：4 トレ表土 注記：4T 表土 時代時期：

縄文時代後期 文様：無節縄文 (L)

6 出土位置：1 住覆土 注記：1 住フク土 時代時期：

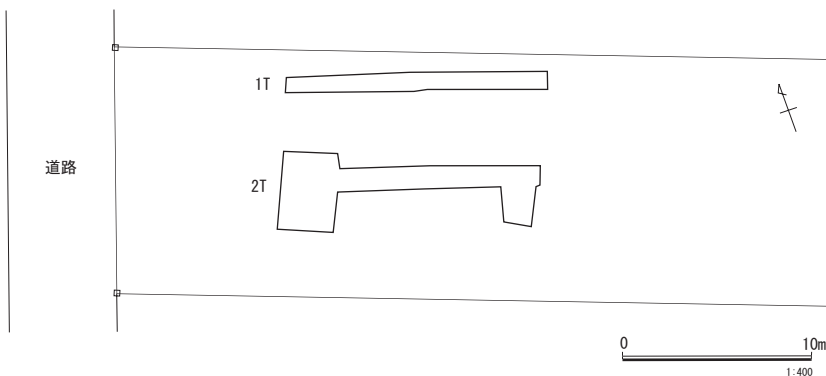
縄文時代中・後期 文様：無節縄文 (L)

7 出土位置：2 住覆土 注記：2 住フク土 時代時期：

縄文時代中・後期 文様：単節縄文 (RL)

8 出土位置：2 住覆土 注記：2 住フク土 時代時期：

弥生時代中期 文様：平行沈線文 (半截竹管)

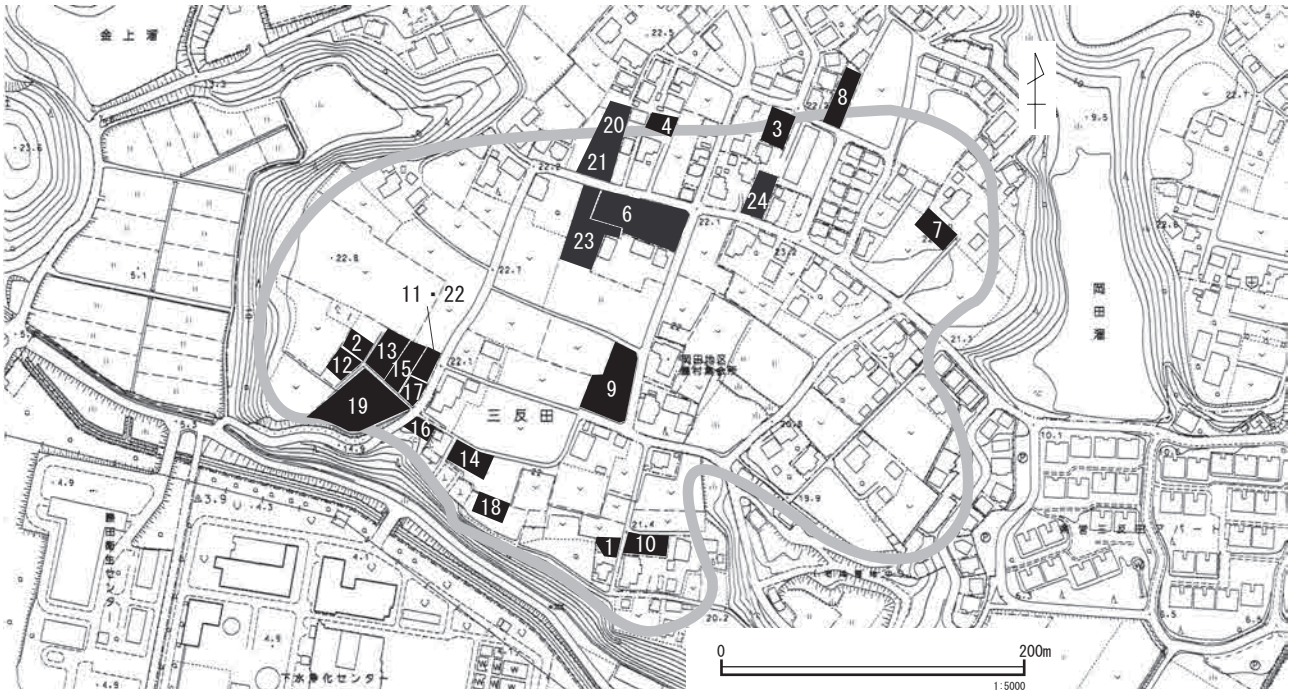


第 18 図 高野富士山遺跡第 7 次調査区

5 高野富士山遺跡

(1) 過去の調査

高野富士山遺跡においては、これまでに 6 回の調査が実施され、古墳時代の



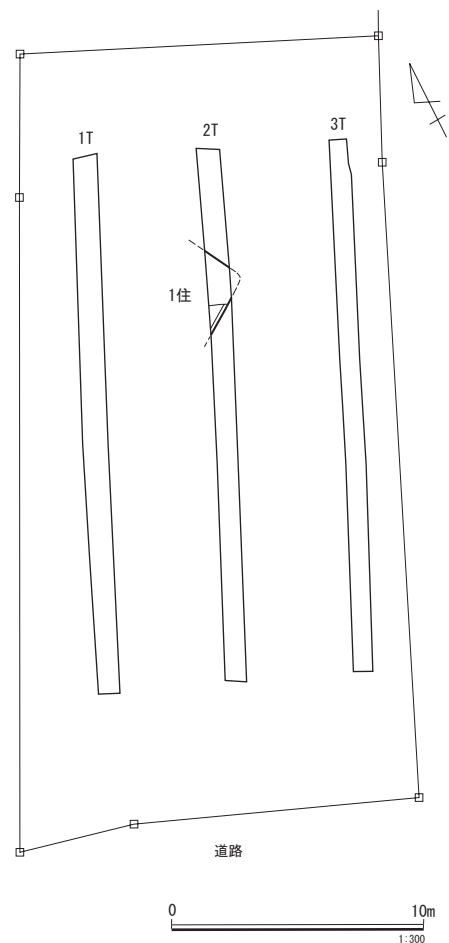
第19図 岡田遺跡の調査地点（数字は調査回数）

住居跡が2基、平安時代の住居跡が3基確認されている。遺跡中央部では古墳時代の住居跡が検出され、平安時代の住居跡は遺跡南端部で検出されており、時代によって住居跡の分布範囲を異にしている可能性がある。

(2) 第7次調査報告

調査経緯 高野 1692 番 7 に所在する土地について個人住宅建築の計画があり「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が提出された。現地は高野富士山遺跡に当たっており、踏査を行なったところ、土師器片などの遺物の散布を認めた。教育委員会は建築・土木工事を行なう際は事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。続いて、文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 3 月 19 日～ 22 日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、新川が流れる旧真崎浦の低地から南西方向に入り込む谷から 130 m ほど離れた地点に位置する。調査地は南東方向に傾斜する地形を呈し、調査時は畑地であった。今回の調査は、2 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.6 ～ 0.7 m を測る。調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。



第20図 岡田遺跡第24次調査区

第4表 岡田遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	主な遺構	文献
1	1982	勝田市教委	試掘	なし	1
2	1983	勝田市教委	本調査	住居跡3(十王台1, 古墳後期2)	2
3	1985	勝田市教委	試掘	住居跡2(古墳後期1, 不明1)	3
4	1990	勝田市教委	本調査	住居跡3(8世紀1, 9世紀1, 不明1), 竪穴遺構1	4
5	1991	勝田市教委	試掘	なし	なし
6	1997	市教委	本調査	住居跡5(十王台1, 古墳後期1, 8世紀2, 9世紀1)	5
7	2003	市教委	試掘	なし	6
8	2005	市教委	試掘	なし	7
9	2006	市教委	試掘	なし	なし
10	2006	市教委	試掘	住居跡2(時期不明)	8
11	2006	市教委	試掘	なし	8
12	2006	市教委	本調査	住居跡1(十王台)	8
13	2006	市教委	試掘	なし	8
14	2006	市教委	試掘	住居跡(時期不明)	なし
15	2007	市教委	試掘	住居跡1(時期不明)	9
16	2007	市教委	本調査	住居跡1(古墳後期), 溝1	9
17	2007	市教委	試掘	住居跡1(時期不明)	9
18	2010	公社	試掘	住居跡2(十王台1, 時期不明1)	10
19	2011	公社	試掘	住居跡6(十王台4, 古墳前期1, 時期不明1)	11
20	2012	公社	試掘	住居跡1(時期不明)	12
21	2012	公社	試掘	住居跡2(古墳後期1, 時期不明1), 溝1	12
22	2012	公社	試掘	土坑2, ピット9	12
23	2012	公社	試掘	住居跡6(奈良・平安4, 時期不明2), 土坑2, ピット4	12

文献

- 1 昭和57年度市内遺跡発掘調査報告書
- 2 昭和58年度市内遺跡発掘調査報告書
- 3 昭和60年度市内遺跡発掘調査報告書
- 4 平成元年度市内遺跡発掘調査報告書
- 5 岡田遺跡発掘調査報告書
- 6 平成15年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 7 平成17年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 8 平成18年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 9 平成19年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 10 平成21年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 11 平成23年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 12 平成24年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

6 岡田遺跡

(1) 過去の調査

岡田遺跡においては、これまで23次に及ぶ調査が実施され、37基に及ぶ住居跡が検出されている。その住

居跡数を時期別にみると、弥生時代後期(十王台式期)8基、古墳時代前期1基・後期6基、奈良・平安時代9基、時期不明13基となり、弥生時代後期、古墳時代前期・後期、奈良・平安時代の集落が認められる。これまでの住居跡の検出状況からみると、弥生・古墳時代の集落は遺跡全体に展開するようであるが、奈良・平安時代の集落は岡田遺跡の北部を中心とするようである。

(2) 第24次調査報告

調査経緯 三反田3608-10外2筆に所在する土地について個人住宅建築の計画があり「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が提出された。現地は岡田遺跡に当たっており、踏査を行なったところ、土師器片などの遺物の散布を認めた。教育委員会は建築・土木工事を行なう際は事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。続いて、文化財保護法93条1項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は3月19日～22日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、岡田溜のある谷から180mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。今回の調査は3か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.6～0.8mを測る。調査の結果、住居跡1基(奈良・平安時代)が検出された。住居跡からは、土師器・須恵器の小片のほか、縄文土器の小片も出土している。

7 西中島遺跡

(1) 過去の調査

西中島遺跡においては、これまで3回の調査が実施され、4基の住居跡が検出されている。その住居跡数を時期別にみると、古墳時代後期1基、奈良時代1基・平安時代2基となり、古墳時代後期から平安時代の集落を中心とするものと思われる。このほか縄文時代後期の土坑も3基見つかった。

(2) 第4次調査報告

調査経緯 津田字向井3166番1, 6に所在する土地



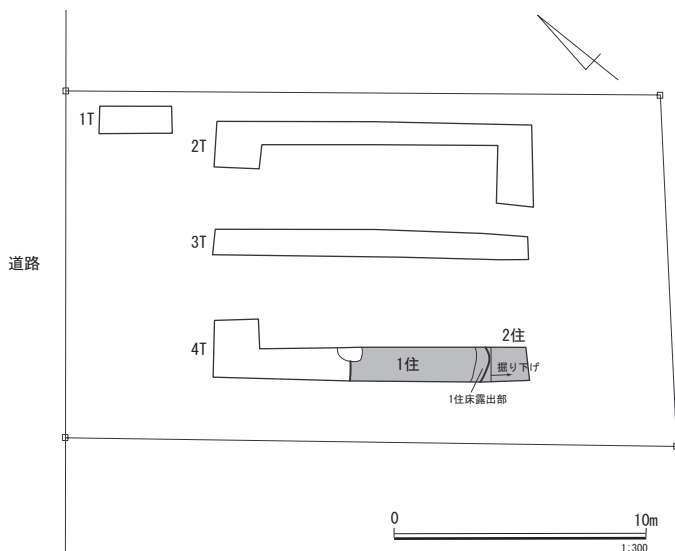
第 21 図 西中島遺跡の調査地点（数字は調査回数）

第 5 表 西中島遺跡調査一覧

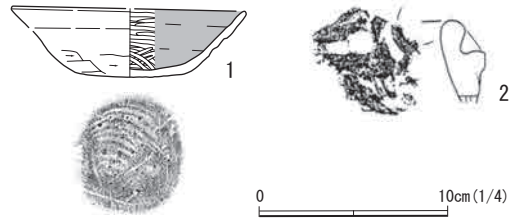
次	調査年度	調査主体	調査種別	主な遺構	文献
1	1985	勝田市教委	本調査	住居跡 1 (古墳後期)	1
2	1986	勝田市教委	本調査	住居跡 1 (平安), 土坑 3 (縄文後期)	2
3	2013	市教委	試掘	住居跡 2 (奈良 1, 平安 1)	3

文献

- 1 昭和 60 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 2 昭和 58 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 3 平成 24 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書



第 22 図 西中島遺跡第 4 次調査区



第 23 図 西中島遺跡第 4 次調査区出土遺物

について個人住宅建築の計画があり「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が提出された。現地は西中島遺跡に当たっており、踏査を行なったところ、土師器片などの遺物の散布を認めた。教育委員会は建築・土木工事を行なう際は事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。続いて、文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 6 月 18 日～6 月 25 日にかけて行われ、遺構が確認され保存が出来ないため発掘調査となった。

調査結果 調査地は第 3 次調査区の隣接地であり、台地縁部から 60 m ほど離れた地点に位置し、南西にゆるく傾斜する地形を呈する。調査時は荒地であった。今回の調査は 4 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.1 ～ 0.4 m を測る。調査の結果、住居跡 2 基（古墳時代 1, 平安時代 1）が検出された。

第 1 号住居跡は、第 2 号住居跡埋没後、その覆土中に貼床をして形成されている。出土遺物は土師器および灰釉陶器の小片が出土している。

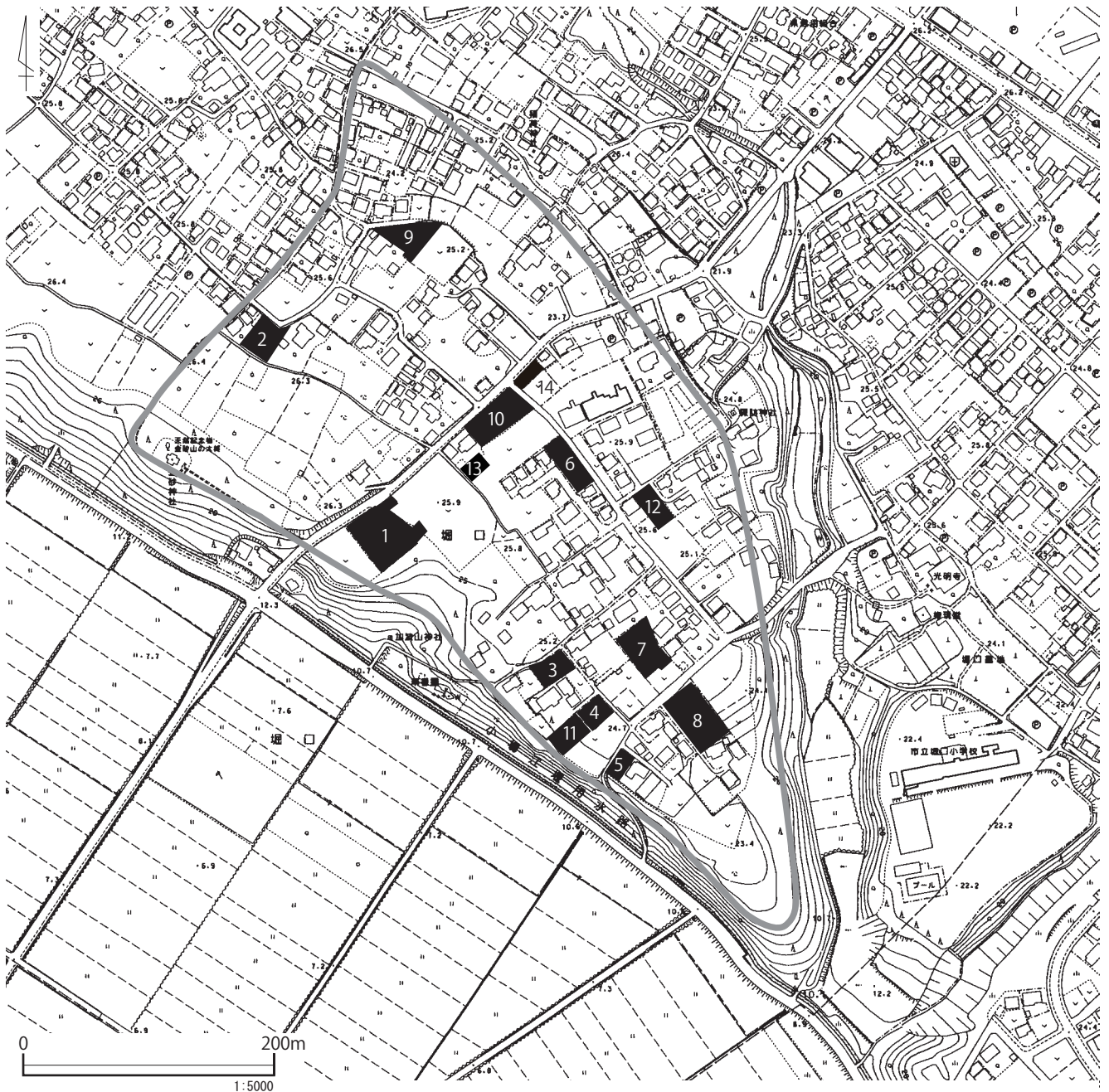
第 2 号住居跡は耕作による攪乱のために遺存状況は悪かったが、一部試掘したところ、床付近の覆土中より、口縁部を一部欠失する 10 世紀前半ごろの土師器杯が正位の状態出土した。出土遺物は土師器・須恵器が出土している。

このほか表土から、土師器・須恵器や縄文土器・敲石が出土している。

遺物説明

第 23 図

1 出土位置：2 住 注記：P1 材質：土師器 器種：杯 残存：口縁部 70% 欠失，体部 25% 欠失 法量：口径 (12.2)，器高 (3.6)，底径 5.7 色調：外面褐色（口縁部黒色），内面黒色 胎土：礫（白透少），砂（白褐，



第24図 堀口遺跡の調査地点（数字は調査回数）

透）技法等：糸切り。外面体部下半手持ちヘラ削り。底部外面一部にナデ。内面ヘラミガキ（底部不定方向）・黒色処理。

2 出土位置・注記：2トレ表土 時代時期：縄文時代後期（堀之内1式）
器種：深鉢形土器 文様：環状把手，隆帯文（M字状），刺突文（盲孔状）

8 堀口遺跡

（1）過去の調査

堀口遺跡においては、これまで12次に及ぶ調査が実施され、78基に及ぶ住居跡が検出されている。その住居跡数を時期別にみると、弥生時代中期1基、弥生時

代後期（十王台式期）2基、古墳時代前期3基、古墳時代中期12基、古墳時代後期5基、奈良時代7基、平安時代15基、時期不明21基となり、弥生時代中期から平安時代に至る集落が認められ、特に古墳時代中期と平安時代の住居数の多さが目立つ。これまでの住居跡の検出状況からみると、弥生時代後期以後の集落は遺跡全体に展開するようであるが、とくに平安時代の住居跡は特に西方にも広く展開し、遺跡全体に存在するようである。

（2）第13次調査報告

調査経緯 大字堀口字表坪71番1に所在する土地に

第6表 堀口遺跡調査一覧

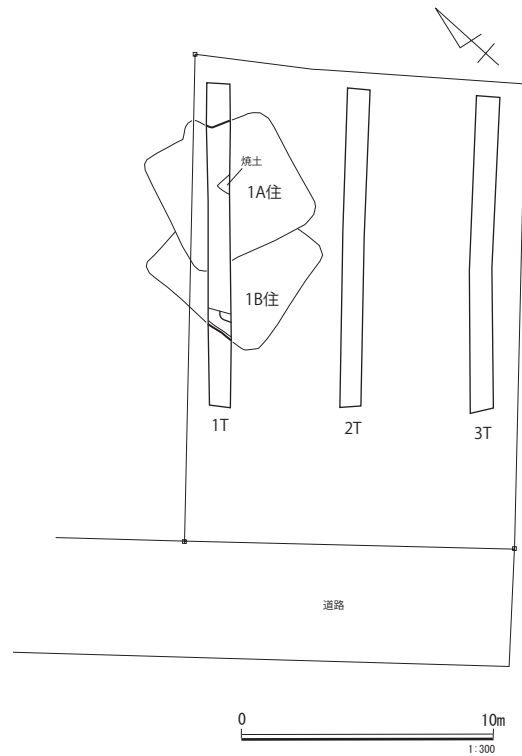
次	調査年度	調査主体	調査種別	主な遺構	文献
1	1979	勝田市教委	本調査	住居跡 17 (十王台 1, 古墳中期 3, 古墳後期 2, 奈良 4, 平安 3, 時期不明 4)	1
2	1979	勝田市教委	本調査	住居跡 2 (平安)	2
3	1983	勝田市教委	本調査	住居跡 3 (古墳中期 1, 古墳後期 1, 平安 1)	3
4	1984	勝田市教委	本調査	住居跡 2 (古墳 1, 時期不明 1)	4
5	1985	勝田市教委	本調査	住居跡 4 (古墳中期 1, 平安 2, 時期不明 1)	5
6	1992	勝田市教委	本調査	住居跡 2 (古墳中期 1, 奈良 1)	6
7	1993	勝田市教委	本調査	住居跡 8 (十王台 1, 古墳中期 4, 古墳後期 1, 平安 2)	7
8	1996	市教委	本調査	住居跡 6 (古墳前期 2, 古墳中期 2, 奈良 1, 平安 1)	8
9	2006	市教委	試掘	なし	9
10	2007	市教委	本調査	住居跡 7 (古墳前期 1, 古墳後期 1, 奈良 1, 平安 4)	10
11	2008	公社	試掘	住居跡 2 (奈良・平安 1, 時期不明 1), 溝 1	11
12	2009	公社	試掘	住居跡 25 (弥生中期 1, 古墳 8, 奈良・平安 2, 時期不明 14), 土坑 3 (古墳 2, 時期不明 1), 溝 1	11

文献

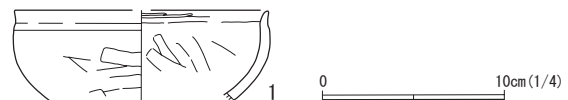
- 1 茨城県勝田市堀口遺跡発掘調査報告書
- 2 市内遺跡発掘調査報告書 (昭和 54 年度)
- 3 市内遺跡発掘調査報告書 (昭和 58 年度)
- 4 市内遺跡発掘調査報告書 (昭和 59 年度)
- 5 市内遺跡発掘調査報告書 (昭和 60 年度)
- 6 平成 4 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 7 平成 5 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 8 平成 8 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 9 平成 18 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 10 堀口遺跡発掘調査報告書
- 11 平成 20 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

ついて個人住宅建築の計画があり「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が提出された。現地は堀口遺跡に当たっており、踏査を行なったところ、土師器片などの遺物の散布を認めた。教育委員会は建築・土木工事を行なう際は事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。続いて、文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 7 月 9 日～7 月 12 日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、那珂川を望む台地縁辺部から 100 m ほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は荒地であった。今回の調査は 3 か所のトレン



第 25 図 堀口遺跡第 13 次調査区



第 26 図 堀口遺跡第 13 次調査区第 1 B 号住居跡出土遺物

チを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.6 ～ 0.9 m を測る。調査の結果、住居跡 2 基 (古墳時代) が検出された。住居跡からは、土師器小片のほか、不明鉄製品が出土している。

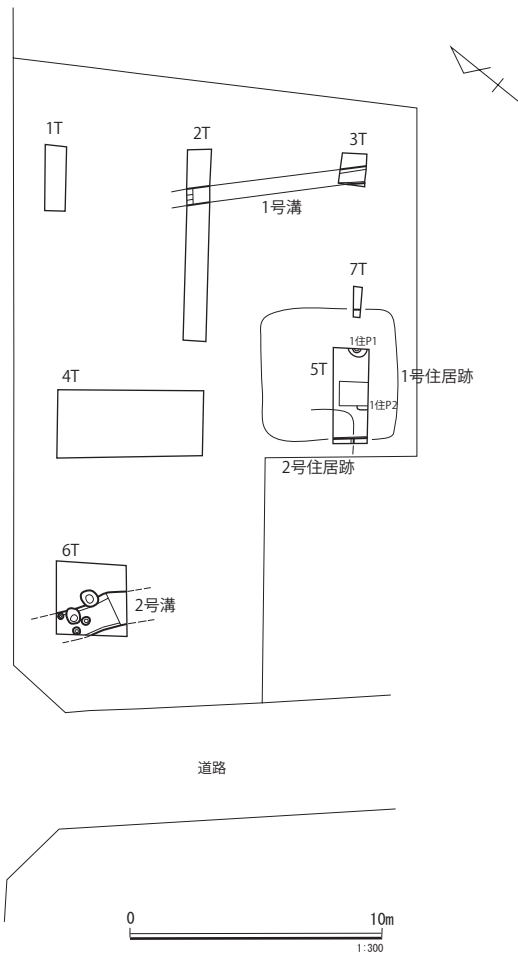
遺物説明

第 26 図

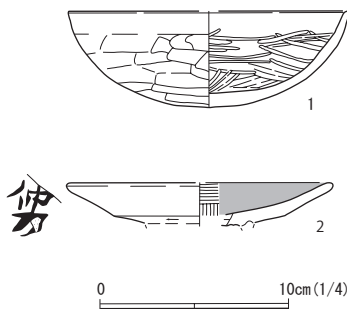
1 台帳：フク土 材質：土師器 器種：椀 残存：20% 法量：口径 (14.0), 器高 (5.0) 色調：橙色 胎土：礫 (白少), 砂 (白多, 透多, 黒少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ・ヘラミガキ。内面ヘラナデ・ヘラミガキ。 使用痕：- 備考：-

(3) 第 14 次調査報告

調査経緯 大字堀口字新地坪 163 番 1 に所在する土地について個人住宅建築の計画があり「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が提出された。現地は堀口遺跡に当たっており、踏査を行なったところ、土師器片などの遺物の散布を認めた。教育委員会は建築・土木工事を行なう際は事前に試掘調査を必要



第 27 図 堀口遺跡第 14 次調査区



第 28 図 堀口遺跡第 14 次調査区出土遺物

とする旨の回答を行なった。続いて、文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 12 月 17 日～ 21 日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、那珂川を望む台地縁辺部から 210 m ほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。今回の調査は 7 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.2 ～ 0.6 m を測る。調査の結果、住居跡 2

基（古墳時代中期 1 基，9 世紀 1 基），溝跡 2 条（時期不明）が検出された。第 1 号住居跡からは土師器杯・甕が，第 2 号住居跡からは土師器杯・甕及び須恵器杯の小片が出土した。第 2 号溝と重複するピット群の覆土中から古墳時代中期の高杯片が出土している。なお 4 トレンチの表土から，墨書「仲□（万ヵ）」をもつ土師器有台皿が出土している。

遺物説明

第 28 図

- 出土位置：1 住 台帳：P1 材質：土師器 器種：杯 残存：40%
法量：口径 (14.8)，器高 5.1 色調：橙～暗褐～黒褐色 胎土：礫 (白微)，砂 (白多，透多，黒少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ後ヘラミガキ。
使用痕：－ 備考：－
- 出土位置：4 トレンチ表土 材質：土師器 器種：有台皿 残存：体部 15% 法量：口径 (13.6) 色調：外面褐色，内面黒色 技法等：外面底部回転ヘラ削り。内面ヘラミガキ (底部 1 方向)・黒色処理。体部外面に墨書「仲□ (万もしくは刀か?)」。

9 市毛上坪遺跡

(1) 過去の調査

市毛上坪遺跡においては、これまで 12 次に及ぶ調査が実施され、22 基の住居跡が検出されている。そのなかで時期が判明している住居跡は古墳時代後期が 3 基，平安時代が 3 基である。なお，第 12 次調査で確認された 14 基の住居跡は，プラン確認にとどめたため時期が不明瞭であるが，覆土中から出土した土器をみると，すべて古墳時代の住居跡である可能性が高い。このように現在までの調査からは，市毛上坪遺跡は古墳時代の大集落になるようである。

遺構分布をみると，古墳時代は台地縁辺部からやや奥に入った地区である遺跡北東部と，台地縁辺に近い遺跡南東部にわかれて集落が展開するようである。第 12 次調査区は南東部の集落域に該当し遺構密度も高いことからみて，市毛上坪遺跡の古墳時代集落の中心は遺跡南東部にあるといえそうである。平安時代の集落域もこの南東部集落域に重なるようである。



第 29 図 市毛上坪遺跡の調査地点（数字は調査次数）

第 7 表 市毛上坪遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1980	勝田市教委	本調査	住居跡 1 (古墳後期)	1
2	1985	勝田市教委	本調査	住居跡 1 (古墳)	なし
3	1985	勝田市教委	試掘調査	なし	2
4	1985	勝田市教委	本調査	住居跡 2 (平安), 溝跡 1 (時期不明), 土坑 10	2
5	1986	勝田市教委	試掘	なし	3
6	1991	勝田市教委	試掘	なし	4
7	1992	勝田市教委	本調査	溝跡 1 (時期不明)	5
8	1996	市教委	試掘	なし	6
9	2006	市教委	試掘	なし	7
10	2006	市教委	本調査	住居跡 2 (古墳後期 1, 平安 1), 土坑 1	7
11	2006	市教委	試掘	住居跡 2 (古墳後期 1, 平安 1), 溝跡 1 (時期不明)	7
12	2012	公社	試掘	住居跡 14 (古墳時代か)	8

文献

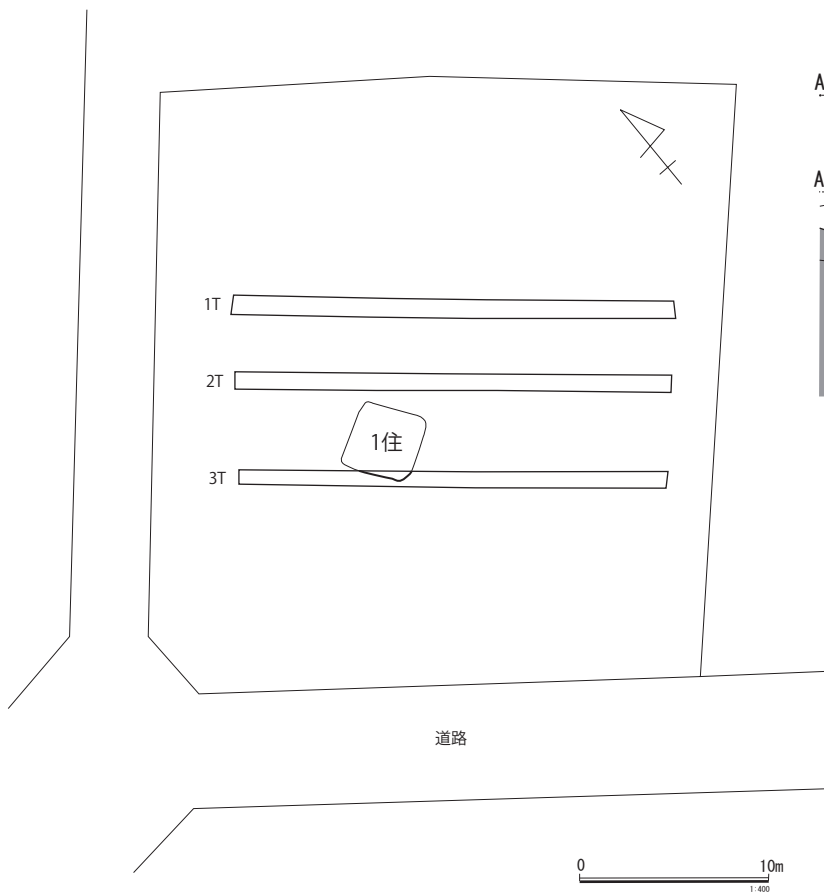
- 1 市内遺跡発掘調査報告書 (昭和 55 年度)
- 2 昭和 60 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 3 昭和 61 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 4 平成 3 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 5 平成 4 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 6 平成 8 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 7 平成 18 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 8 平成 24 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

(2) 第 13 次調査報告

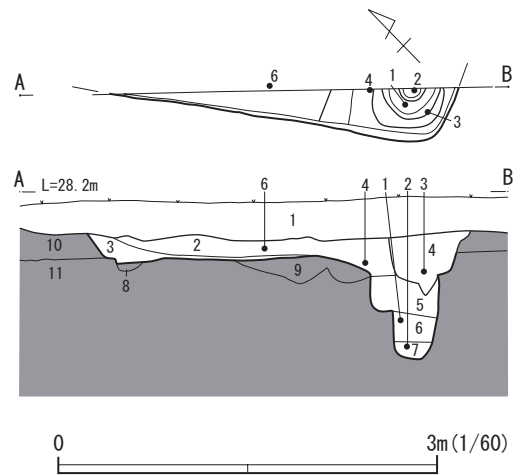
調査経緯 大字市毛字上坪 1258-1 の一部に所在する土地について集合住宅建築の計画があり「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が提出された。現地は市毛上坪遺跡に当たっており、踏査を行なったところ、土師器片などの遺物の散布を認めた。教育委員会は建築・土木工事を行なう際は事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。続いて、文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 7 月 9 日～7 月 16 日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、那珂川低地を望む台地縁部から 500 m ほどのところに位置する。地形は平坦であり調査時は畑地であった。調査対象地内に 1～3 トレンチとした 3 本のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは約 0.4～0.6 m ほどを測る。住居跡は 1 基確認されたが住居跡南西隅が検出されたにとどまる。

1 号住居跡は深さ 1 cm 程度と浅かったが、南西隅に



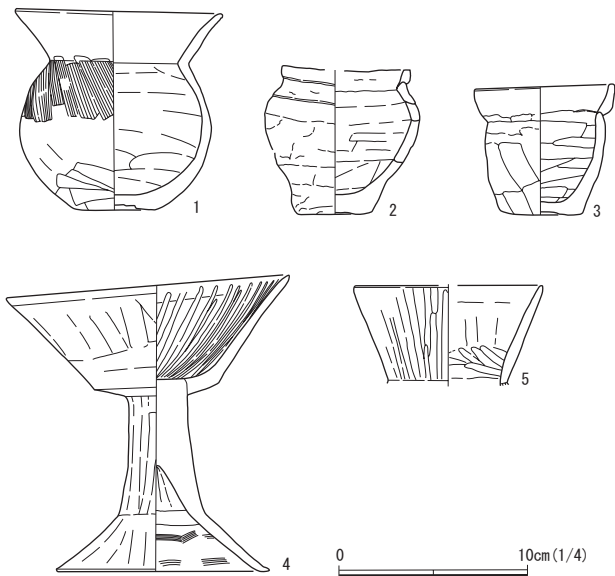
第30図 市毛上坪遺跡第13次調査区



AB 土層説明

- 1 暗褐色 耕作土
- 2 暗褐色 ローム粒含む
- 3 黒褐色 ローム粒やや多量に含む
- 4 暗褐色 ローム粒含む
- 5 明褐色 ローム粒含む
- 6 黒褐色 ローム粒とても多量に含む
- 7 明褐色 ローム粒とても多量に含む
- 8 黄褐色 ローム粒とても多量に含む しまりあり
- 9 明褐色 ロームブロック含む しまりあり
- 10 ローム層 今市・七本桜軽石含む
- 11 ローム層

第31図 市毛上坪遺跡第13次調査区第1号住居跡



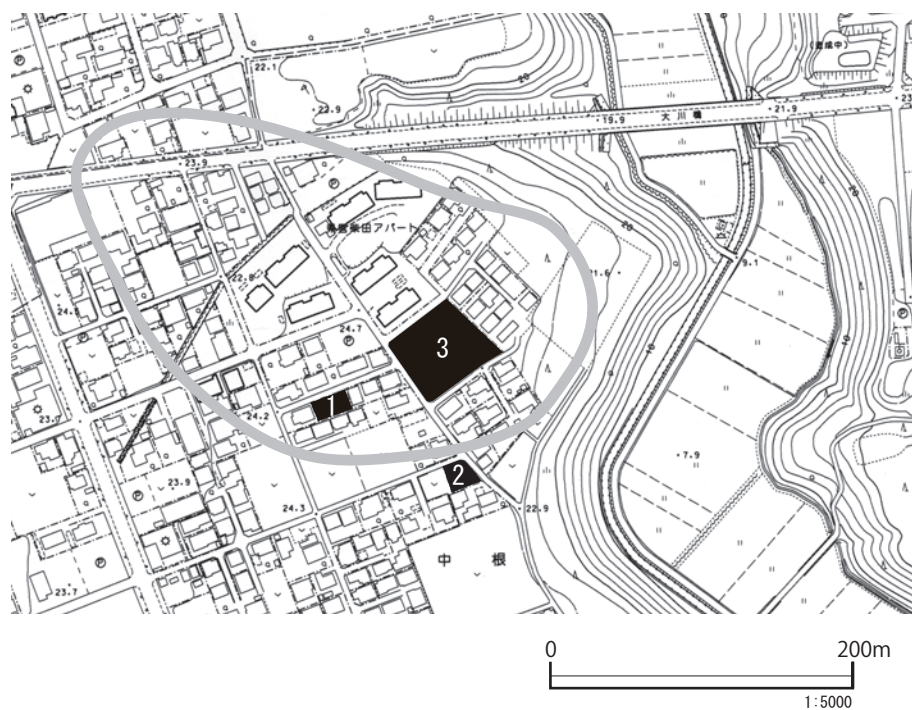
第32図 市毛上坪遺跡第13次調査区第1号住居跡出土遺物

深さ 80cm ほどの土坑が検出され、その土坑覆土を中心に土器が出土している。出土した土器からみて時期は古墳時代前期ではないかと思われる。なお調査区表土からは土師器片が若干出土したのみであった。

遺物説明

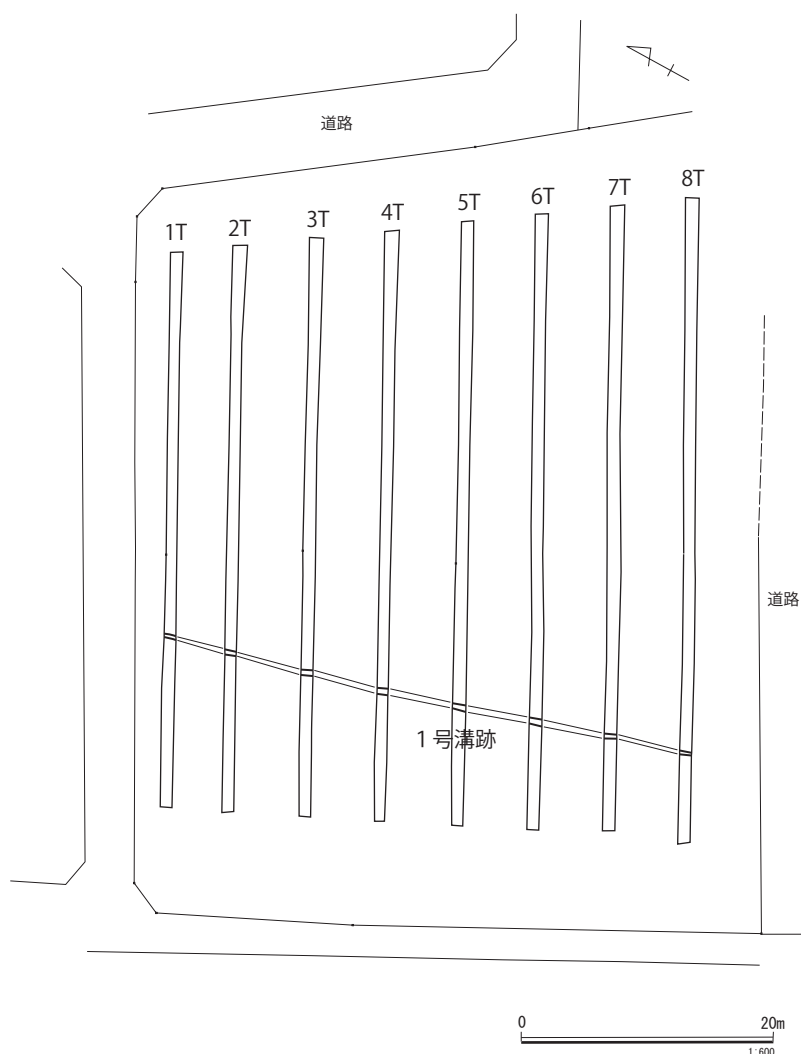
第32図

- 1 台帳：P2 材質：土師器 器種：小型甕 残存：完形 法量：口径 11.0, 器高 10.7, 底径 4.5 色調：赤～橙～黄橙～暗褐～黒褐色 胎土：礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 胴部上位ハケ調整, 中位ナデ, 下位ヘラ削り, 底部凹み底。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。使用痕：胴部の内面が剥離している。備考：—
- 2 台帳：P7, pit 内 材質：土師器 器種：小型壺 残存：口縁部～胴部中位 40%, 下位～底部 100% 法量：口径 (7.0～8.0), 器高 7.9, 底径 4.0 色調：外面黄橙～黒褐色, 内面橙～黄橙色 胎土：砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：内外面ともヘラナデ・ナデ。内外面とも器面が凸凹していて, 輪積痕がみられる。使用痕：外面が摩滅している。備考：—
- 3 台帳：P1 材質：土師器 器種：小型壺 残存：ほぼ完形 法量：口径 7.5, 器高 6.9, 底径 4.4 色調：橙～にぶい橙～黒褐色 胎土：礫(白少), 砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラナデ・ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。使用痕：— 備考：—
- 4 台帳：P4 材質：土師器 器種：高杯 残存：ほぼ完形 法量：口径 15.0, 器高 14.6～15.8, 底径 11.3 色調：赤～橙～黄橙～黒褐色



第 33 図 枯松戸遺跡の調査地点 (数字は調査回数)

胎土：礫（白微，灰微），砂（白多，透多）
 焼成：良好 技法等：外面杯部ヘラ削り
 後ヘラナデ，脚部～底部ヘラナデ後ヘラ
 ミガキ。内面杯部ヘラナデ後ヘラミガキ，
 脚部ヘラ削り，底部ヘラナデ後若干のハ
 ケ調整。使用痕：底部接地面が摩滅し
 ている。備考：—
 5 台帳：P6，フク土 材質：土師器
 器種：埴 残存：口縁部 20% 法量：
 口径（10.0），器高（5.4）色調：外面橙
 ～にぶい褐色，内面橙色 胎土：砂（白
 多，透多） 焼成：良好 技法等：内外
 面ともヘラミガキ。使用痕：口縁端部
 が欠損し，外面が摩滅している。備考：
 —



第 34 図 枯松戸遺跡第 3 次調査区

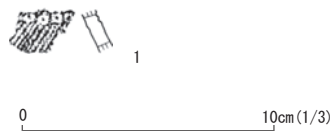
10 枯松戸遺跡

(1) 過去の調査

枯松戸遺跡においては，昭和 59・60 年に 2 次に及ぶ調査が実施されたが遺構は検出されていない（『昭和 59 年度市内遺跡発掘調査報告書』勝田市教育委員会，1985）。出土遺物は土師器・須恵器のほか，縄文・弥生土器片があるため，縄文時代から平安時代にかけての遺構が存在する可能性がある。散布する遺物の量は少ないので，遺構の密度は薄いであろう。

(2) 第 3 次調査報告

調査経緯 大字中根字枯松戸 2990 番 28，2991 番 1 に所在する土地について宅地造成の計画があり「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が提出された。現地は市毛上坪遺跡に当たっており，踏



第 35 図 枯松戸遺跡第 3 次調査区出土遺物

査を行なったところ、土師器片などの遺物の散布を認め
た。教育委員会は建築・土木工事を行なう際は事前に試
掘調査を必要とする旨の回答を行なった。続いて、文化
財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、茨
城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査に
ついてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼し
た。試掘調査は 11 月 28 日～12 月 6 日にかけて行わ
れた。

調査結果 調査地は、大川の低地を望む台地縁辺部か
ら 70 m ほどのところに位置する。地形は平坦であり調
査時は畑地であった。調査対象地内に 1～8 トレンチ
とした 8 本のトレンチを設定し、重機による表土除去
を実施した。確認面までの深さは約 0.7 m ほどを測る。
遺構は幅 30 cm、深さ 20 cm ほどの溝跡が 1 条確認さ
れたが、出土遺物はなく時期は不明である。なお調査区
からは弥生土器小片が採集されている。

遺物説明

第 35 図

1 出土位置：表土 注記：表土 時代時期：弥生時代後期 文様：刺
突文(円形竹管)、盲孔、付加条縄文(LR+2R) 備考：胎土に大粒の白
色粒を多量含む

Ⅲ 本調査報告

1 三反田蜷塚遺跡第6次調査報告

(1) 過去の調査

三反田蜷塚遺跡はこれまでに5次の調査が実施されているが、いずれも第1次調査における開発対象地内での調査となっている。5次の調査により、住居跡11基、溝跡4条、土坑10基が確認されている。住居跡の時期は多くが不明であるが、6A号・8号住居跡が出土遺物から古墳時代後期であることや、調査区からの出土土器が古墳時代と思われる土師器を主とすることからみて、古墳時代の集落跡を中心とするものと思われる。なお第3次調査の際に江戸時代の井戸や土坑が検出されており、今回調査の当該期遺構と関係するものであろう。

(2) 発掘調査の経緯

三反田字天王前5115-6,1に所在する土地について、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が提出された。現地は平成22年3月の試掘調査で遺構が確認されていたため教育委員会は建築・土木工事を行なう際は事前に発掘調査を必要とし、文化財保護法93条1項に基づく届出が必要である旨の回答を行ない、届け出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、発掘調査の準備を進めた。発掘調査は2月13日から3月5日にかけて行われた。

(3) 調査の経過

調査期間 / 平成25年2月13日～3月5日

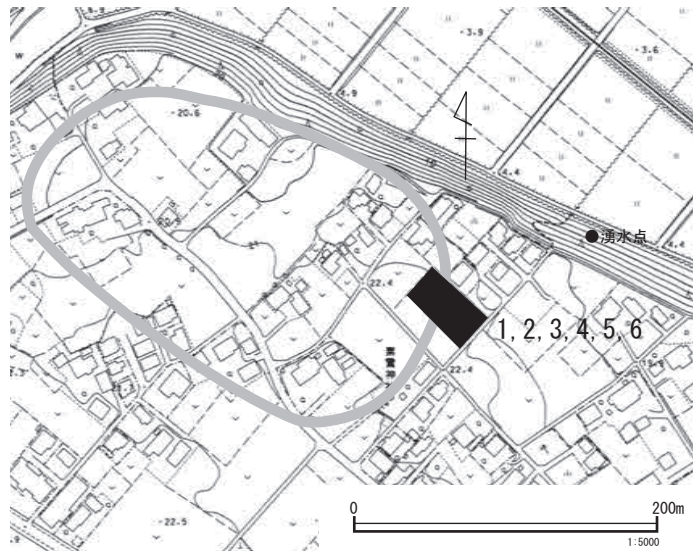
調査担当 / 佐々木義則

調査面積 / 92 m²

時代 / 縄文～奈良時代, 江戸時代

遺構 / 竪穴住居跡3基 (弥生時代1基, 古墳時代2基), 土坑5基 (江戸時代2基, 時期不明3基), ピット44基 (時期不明)

調査地は、台地縁辺部から60mほど離れた地点に位置し、地形は北東方向に緩く下がっていく緩傾斜地である。調査時は畑地であった。調査区東方には中丸川低地に下りていく小道が通り、低地に下りたところに現在も豊富な湧水が小さな滝のようになって湧きだす湧水点がある



第36図 三反田蜷塚遺跡の調査地点 (数字は調査回数)



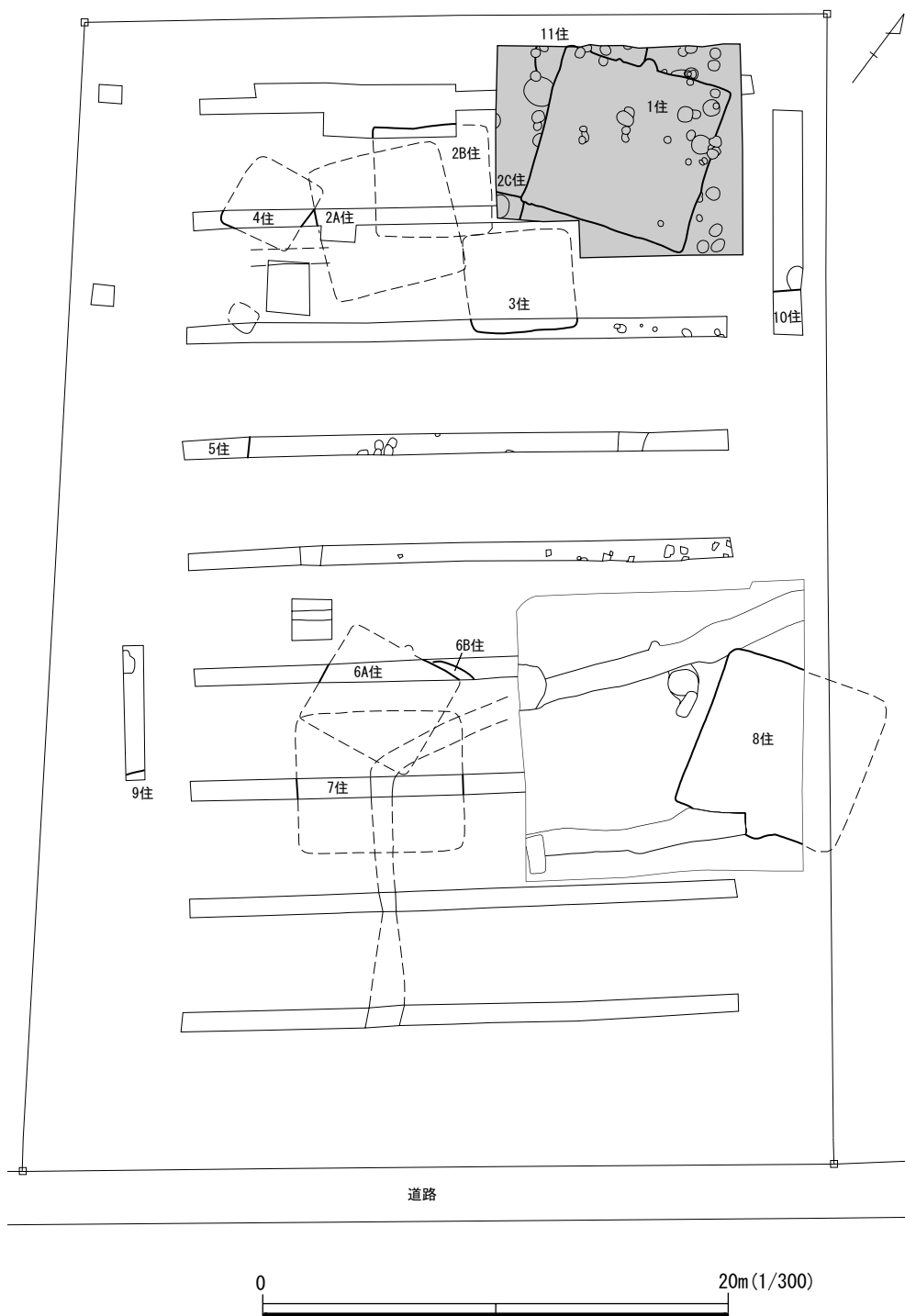
写真1 遺構確認状況



写真2 調査風景

所在する(第36図参照)。古墳時代の集落立地を考える際、この湧水点の存在は大きい。

さて今回の調査は個人住宅建築に伴う発掘調査であり、建物部分を中心に調査区が設定された。当地区は過去の試掘調査により遺構分布は把握されていたため、今回の調査区に係る遺構はおおよそ予想がついた。しかし第2C号住居跡や第11号住居跡などは過去の試掘トレ



第37図 三反田蛭塚遺跡第6次調査区（網かけ部）

ンチによっても明確には把握できておらず、今回の調査によって明確になった遺構もあった。なお今回検出された遺構番号は、過去の試掘時に付された番号に従っている。それでは以下、簡単に調査の経過を記す。

2月13日：人力による表土除去開始。 2月14日：表土除去終了。遺構確認状況図作成。遺構掘り込み開始。

2月19日第1号住居跡覆土土層断面図作成。 2月23日：第1号住居跡遺物出土状況写真。 2月25日：

第1号住居跡遺物出土状況図作成。第2C・11号住居跡平面図作成。 2月26日：第1号住居跡平面図作成。 2月28日：第1号住居跡掘形平面図作成。 3月4日：重機による埋め戻し。 3月5日：埋め戻し状況確認後、器材撤収し、調査を終了する。

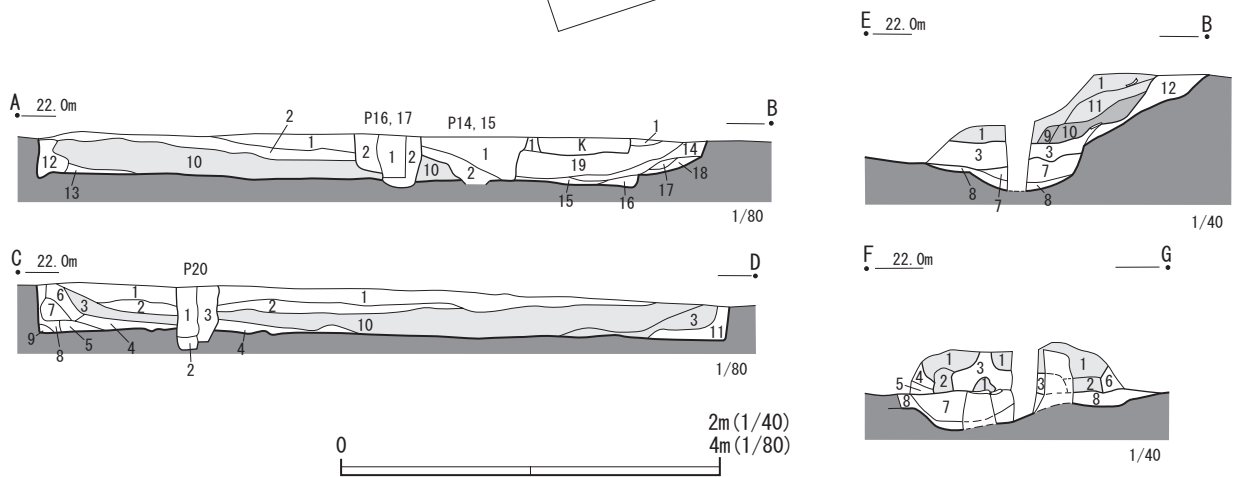
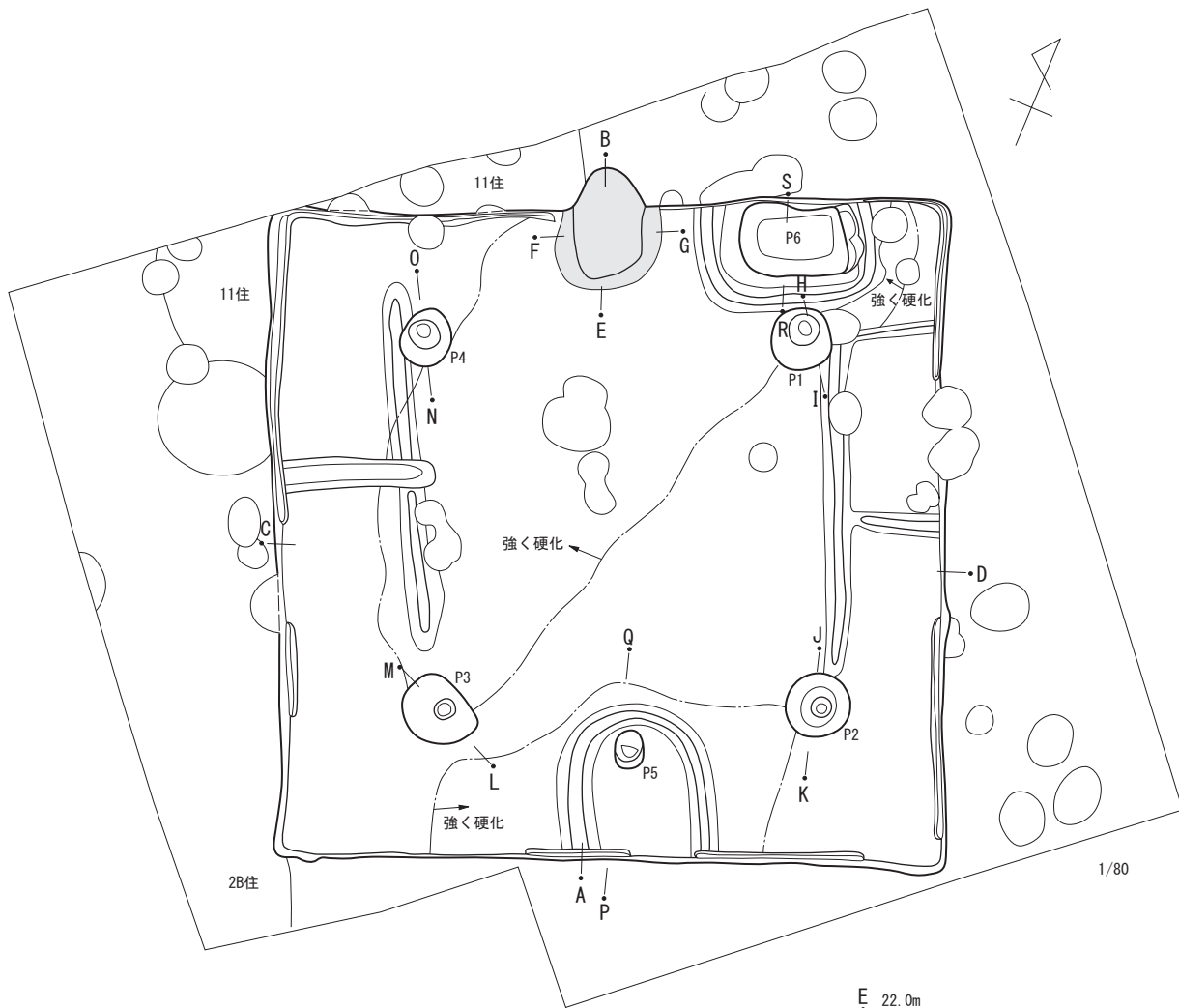
(4) 住居跡

第1号住居跡

遺構 第2C・11号住居跡と重複しており、新旧関係は第11号住居跡→第1号住居跡である。第2C号住居跡との新旧は不明。当住居跡の主軸方向はN-22°-Wを測る。竪穴部の規模は南北7.1m、東西7.4mを測る。壁高は北壁50cm、東壁36cm、南壁38cm、西壁52cmを測る。壁周溝は明瞭ではないが、断続的に全体に認められた。

ピットは、P1・2・3・4が支柱穴、P5が出入り口ピット、P6が貯蔵穴になるものと思われる。支柱穴の深さはP1が76cm、

P2が83cm、P3が80cm、P4が89cmと深く、P1・2・4の底面には、非常に固く締まっていた黄褐色土が認められたが、これはピット半分は断ち割って土層断面を観察した結果確認できたものであり、上から掘って行って確認したのでは、おそらくわからなかったろう。支柱上部の高さを調節するために、高さの足りない柱穴に黄褐色土を入れて突き固めたのではないかと推測したい。出入り口ピットP5は、深さ25cmと浅い。



第 38 図 三反田蜆塚遺跡第 6 次調査区第 1 号住居跡 (1)

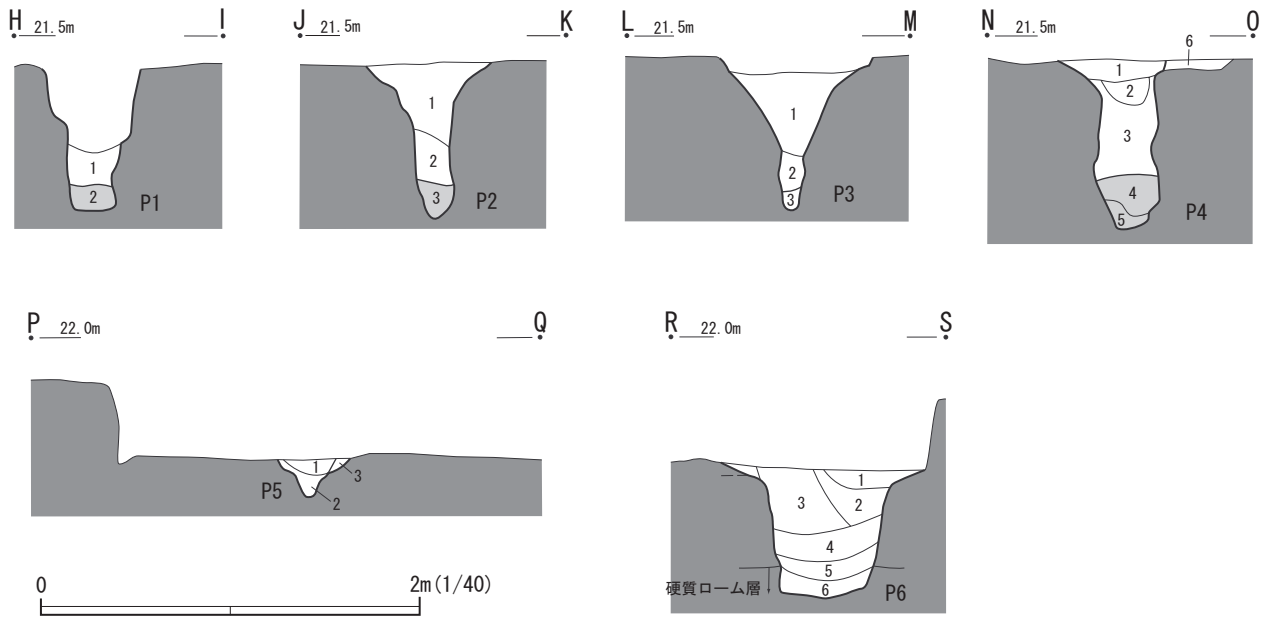
出入り口ピットを取り囲むように床面には高さ 3cm ほどの隆起帯がめぐっている。貯蔵穴と推定される P 6 は、住居跡北東隅に認められた、深さ 72cm ほどの隅丸長方形の掘り込みである。P 6 の周囲もピットの形に沿うように高さ 2～4cm の隆起帯によって囲まれている。

床面は全体的に硬化していたが、特に出入り口ピット P 5 の周辺と、支柱穴 P 3 から竈前にかけての部分の硬

化が顕著であった。

竈穴部の覆土は、竈穴部の南東部にロームブロックを含む土 (第 3・10 層) が堆積する。第 1 号住居跡廃絶後、それほど間をおかずに南東隣接地に建てられた竈穴住居跡の掘削土を廃棄したものかもしれない。覆土第 1・2 層自然埋土と考えてよいだろう。

竈は、北壁中央に位置する竈設置部分の床をやや深く



第38・39 図土層説明

AB・CD 土層断面

- 1 暗褐色 ローム粒含む
- 2 褐色 ローム小ブロック含む
- 3 明褐色 ロームブロック含む
- 4 暗褐色 ローム小ブロック含む 明褐色土混じる
- 5 褐色 ローム小ブロック含む
- 6 褐色 ローム粒含む
- 7 明褐色 ローム粒やや多量に含む ロームブロック含む
- 8 明褐色 ロームブロック含む
- 9 明褐色 ロームブロック含む
- 10 暗褐色 ロームブロック多量に含む
- 11 暗褐色 ローム小ブロック含む
- 12 暗褐色 ロームブロック少量含む
- 13 褐色 ローム粒含む
- 14 明褐色 ローム粒含む
- 15 暗褐色 ローム粒含む
- 16 黒褐色 焼土粒含む
- 17 明褐色 白灰色粘土小ブロック含む
- 18 白褐色 礫粘土崩壊土

- 19 褐色 ロームブロック含む 白褐色粘土ブロック多量に含む

EB・FG 土層断面

- 1 白褐色 砂質粘土主体
- 2 白褐色 粘土主体
- 3 明灰褐色 白褐色粘土崩壊土多量に含む 焼土粒多量に含む 炭化材小片少量含む
- 4 褐色 白褐色粘土崩壊土多量に含む ローム粒やや多量に含む ローム小ブロック少量含む
- 5 褐色 白褐色粘土粒・ローム粒含む
- 6 褐色 ローム粒・焼土粒含む
- 7 暗褐色 ローム粒やや多量に含む
- 8 明褐色 ローム小ブロック非常に多量に含む
- 9 白褐色 焼土小ブロック多量に含む
- 10 暗白褐色 焼土小ブロック含む 白褐色粘土崩壊土混じる
- 11 暗褐色 砂質粘土主体
- 12 明褐色 白褐色粘土崩壊土混じる

HI 土層断面

- 1 黄褐色 ローム土主体

- 2 黄褐色 ローム土主体 締まり非常に有り

JK 土層断面

- 1 褐色 ローム土多量に混じる 暗褐色土混じる
- 2 明褐色 ローム土主体 締まり無し
- 3 黄褐色 ローム土主体 非常に締まり有り

LM 土層断面

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒多量に含む 暗褐色土混じる
- 2 明褐色 ローム土主体
- 3 黄褐色 ローム土主体

NO 土層断面

- 1 暗褐色 ローム粒やや多量に含む
- 2 褐色 ローム粒多量に含む 締まり有り
- 3 明褐色 ローム粒非常に多量に含む 締まり有り
- 4 明褐色 ローム粒非常に多量に含む 非常に締まり有り
- 5 黄褐色 ローム土主体 非常に締まり有り

- 6 褐色 ロームブロック多量に含む 扇形理土

PQ 土層断面

- 1 褐色 ローム粒やや多量に含む
- 2 明褐色 ローム土多量に混じる
- 3 黄褐色 ローム土多量に混じる 締まり有り

RS 土層断面

- 1 褐色 ローム粒多量に含む
- 2 褐色 ローム粒非常に多量に含む ロームブロック少量含む
- 3 明褐色 ローム非常に多量に含む ロームブロック少量含む 黒褐色土小ブロック含む 白褐色粘土混じる
- 4 褐色 ローム粒多量に含む
- 5 暗褐色 ローム粒多量に含む
- 6 明褐色 ローム土多量に混じる

第39 図 三反田蛭塚遺跡第6次調査区第1号住居跡(2)

掘り下げ、その部分に第7・8層を充填して簡単な防湿施設を造った後に設置されている。焚口の遺存状況は良くないが、燃烧部付近は形状をとどめており、第3層が燃烧部空間に堆積した土層になるものと考えられる。煙道部は北壁から小さく突出している。焼土を含む第9・10層が煙道天井部になるのであろう。第12層が煙道部空間に堆積した土層と考えられる。

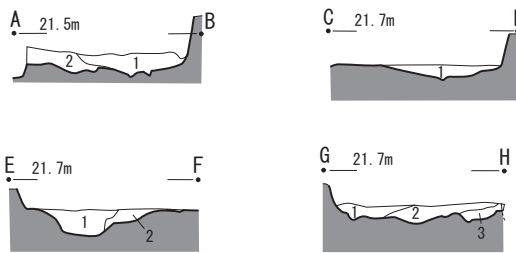
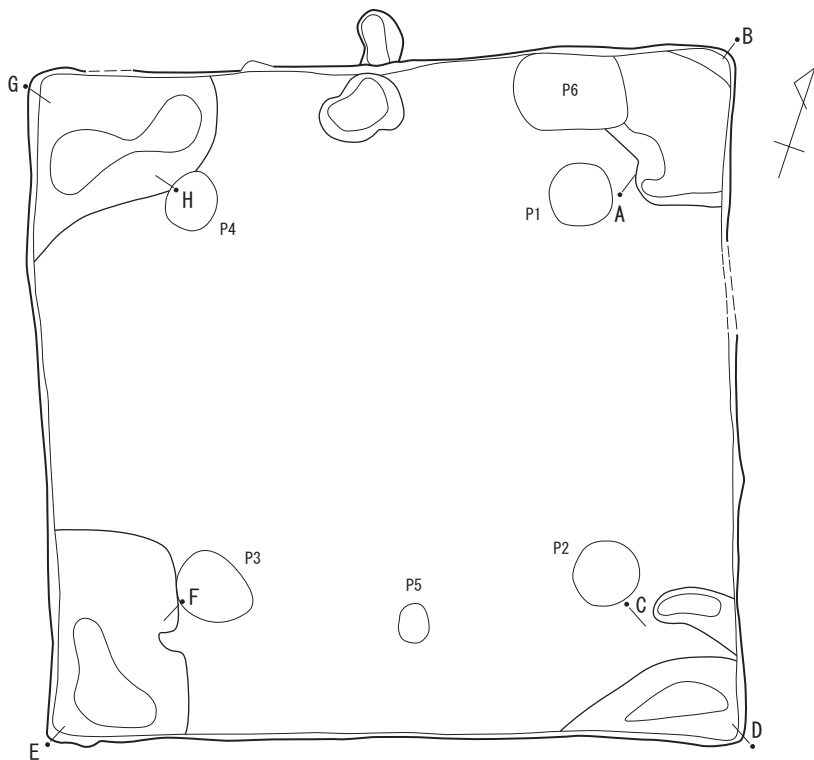
住居掘形は、竪穴部四隅を、深さ10～30cmほど浅く掘りくぼめた程度であった。

遺物出土状況 遺物は上層から下層にかけて出土しているが、とくに人為的埋土と考えられる下層部からの

出土が多い。遺物のまとまりは、竪穴部北東隅の貯蔵穴付近に認められる以外は、散在した出土状況を示している。なお遺物31・32・33の白玉が、竪穴部東壁中央部の床面からまとまって出土することは注意したい。

遺物説明

- 1 台帳：P16・17, No.3 材質：土師器 器種：杯 残存：ほぼ完形 法量：口径15.2, 稜径10.4, 器高6.1 色調：外面赤～にぶい黄褐色, 内面赤～暗赤褐色 胎土：砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ後ヘラ削り・ヘラミガキ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラナデ後ヘラミガキ。外面口縁部と内面は赤彩されている。 使用痕：— 備考：—



第40図 三反田蜆塚遺跡第6次調査区第1号住居跡掘形

AB 土層断面

- 1 黄褐色 ロームブロック非常に多量に含む 明褐色土混じる
- 2 黄褐色 ローム土主体

CD 土層断面

- 1 明褐色 ローム土主体 ロームブロック含む

EF 土層断面

- 1 明褐色 ローム土主体 ロームブロック多量に含む 暗褐色土ブロック含む
- 2 黄褐色 ロームブロック主体 締まり有り

GH 土層断面

- 1 褐色 ローム粒多量に含む ローム小ブロック含む
- 2 黄褐色 ローム土多量に混じる
- 3 褐色 ロームブロック多量に含む

2 台帳:P49 材質:土師器 器種:杯 残存:20% 法量:口径(16.0), 稜径(12.4), 器高(4.8) 色調:赤褐~にぶい赤褐色 胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多, 黒少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラミガキ。使用痕:- 備考:-

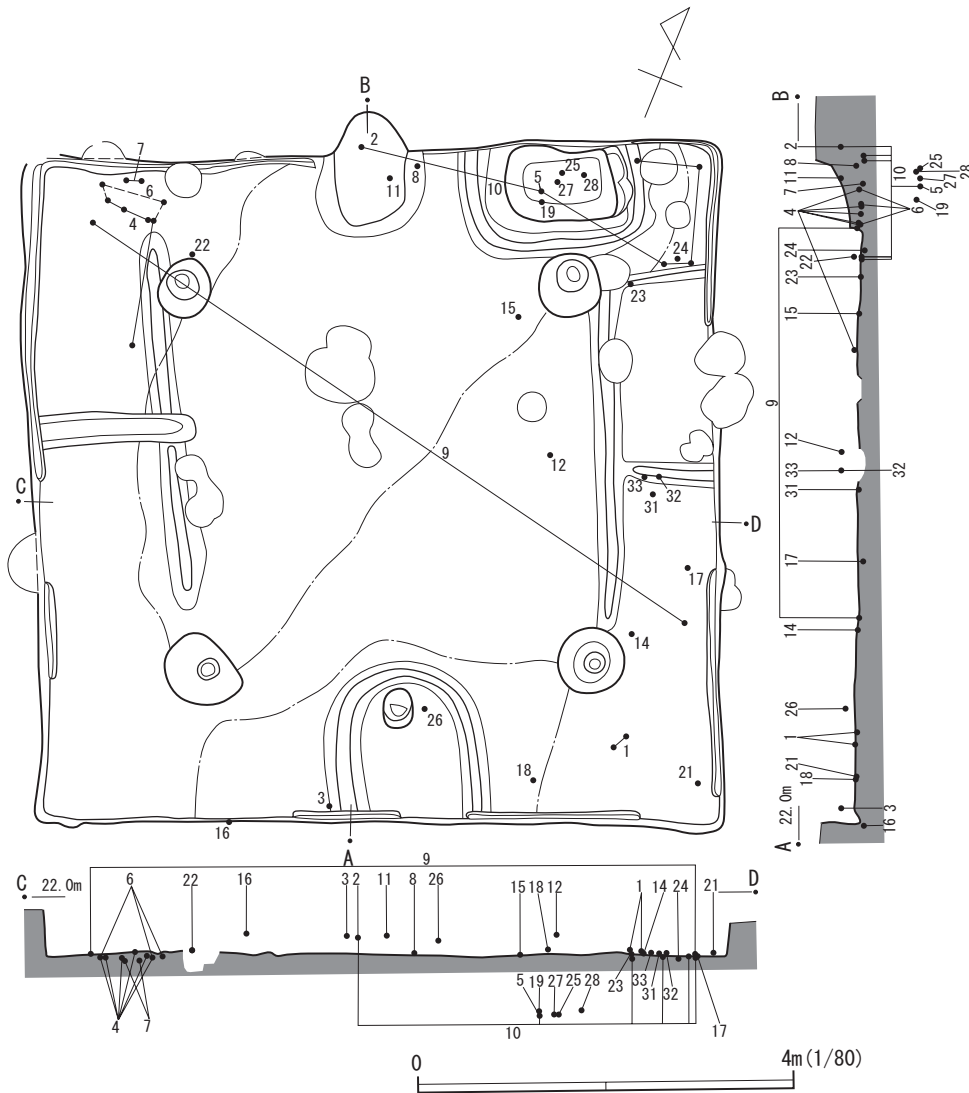
3 台帳:P13, No.8 材質:土師器 器種:杯 残存:30% 法量:口径(14.7), 稜径(10.9), 器高5.0 色調:外面橙~にぶい黄橙色, 内面橙色 胎土:礫(白微, 灰微), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部放射状にヘラミガキ。使用痕:- 備考:-

4 台帳:P2~4・7・8・11, No.7, 掘形No.2, Pit20C フク土 材質:土師器 器種:杯 残存:口縁部20%, 体部40% 法量:口径(14.0), 稜径(11.6), 器高4.7 色調:外面橙~黒色, 内面橙色 胎土:礫(赤少),

砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後若干のヘラミガキ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部放射状にヘラミガキ。使用痕:口縁端部が摩滅している。備考:-

5 台帳:P41, Pit6No.1・2 材質:土師器 器種:杯 残存:口縁部80%, 体部100% 法量:口径14.0, 稜径11.5, 器高4.4 色調:橙色 胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後若干のヘラミガキ, 体部上位ナデ, 下位ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部放射状にヘラミガキ。使用痕:- 備考:-

6 台帳:P3・6・7, No.5・8, Pit11 フク土 材質:土師器 器種:杯 残存:30% 法量:口径(13.6), 稜径(12.0), 器高4.0 色調:外面赤~黒色, 内面赤色 胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後若干のヘラミガキ, 体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部放射状にヘラミガキ。使用痕:-



第41図 三反田蜆塚遺跡第6次調査区第1号住居跡遺物出土状況

備考：－

7 台帳：P39・40, No.7, 11住フク土No.3, Pit11フク土 材質：土師器 器種：杯 残存：口縁部80%, 体部90% 法量：口径13.0, 稜径11.7, 器高4.9 色調：黒色 胎土：礫(白多), 砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヘラミガキ, 体部ヘラナデ?。内面口縁部ヨコナデ後一部ヘラミガキ, 体部ヘラミガキ。使用痕：外面が摩滅している。備考：－

8 台帳：P37 材質：土師器 器種：小型椀 残存：20% 法量：口径(10.0), 器高5.1 色調：橙～黒褐色 胎土：礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ・ナデ・若干のヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ。使用痕：口縁端部が摩滅している。備考：－

9 台帳：P1・21 材質：土師器 器種：手づくね土器 残存：40% 法量：口径(10.4), 器高4.1, 底径(5.2) 色調：にぶい黄橙～黒褐色 胎土：砂(白多, 透多, 黒少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ・ヘラナデ。内面ヘラナデ。使用痕：－ 備考：－

内面ヘラナデ。使用痕：内外面とも摩滅している。外面は二次焼成を受けている。備考：－

12 台帳：P23 材質：土師器 器種：台付甕 残存：台部20% 法量：器高(6.1), 底径(10.0) 色調：にぶい褐色 胎土：砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラナデ・ハケ調整。内面ヘラナデ。使用痕：－ 備考：遺構には伴わない。

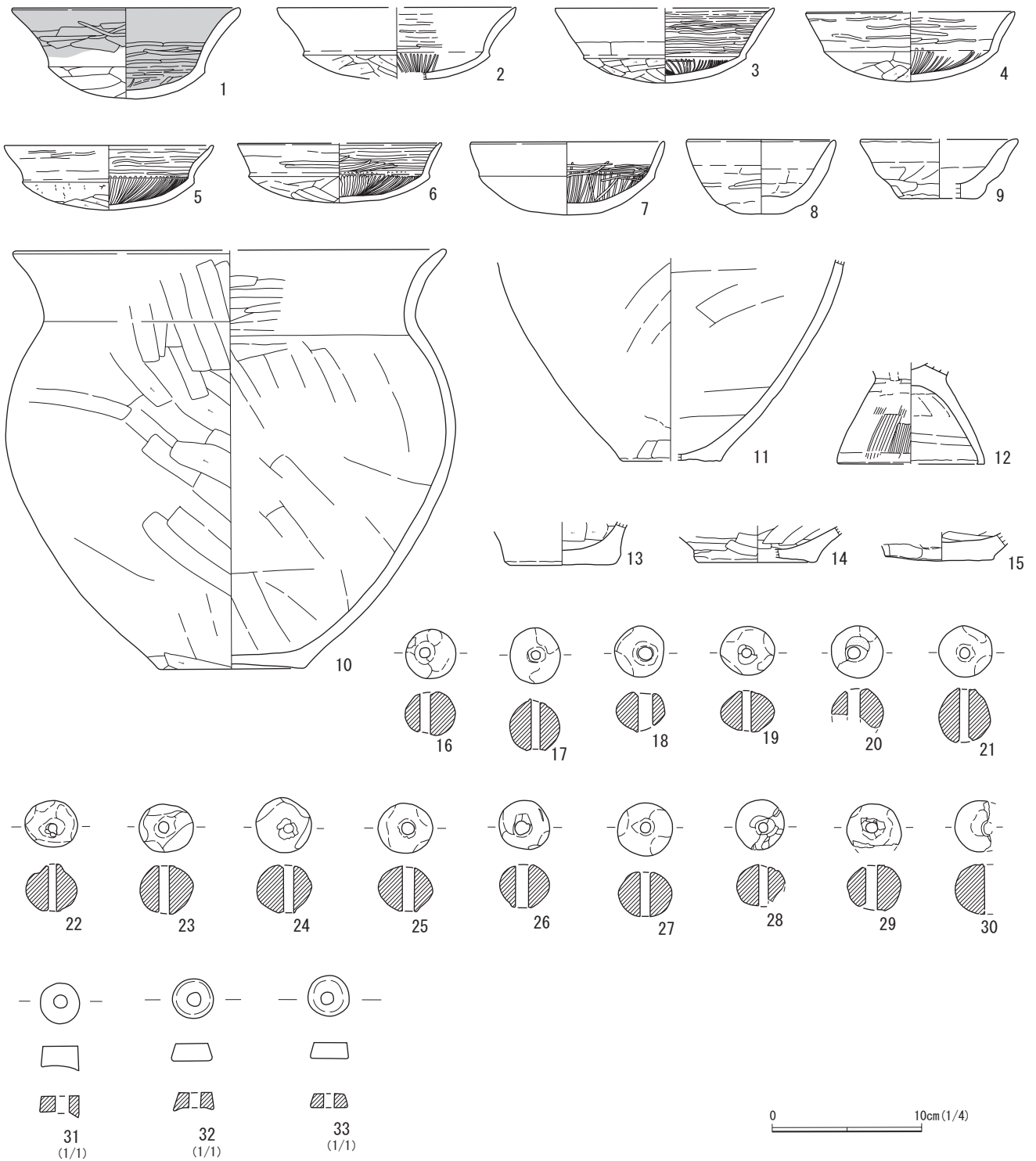
13 台帳：カマド内No.1 材質：土師器 器種：甕? 残存：底部100% 法量：器高(2.9), 底径7.4 色調：にぶい黄橙色 胎土：砂(白極多, 透極多) 焼成：良好 技法等：外面不明。内面ヘラナデ。使用痕：－ 備考：内外面とも非常に摩滅している。

14 台帳：P18, No.4 材質：土師器 器種：甕 残存：底部40% 法量：器高(2.4), 底径8.0 色調：外面浅黄色, 内面橙色 胎土：砂(白多, 透多, 灰少) 焼成：良好 技法等：外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。使用痕：－ 備考：－

15 台帳：P24 材質：土師器 器種：甕? 残存：底部100% 法量：器高(1.9), 底径7.2 色調：灰黄褐色 胎土：砂(白多, 透多) 焼成：

10 台帳：P25・26・29・30・41・49, No.1～3・5・7・10, pit6No.2, pit6フク土, 掘形No.1 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部10%, 胴部70%, 底部90% 法量：口径(29.0), 胴部最大径30.0, 器高28.0, 底径9.6 色調：外面赤～橙～黄橙～黒褐色, 内面赤～橙色 胎土：小石(白微), 礫(白少, 灰少, 赤少), 砂(白多, 透多, 黒多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ後タテ方向のヘラナデ, 胴部ヘラナデ後ヘラナデ, 底部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 胴部ヘラナデ。使用痕：外面はやや摩滅している。内面胴部は斑点状に剥離している。備考：胎土の赤色礫が目立つ。

11 台帳：P43, カマド内No.1・2 材質：土師器 器種：甕 残存：胴部下位～底部20% 法量：器高(13.5), 底径(6.7) 色調：外面暗橙～暗褐色, 内面暗褐～黒褐色 胎土：小石(白微), 礫(白少), 砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラナデ。



第42図 三反田蛭塚遺跡第6次調査区第1号住居跡出土遺物

良好 技法等：外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。使用痕：— 備考：—

16 台帳：P20 材質：土師質 種類：土錘 法量：長 2.9, 最大径 3.4, 孔径 0.7, 重量 28.99g 備考：孔周辺が両側とも摩滅し、所々が剥離している。

17 台帳：P22 材質：土師質 種類：土錘 法量：長 3.5, 最大径 3.7, 孔径 0.6, 重量 36.65g 備考：孔周辺が両側とも摩滅している。

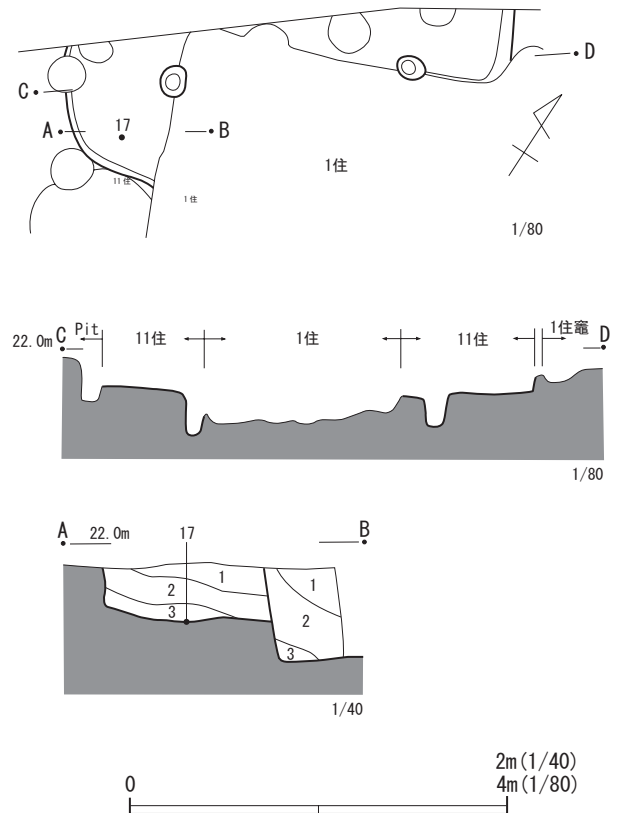
18 台帳：P15 材質：土師質 種類：土錘 法量：長 2.7, 最大径 3.4,

孔径 0.9, 重量 26.73g 備考：孔周辺が両側とも摩滅している。歪みが大きい。

19 台帳：P42 材質：土師質 種類：土錘 法量：長 2.8, 最大径 3.6, 孔径 0.6, 重量 28.63g 備考：孔周辺が両側とも摩滅している。

20 台帳：No.1 材質：土師質 種類：土錘 法量：長 (2.6), 最大径 3.5, 孔径 0.8, 重量 (23.43g) 備考：残存 50%。孔周辺が大きく欠損している。

- 21 台帳：P19 材質：土師質 種類：土錘 法量：長 3.5, 最大径 3.5, 孔径 0.6, 重量 36.96g 備考：孔周辺が両側とも摩滅している。
- 22 台帳：P10 材質：土師質 種類：土錘 法量：長 3.2, 最大径 3.5, 孔径 0.6, 重量 29.38g 備考：孔周辺が両側とも若干摩滅している。
- 23 台帳：P28 材質：土師質 種類：土錘 法量：長 3.2, 最大径 3.6, 孔径 0.7, 重量 34.67g 備考：孔周辺が両側とも摩滅している。
- 24 台帳：P27 材質：土師質 種類：土錘 法量：長 3.2, 最大径 3.7, 孔径 0.7, 重量 37.58g 備考：孔周辺が両側とも摩滅している。孔は片側穿孔。
- 25 台帳：P31 材質：土師質 種類：土錘 法量：長 3.0, 最大径 3.7, 孔径 0.8, 重量 32.80g 備考：孔周辺が両側とも摩滅している。
- 26 台帳：P14 材質：土師質 種類：土錘 法量：長 2.8, 最大径 3.4, 孔径 0.8～0.9, 重量 27.83g 備考：孔周辺が両側とも摩滅している。
- 27 台帳：P33 材質：土師質 種類：土錘 法量：長 3.0, 最大径 3.7, 孔径 0.7, 重量 36.41g 備考：孔周辺が片側のみ摩滅している。
- 28 台帳：P32 材質：土師質 種類：土錘 法量：長 2.7, 最大径 3.3, 孔径 0.6, 重量 (25.83g) 備考：残存 80%。孔周辺が両側とも摩滅している。
- 29 台帳：No.1 材質：土師質 種類：土錘 法量：長 3.1, 最大径 3.6, 孔径 0.8, 重量 (30.50g) 備考：残存 60%。孔周辺が両側とも摩滅している。
- 30 台帳：No.7 材質：土師質 種類：土錘 法量：長 3.3, 最大径 3.4, 孔径 (0.7), 重量 (21.36g) 備考：残存 40%
- 31 台帳：S6 材質：滑石 種類：白玉 法量：径 0.6～0.7, 厚 0.25, 孔径 0.2, 重量 0.24g 色調：灰白色 備考：両面平坦。断面形台形。
- 32 台帳：S5 材質：滑石 種類：白玉 法量：径 0.6～0.7, 厚 0.3, 孔径 0.2, 重量 0.26g 色調：灰白色 備考：片面平坦。断面形台形。
- 33 台帳：S4 材質：滑石 種類：白玉 法量：径 0.6, 厚 0.3～0.4, 孔径 0.2, 重量 0.24g 色調：灰白色 備考：片面平坦。



AB 土層断面

11 住

- 1 暗褐色 ローム粒含む
- 2 暗褐色 ローム粒含む, ロームブロック少量含む
- 3 暗褐色 ロームブロック多量に含む

1 住

- 1 褐色 ロームブロック含む
- 2 暗褐色 ローム粒含む
- 3 明褐色 ローム粒多量に含む

第 43 図 三反田蛭塚遺跡第 6 次調査区第 11 号住居跡

第 11 号住居跡

遺構 第 1 号住居跡により大きく掘り込まれているため、住居南端部の一部が検出されたとどまる。炉跡は確認されていない。住居跡の大部分が調査区外に位置しており、その規模は不明瞭ではあるが、P1・2 を支柱穴とみるならば、規模は東西方向で推定 4.8 m を測り、平面形は隅丸方形を呈すると思われる。壁高は東壁 24 cm, 西壁 24 cm を測る。炉及び壁周溝は認められなかった。ピットは、P 1・2 が支柱穴になるものと思われ、深さは P 1 が 48 cm, P 2 が 36 cm を測る。竅穴部覆土は、暗褐色土を基調としており、明らかな人為的埋め戻しの様相は呈していなかった。

遺物出土状況 遺物は住居南西隅床面から弥生式土器の壺底部 (第 47 図 17) が出土している。

(5) 土坑・ピット

土坑 土坑はSK1・10～13の5基調査された。

SK10・11は、直径0.7～0.8m規模を持ち、近接して所在している。いずれの土坑からも白褐色粘土ブロックが検出されており、SK11は底面に砂が敷かれていた。SK10からは瓦質土器の火鉢(第46図2)が、SK11からは瀬戸・美濃産陶器の菊皿(第46図1)が出土している。

SK12は、第2C号住居跡と重複して検出された土坑である。GH土層断面をみると、新旧関係はSK12→第2C号住居跡であり、SK12との重複部分には、第2C号住居跡の貼床(第5層)が認められた。第2C号住居跡は時期不明であるが、古代の竪穴住居跡とすれば、SK12は古代以前の土坑になるとと思われる。

ピット ピットは44基ほど検出された。それらは、P10からP22にかけて列状のまとまりを持つように見え、そのほかにもP10からP30にかけてのピット列、P3AからP29にかけてのピット列、P30からP29にかけてのピット列、のようなまとまりが指摘できる。おそらく今回の調査区と重複する形で堀立柱建物跡が存在するのではないだろうか。ピットからその時期を決定できる遺物は出土していないが、砥石(第46図3・4)や敲石(第46図5・6)が出土している。

遺物説明

第46図

1 出土位置：11号土坑 注記：P1 材質：陶器 器種：皿 残存：体部40%欠失 法量：口径13.3, 器高3.9, 高台径6.9 色調：素地白褐色 胎土：— 技法等：型押成形。内面から体部外面にかけて灰釉。備考：瀬戸・美濃産菊皿。17世紀後半～18世紀前半。

2 出土位置：10号土坑 注記：SK10P1・2 材質：瓦質土器 器種：火鉢 残存：口縁部片 色調：暗灰色, 断面灰色 胎土：礫(白少, 灰少) 技法等：横方向ナデの後, 口唇部上面から外面にかけて横方向ヘラミガキ

3 出土位置：ピット20C覆土 材質：石(流紋岩) 器種：砥石 残存：大きく欠失 法量：長さ11.3以上, 幅4.6, 厚さ2.6, 重量157.0g 色調：褐色 特徴：1面使用(A面) 備考：「流紋岩(ないしはデイサイト)。長石斑晶, 変質した斑晶鉱物もみられる。発泡は悪く, 流理は弱い。石基は隠微晶質。外形は自然礫で研磨面あり。おそらく岩脈起源の礫だが, 原産地は不明。」(矢野徳也氏による)

4 出土位置：ピット20C覆土 材質：石(珪質片岩) 器種：砥石 残存：大きく欠失 法量：長さ10.7以上, 幅4.5以上, 厚さ3.4以上, 重量163.0g 色調：褐色 技法等：1面使用(A面) 備考：「珪質片岩。石英・白雲母, 黒雲母, 残晶(砂粒由来)の石英・長石。片理が著しい。被熱による赤色化がみられる。日立変成岩類か。外形は自然礫。研磨面あり。」(矢野徳也氏による)

5 出土位置：ピット9覆土 材質：石(ホルンフェルス) 器種：砥石 残存：完形 法量：長さ15.3, 幅7.1, 厚さ4.6, 重量749.4g 色調：青灰色 技法等：平坦面に砥面A・Bが認められる。砥面A・Bには細かな擦痕が多数みられる。備考：「ホルンフェルス?(堇青石ホルンフェルス)。変状斑晶は分解物の白色物質(おそらく堇青石後)。基質は塊状でやや粒度にむらのある精晶質状。片理はみられない。残晶状の鉱物あり。石英, 微粒青灰色鉱物, 白雲母。八溝山地産?外形は自然礫。研磨面あり。表面は粒子がはがれ落ちるような独特な風化面を呈す。」(矢野徳也氏による)

6 出土位置：ピット18覆土 材質：石(砂岩) 器種：敲石 残存：大きく欠失 法量：長さ5.4以上, 幅5.0以上, 厚さ3.2以上, 重量134.6g 色調：表面褐色, 破面灰色 技法等：長軸端部に敲打痕。平坦面Aがやや光沢を帯びる。備考：「中粒砂岩(アルコース質)。砂粒, 石英, 長石, 黒雲母塊状。外形は自然礫。研磨面あり。中生界?原産地は特定できず。」(矢野徳也氏による)

(6) 縄文土器・弥生土器

第1号住居跡覆土及び第11号住居跡覆土より、縄文・弥生土器片が出土した。以下、各土器について説明する。

遺物説明

第47図

1 出土位置：1住覆土 注記：1住No.3 時代時期：縄文時代後期(堀之内1式) 文様：盲孔, 隆帯, 沈線文

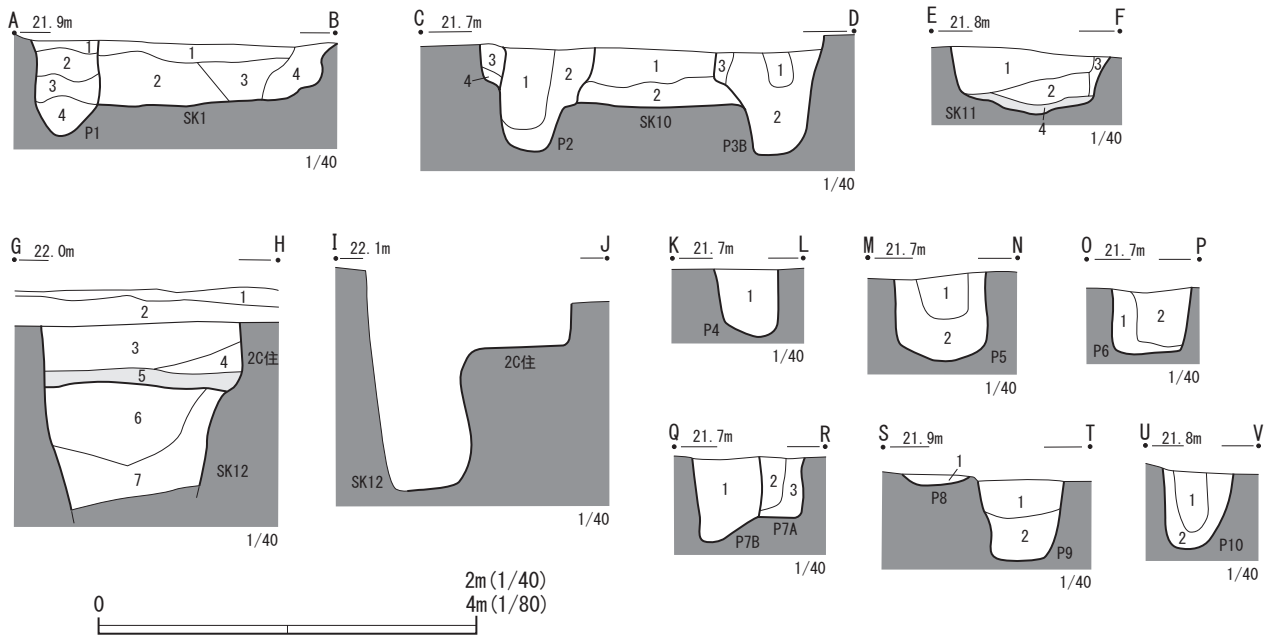
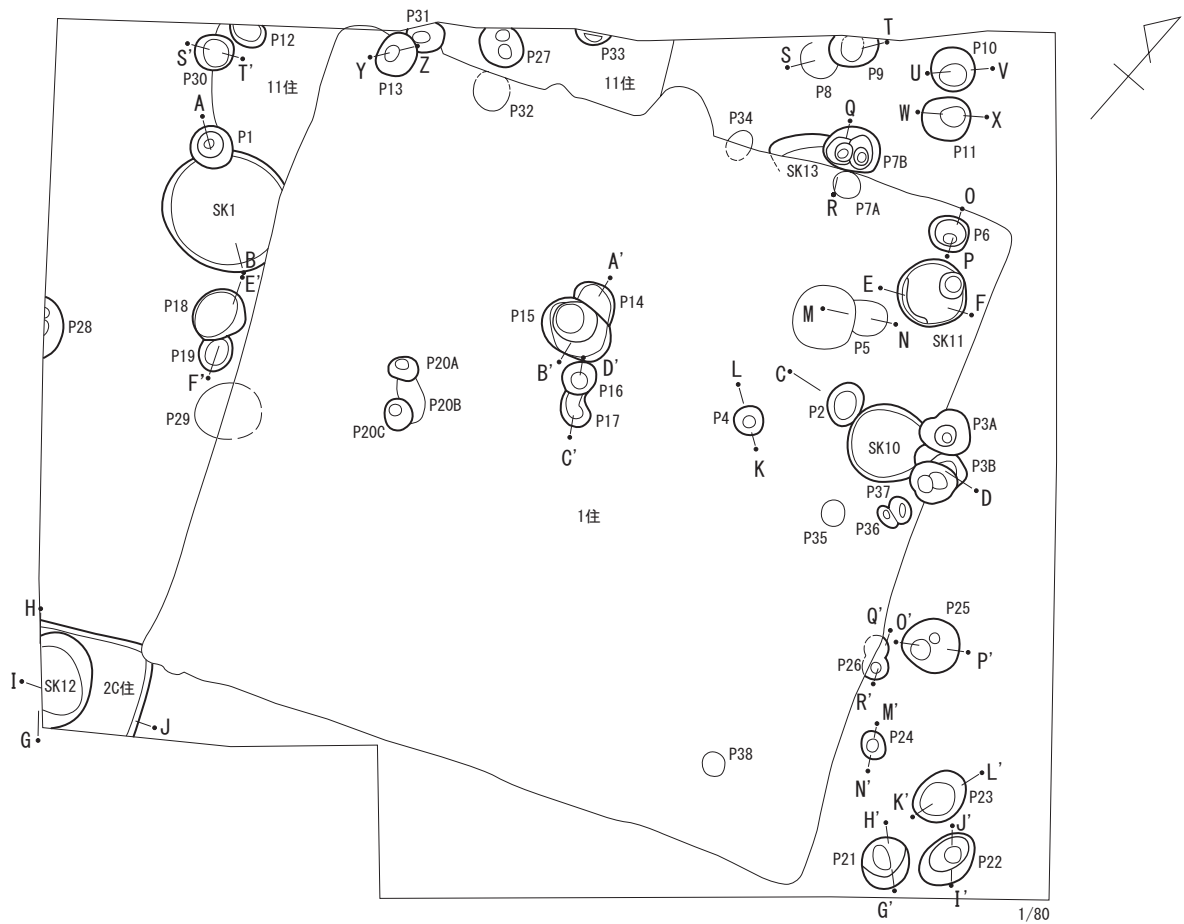
2 出土位置：1住覆土 注記：1住No.3 時代時期：縄文時代後期(堀之内1式) 文様：縄文(原体不明), 沈線文

3 出土位置：1住覆土 注記：1住No.2 時代時期：縄文時代後期(堀之内1式) 文様：単節縄文(LR), 沈線文

4 出土位置：1住覆土 注記：1住No.5 時代時期：縄文時代後期(堀之内1式) 文様：単節縄文(LR), 沈線文

5 出土位置：1住覆土 注記：1住No.3 時代時期：縄文時代後期(堀之内1式) 文様：単節縄文(LR), 沈線文 備考：無文部は縄文を磨消

6 出土位置：1住覆土 注記：1住No.5 時代時期：縄文時代後期(堀之内1式) 文様：縄文(原体不明), 沈線文 備考：無文部は縄文を磨消



第 44 図 三反田蛭塚遺跡第 6 次調査区土坑・ピット (1)

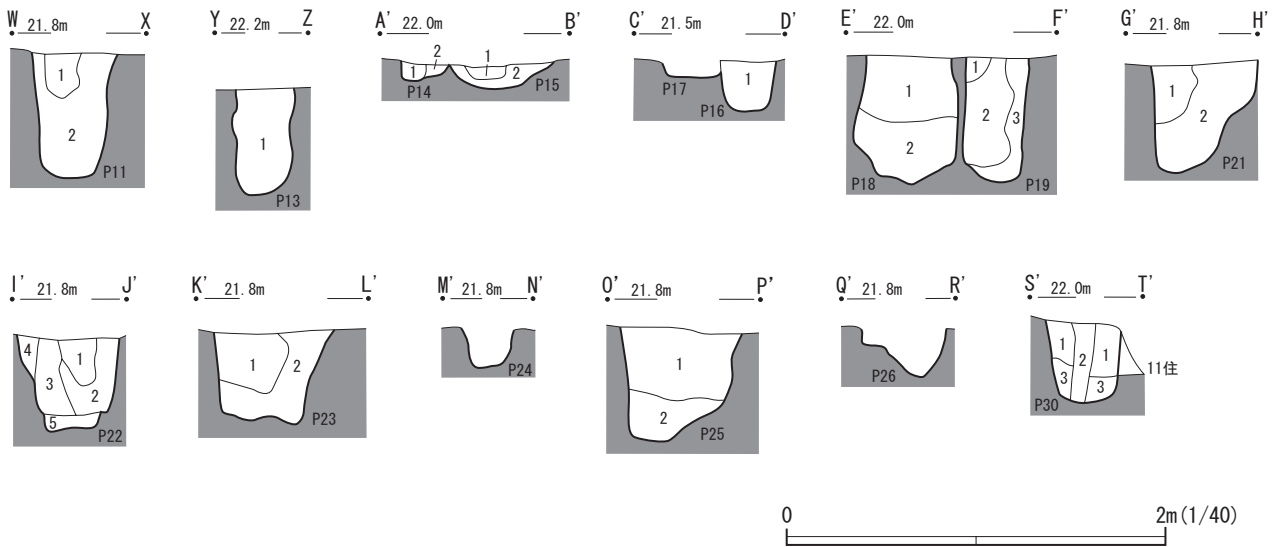
7 出土位置: 1 住覆土 注記: 1 住No.2 時代時期: 縄文時代後期 (堀之内 1 式) 文様: 単節縄文 (LR), 沈線文 備考: 浅く施文された沈線が縄文の凹凸で有節沈線のように見える

8 出土位置: 1 住覆土 注記: 1 住No.5 時代時期: 縄文時代後期 文様: 単節縄文 (LR)

9 出土位置: 1 住覆土 注記: 1 住No.5 時代時期: 縄文時代後期 文様: 複節縄文 (RLR)

10 出土位置: 1 住覆土 注記: 1 住No.5 時代時期: 弥生時代中期 文様: 付加条縄文 (LR+2R) 備考: 大型の壺形土器が推定される

11 出土位置: 1 住覆土 注記: 1 住No.5 時代時期: 弥生時代 文様:



第44・45 図土層説明

AB 土層断面 (P1, SK1)

P1

- 1 暗褐色 ローム粒含む 締まり有り
- 2 明褐色 ローム粒非常に多量に含む 締まり有り
- 3 暗褐色 ローム粒やや多量に含む 締まり有り
- 4 明褐色 ローム粒非常に多量に含む 締まり有り

SK1

- 1 暗褐色
- 2 褐色 ローム粒やや多量に含む
- 3 褐色 ローム粒含む
- 4 褐色 ローム粒多量に含む

CD 土層断面 (P2, SK10, P3B)

P2

- 1 暗褐色 ローム粒多量に含む 締まり無し
- 2 褐色 ローム粒多量に含む 締まり無し
- 3 暗褐色
- 4 明褐色 ローム土多量に混じる

SK10

- 1 暗灰褐色 白褐色粘土ブロック少量含む
ローム粒含む
- 2 黒褐色 ローム粒含む

P3B

- 1 暗褐色 ローム粒多量に含む 締まり無し
- 2 暗褐色 ローム小ブロック多量に含む 締まり有り
- 3 褐色 ローム粒多量に含む

EF 土層断面 (SK11)

- 1 褐色 白褐色粘土ブロック多量に含む
- 2 褐色 白褐色粘土粒多量に含む
- 3 明褐色 ローム粒多量に含む
- 4 褐色 砂多量に含む

GH 土層断面 (SK12, 2C 住)

- 1 黒褐色 耕作土
- 2 暗褐色 ローム粒含む
- 3 暗褐色 ローム粒やや多量に含む

4 褐色 ローム粒含む

5 褐色 ローム土混じる ロームブロック含む 締まり有り

6 黒褐色 明褐色土混じる

7 明褐色 ローム粒多量に含む 黒褐色土ブロック少量含む

KL 土層断面 (P4)

- 1 暗褐色 ローム粒含む 締まり無し

MN 土層断面 (P5)

- 1 暗褐色 ローム粒やや多量に含む 締まり無し
- 2 褐色 ローム小ブロック多量に含む 締まり有り

OP 土層断面 (P6)

- 1 褐色 ローム粒多量に含む 締まり無し
- 2 暗褐色 ローム小ブロック含む 締まり無し

QR 土層断面 (P7A・B)

- 1 明褐色 ローム小ブロック多量に含む 締まり無し
- 2 暗褐色 ローム粒含む
- 3 暗褐色 ローム粒やや多量に含む

ST 土層断面 (P8・9)

P8

- 1 褐色 ローム小ブロック多量に含む

P9

- 1 暗褐色 ローム粒多量に含む
- 2 暗褐色 ローム粒含む

UV 土層断面 (P10)

- 1 暗褐色 白褐色粘土混じる ローム粒含む 締まり無し
- 2 褐色 ローム粒多量に含む 締まり有り

WX 土層断面 (P11)

- 1 暗褐色 ローム粒多量に含む 締まり無し
- 2 暗褐色 ローム粒多量に含む 締まり有り

YZ 土層断面 (P13)

- 1 暗褐色 ローム粒非常に多量に含む 焼土粒微量に含む 締まり無し

A' B' 土層断面 (P14・15)

P14

- 1 暗褐色 ローム粒含む
- 2 暗褐色 ローム小ブロック多量に含む 締まり有り

P15

- 1 暗褐色 ローム粒多量に含む ローム大ブロック少量含む 締まり無し
- 2 暗褐色 ローム小ブロック多量に含む 締まり有り

C' D' 土層断面 (P16・17)

- 1 黒褐色 ローム粒含む 締まり有り

E' F' 土層断面 (P18・19)

P18

- 1 褐色 ローム粒多量に含む ロームブロック含む やや締まり有り
- 2 明褐色 ローム粒非常に多量に含む 締まり無し

P19

- 1 暗褐色 ロームブロック含む 締まり有り
- 2 暗褐色 ローム粒含む 締まり無し
- 3 暗褐色 ローム粒含む 締まり有り

G' H' 土層断面 (P21)

- 1 褐色 ローム粒含む
- 2 褐色 ローム土多量に含む

I' J' 土層断面 (P22)

- 1 暗褐色 ローム粒多量に含む 締まり無し
- 2 暗褐色 ローム小ブロック含む 締まり有り
- 3 暗褐色 ローム粒やや多量に含む
- 4 褐色 ローム土多量に混じる
- 5 褐色 ローム粒多量に含む 締まり有り

K' L' 土層断面 (P23)

- 1 暗褐色 ローム小ブロック多量に含む 締まり有り

り無し

- 2 暗褐色 ローム小ブロック多量に含む 締まり有り

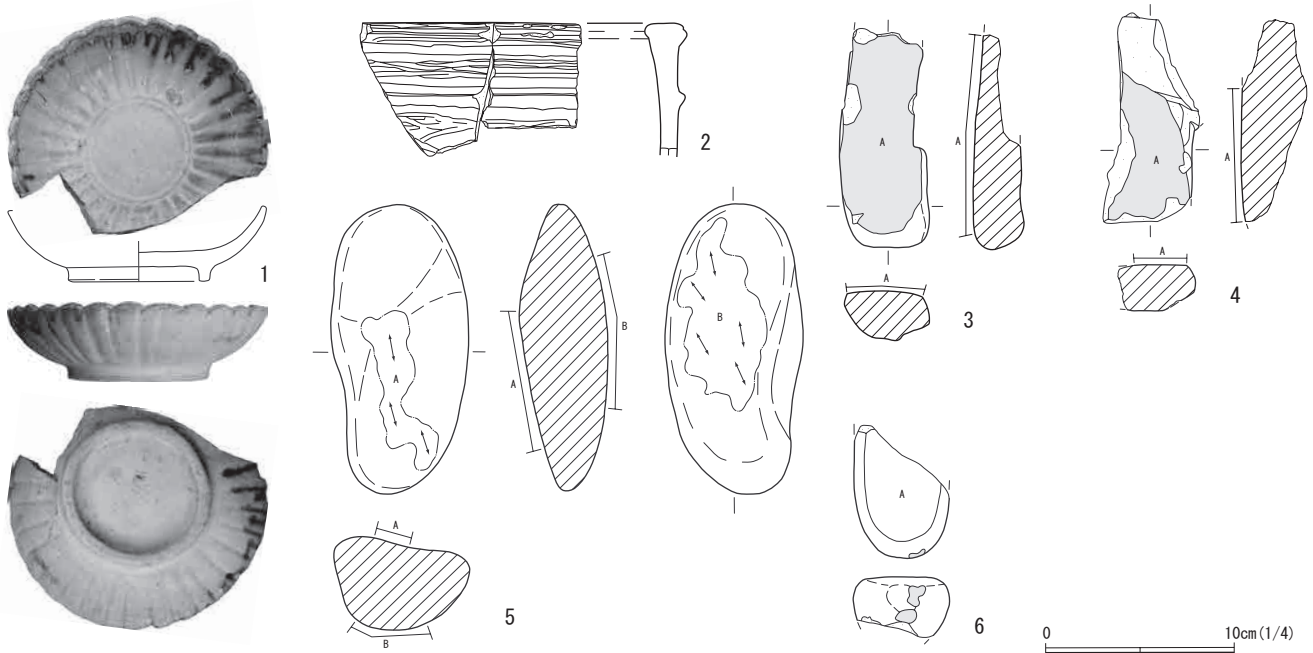
O' P' 土層断面 (P25)

- 1 褐色 ローム小ブロック多量に含む 締まり無し
- 2 暗褐色 ローム粒多量に含む 締まり有り

S' T' 土層断面 (P30)

- 1 黄褐色 ロームブロック主体 締まり有り
- 2 褐色 ローム粒多量に含む 締まり無し
- 3 暗褐色 ローム粒含む

第45 図 三反田蛭塚遺跡第6次調査区土坑・ピット (2)



第46図 三反田蛭塚遺跡第6次調査区土坑・ピット出土遺物

付加条縄文 (RL+2L)

12 出土位置：11住覆土，pit11覆土 注記：11住No.3，pit11フク土
時代時期：弥生時代後期（十王台式） 器種：壺形土器（小型） 法量：頸径51mm（残存率31%），胴径80mm（残存率40%） 文様：櫛描文（6本櫛歯），隆帯（指頭調整） 備考：器外面炭化物付着，器内面が発泡状に剥落

13 出土位置：1住覆土，pit11覆土 注記：1住No.1，1住No.5，pit11フク土 時代時期：弥生時代後期（十王台式） 器種：壺形土器（小型） 法量：胴径128mm（残存率25%） 文様：櫛描文（3本櫛歯），付加条縄文（L×L，R×R） 備考：胎土に金雲母を含む，器外面炭化物付着

14 出土位置：1住覆土 注記：1住No.2 時代時期：弥生時代後期（十王台式） 器種：壺形土器（中・小型） 法量：口径128mm（残存率8%） 文様：口唇部縄文（R-S），付加条縄文（L-Z），隆帯（指頭調整）

15 出土位置：1住覆土 注記：1住No.7 時代時期：弥生時代後期（十王台式） 器種：壺形土器（中・小型） 法量：胴径144mm（残存率18%） 文様：付加条縄文（L-Z，R×R） 備考：器外面炭化物付着，器内面変色

16 出土位置：1住覆土 注記：1住No.5 時代時期：弥生時代後期（十王台式） 器種：壺形土器（中・小型） 法量：底径88mm（残存率36%） 文様：付加条縄文（R×R），底面布目痕

17 出土位置：11住P1 注記：11住P1 時代時期：弥生時代後期（十王台式） 器種：壺形土器（中・小型） 法量：底径968mm（残存率77%） 文様：付加条縄文（L-Z，R-S），底面布目痕 備考：器内面変色，底面は焼成時に剥落か

18 出土位置：1住覆土 注記：1住No.5 時代時期：弥生時代後期（十王台式） 器種：壺形土器（中・小型） 文様：口唇部縄文（R×R），隆帯（刻み） 備考：胎土に金雲母を含む，器外面炭化物付着

19 出土位置：1住覆土，pit11覆土 注記：1住No.5，pit11フク土 時代時期：弥生時代後期（十王台式） 器種：壺形土器（大型） 文様：隆帯（棒状？刻み） 備考：胎土に金雲母を含む

20 出土位置：1住覆土 注記：1住No.5 時代時期：弥生時代後期（十王台式） 器種：壺形土器（中・小型） 文様：口唇部刻み（筧状），櫛描文（4本櫛歯） 備考：細頸形か？

21 出土位置：1住覆土 注記：1住No.5 時代時期：弥生時代後期（十王台式） 器種：壺形土器（中・小型） 文様：口唇部刻み（棒状もしくは縄文原体），櫛描文（4本櫛歯）

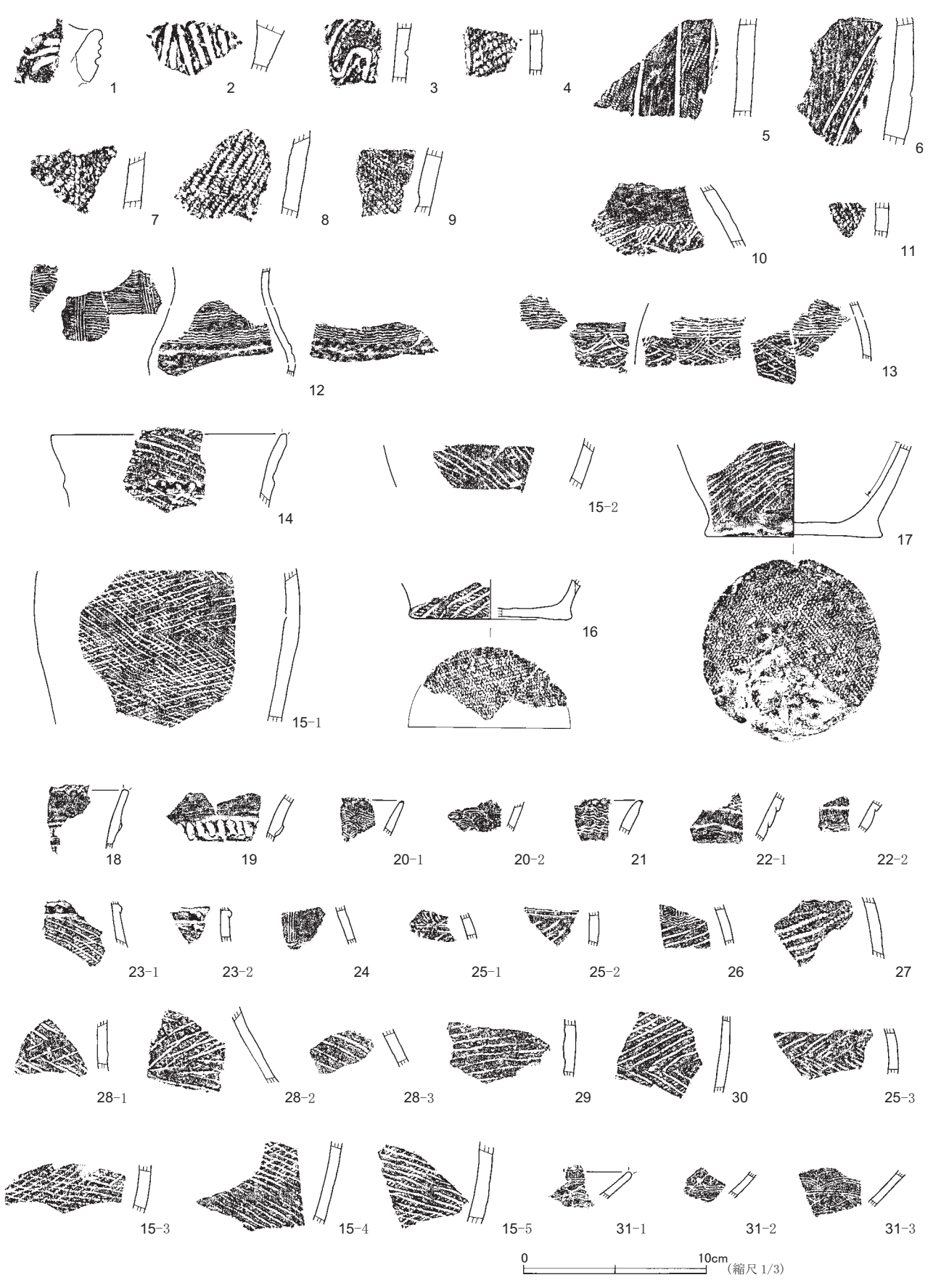
22 出土位置：1住覆土 注記：1住No.1，1住No.3 時代時期：弥生時代後期（十王台式） 器種：壺形土器（中・小型） 文様：櫛描文（4本櫛歯か），隆帯（指頭調整横撫で）

23 出土位置：1住覆土 注記：1住No.5 時代時期：弥生時代後期（十王台式） 器種：壺形土器（中・小型） 文様：隆帯（指頭調整），付加条縄文（L×L）

24 出土位置：1住覆土 注記：1住No.5 時代時期：弥生時代後期（十王台式） 器種：壺形土器（中・小型） 文様：櫛描文（3本櫛歯）

25 出土位置：1住覆土，表土 注記：1住No.3，表土 時代時期：弥生時代後期（十王台式） 器種：壺形土器（中・小型） 文様：櫛描文（3本櫛歯），付加条縄文（LR+2Rか？）

26 出土位置：1住覆土 注記：1住No.2 時代時期：弥生時代後期（十王台式） 器種：壺形土器（中・小型） 文様：櫛描文（4本櫛歯），付加



第47図 三反田蜆塚遺跡第6次調査区出土縄文・弥生土器

条縄文 (R×R)

27 出土位置：1住覆土 注記：1住No.3 時代時期：弥生時代後期(十王台式) 器種：壺形土器(中・小型) 文様：櫛描文, 付加条縄文(R-S)

28 出土位置：SK1覆土, pit11覆土 注記：SK1フク土, pit11フク土 時代時期：弥生時代後期(十王台式) 器種：壺形土器(大型) 文様：付加条縄文(R×R, L-Z) 備考：胎土に金雲母を含む, 器内面が発泡状に剥落

29 出土位置：1住覆土 注記：1住No.5 時代時期：弥生時代後期(十王台式) 器種：壺形土器(大型) 文様：付加条縄文(R×R) 備考：胎土に金雲母を含む, 器内面が発泡状に剥落

30 出土位置：1住覆土 注記：1住No.5 時代時期：弥生時代後期(十王台式) 器種：壺形土器(中・小型か) 文様：付加条縄文(R×R, L×L)

31 出土位置：1住覆土 注記：1住No.1, 1住No.4, 1住No.5 時代時期：弥生時代後期(十王台式) 器種：高環形土器 文様：口唇部刻み(縄文原体), 櫛描文(3本櫛歯), 格子状文(窠状) 備考：胎土に金雲母を含む

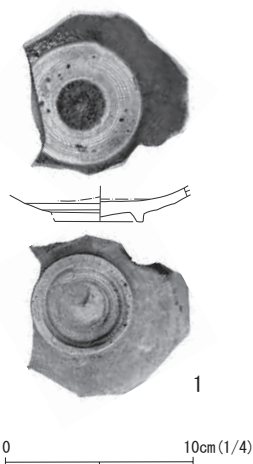
(7) 調査区からの出土遺物

弥生時代後期の第11号住居跡覆土中より第48図1のような肥前産青緑釉輪髡皿が出土している。これが掘立柱建物跡と関わる遺物になる可能性もあろう。

遺物説明

第48図

1 出土位置：11住覆土 注記：No.1 材質：陶器 器種：皿 残存：底部 法量：高台径4.7 色調：素地白灰褐色 胎土：— 技法等：内面青緑釉。体部外面透明釉。底部外面露胎。見込み蛇ノ目釉ハギ。備考：肥前産青緑釉輪髡皿。17世紀後半～18世紀前半。



第48図 三反田蛭塚遺跡第6次調査区出土遺物

2 西中島遺跡第5次調査報告

(1) 発掘調査の経緯

津田字向井3166番1,6に所在する土地について、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が提出された。現地は平成25年6月の試掘調査で遺構が確認されていたため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は事前に発掘調査を必要とし、文化財保護法93条1項に基づく届出が必要である旨の回答を行ない、届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、発掘調査の準備を進めた。発掘調査は8月20日から9月12日にかけて行われた。

(2) 調査の経過

調査期間 / 平成25年8月20日～9月12日

調査担当 / 佐々木義則

調査面積 / 97 m²

時代 / 縄文～平安時代

遺構 / 竪穴住居跡2基（古墳時代1基，平安時代1基）

調査地は、第4次調査区の一部である。台地縁辺部から60mほど離れた地点に位置し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは約0.2～0.5mほどを測る。調査地の南西方向に那珂川低地から伸びてくる小さな谷が入っており、古代にはその谷の湧水が利用されていたことも考えられよう。

さて今回の調査は個人住宅建築に伴う発掘調査であり、建物部分を中心に調査区が設定された。当地区は第4次調査により遺構分布状況は把握されていたため、今回の調査区に係る遺構はおおよそ予想がついた。なお今回検出された遺構番号は、過去の試掘時に付された番号に従っている。それでは以下、簡単に調査の経過を記す。

8月20日：重機による表土除去開始。 8月21日：遺構確認作業。遺構掘り込み開始。 8月22日：博物館実習生の調査参加。 8月28日：第1号住居跡遺物出土状況写真・図。 8月29日：第1号住居跡完掘写真。

8月30日：第1号住居跡平面図作成。 9月10日：第1号住居跡掘形・第2号住居跡平面図作成。器材撤収。

9月12日：重機による埋め戻し。



第49図 西中島遺跡第5次調査区の位置（数字は調査回数）



写真3 遺構確認状況

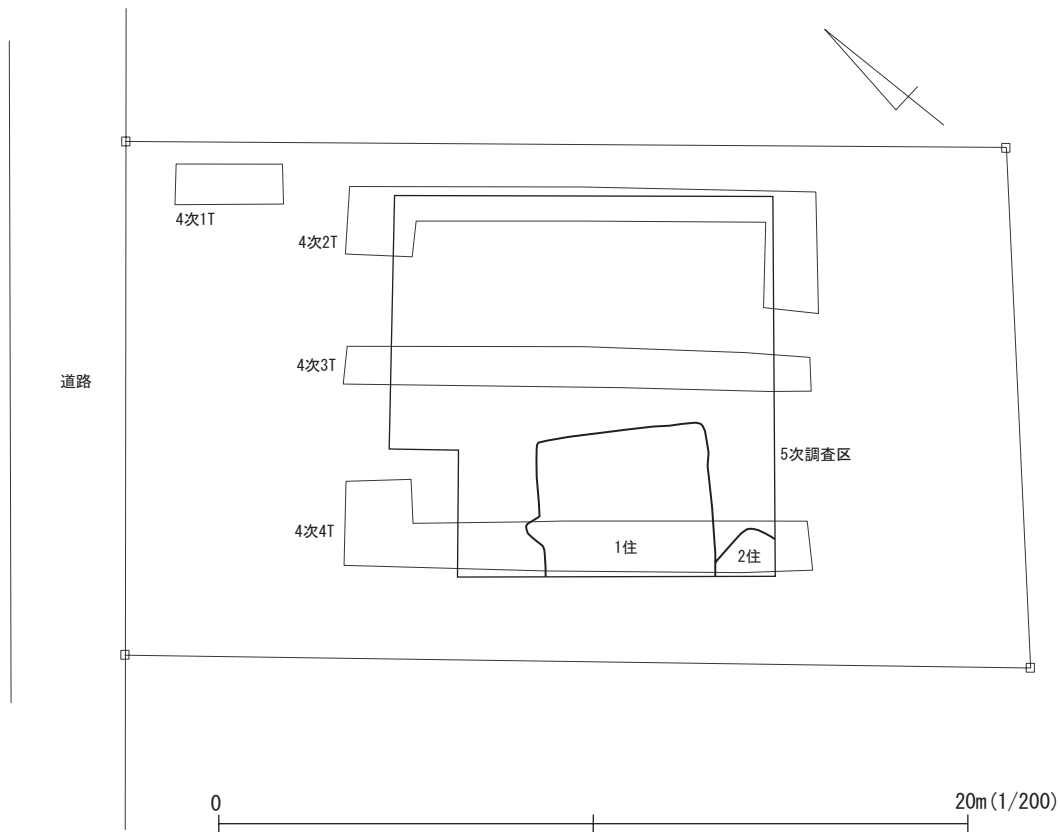


写真4 博物館学芸員実習生による調査風景

(3) 住居跡

第1号住居跡

遺構 第2号住居跡と重複しており、新旧関係は第2号住居跡→第1号住居跡である。西壁は調査区外となっているため未調査である。当住居跡の主軸方向は、N-41°-Wを測る。竪穴部の規模は南北4.5mを測る。



第 50 図 西中島遺跡第 5 次調査区

壁高は北壁 40cm, 東壁 40cm, 南壁 35cm を測る。壁周溝は明瞭ではないが, 断続的に全体に認められた。

ピットは, P 1・2・3・4 が主柱穴, P 5 が出入り口ピットになるものと思われる。主柱穴の深さは P 1 が 95 cm, P 2 が 106cm, P 3 が 95cm, P 4 が 100cm, P 5 が 20cm。床面は, 出入り口ピット P 5 から竈前にかけての部分硬化していた。竈穴部の覆土は, ロームブロックを含む土が堆積しており人為的埋土と考えられる。

竈の遺存状況は良くないが, 燃烧部付近の両袖部分には粘土が残っており, 第 2 層が燃烧部内面に形成した焼土になるものと考えられる。住居掘形は, 竈穴部東西部分に深さ 5 ~ 30cm ほど浅く掘りくぼめた程度の掘り込みが認められている。

遺物出土状況 遺物は少ない。床面付近の遺物は散在した出土状況を示す。杯 4 が竈脇の床面から正位で出土しており, 住居廃絶時の祭祀に関わる遺物の可能性がある。杯 4 のすぐそばの竈中からは, 完形の支脚 13 が出土していることにも注意したい。

遺物説明

第 54 図

1 台帳:P15・16, 1区フク土 材質:土師器 器種:杯 残存:70%

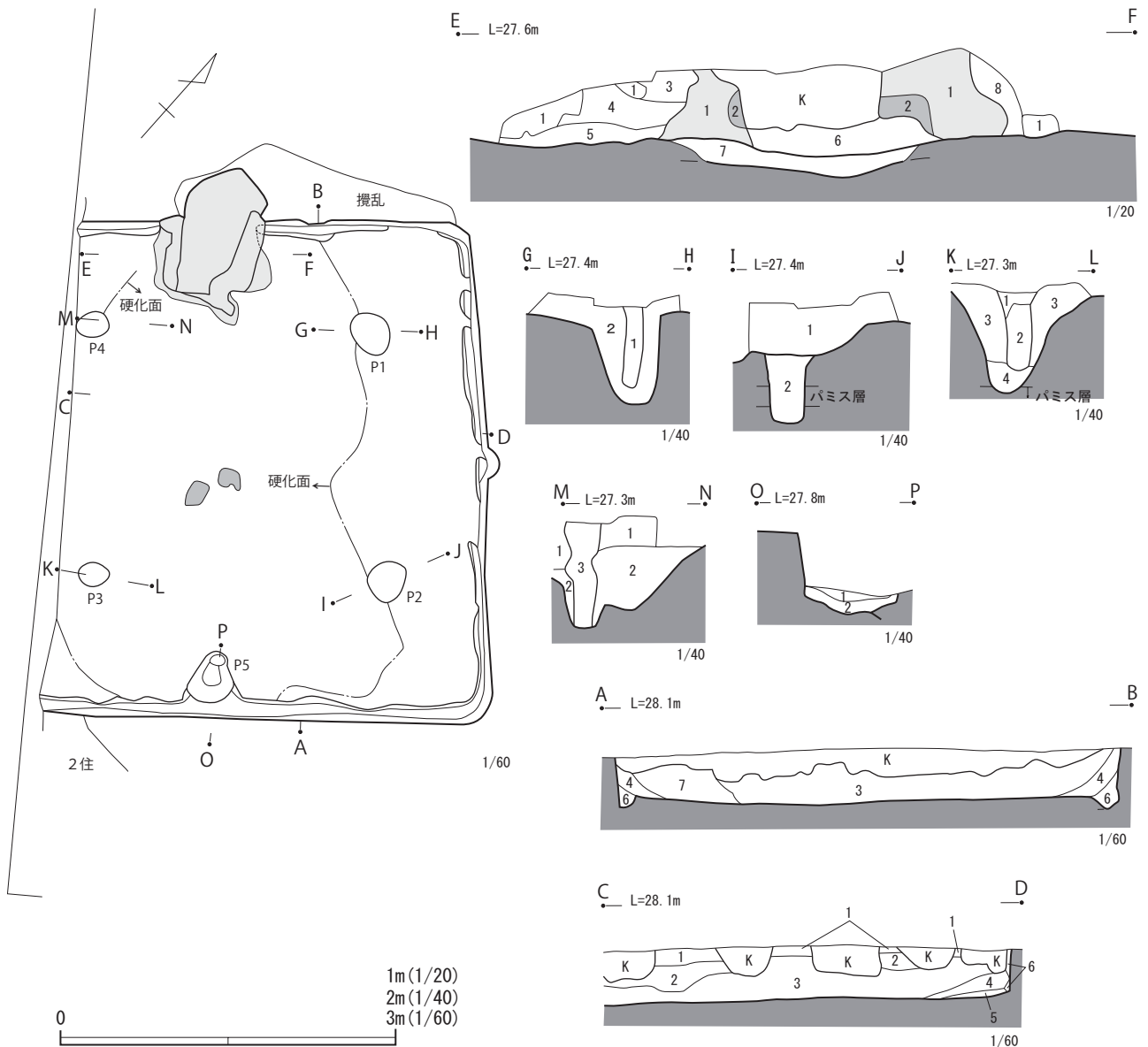
法量:口径 15.0, 稜径 15.3, 器高 4.8 色調:にぶい褐~黒褐色 胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラ削り後ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部放射状にヘラミガキ。内外面とも黒色処理されている。使用痕:— 備考:—

2 台帳:P6 材質:土師器 器種:杯 残存:30% 法量:口径(12.7), 器高 3.8 色調:黒褐~黒色 胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラ削り後ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理されている。使用痕:口縁端部がやや摩滅してる。備考:—

3 台帳:P14 材質:土師器 器種:杯 残存:10% 法量:口径(12.2), 器高(3.0) 色調:にぶい黄橙~黒褐色 胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部不明。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラミガキ。使用痕:口縁端部と外面体部が摩滅している。備考:—

4 台帳:P17 材質:土師器 器種:杯 残存:90% 法量:口径 10.3, 器高 3.0 色調:にぶい褐~黒褐色 胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラ削り?。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラミガキ。使用痕:口縁端部の大半が欠失し, 外面体部が摩滅している, 備考:—

5 台帳:3区フク土, 2区掘形 材質:土師器 器種:杯 残存:20%



AB・CD 土層断面

- 1 暗褐色 (ローム粒含む)
- 2 暗褐色 (ローム粒多量含む 黒褐色土混じる 人為的埋土か)
- 3 褐色 (ロームブロック多量含む)
- 4 黒褐色 (ローム小ブロック含む)
- 5 黄褐色 (ロームブロック主体)
- 6 明褐色 (ローム粒多量含む)
- 7 褐色 (ローム粒多量含む)

EF 土層断面

- 1 白褐色 竈粘土
- 2 橙色 (焼土 第1層が焼け落ちた土)
- 3 黒褐色 (白褐色粘土粒含む)
- 4 暗褐色 (白褐色粘土粒多量含む 白褐色粘土ブロック含む)
- 5 黒褐色 (白褐色粘土粒含む)

GH 土層断面

- 1 暗褐色 (ローム小ブロック含む ローム粒多量含む 締まり無し)
- 2 明褐色 (ロームブロック多量含む 焼土ブロック少量含む 1住掘形埋土)

IJ 土層断面

- 1 明褐色 (ロームブロック多量含む 焼土ブロック少量含む 黒褐色土ブロック含む 1住掘形埋土)
- 2 明褐色 (バミスブロック含む ロームブロック含む 暗褐色土混じる 締まり無し 旧柱穴覆土)

KL 土層断面

- 1 暗褐色 (ローム粒含む ややしまり無し)
- 2 褐色 (ローム土多量含む バミスブロック少量含む ややしまり無し)
- 3 明褐色 (ロームブロック多量含む 黒褐色土混じる 住居掘形埋土)
- 4 明褐色 (ローム土主体 締まり有り)

MN 土層断面

- 1 褐色 (ロームブロック非常に多量含む 黒褐色土 1住掘形埋土)
- 2 明褐色 (ロームブロック主体 1住掘形埋土)
- 3 褐色 (ローム粒多量含む 締まり無し)

OP 土層断面

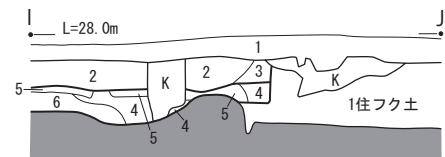
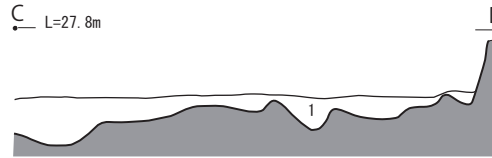
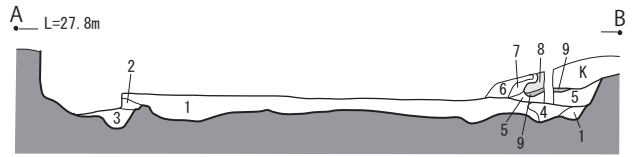
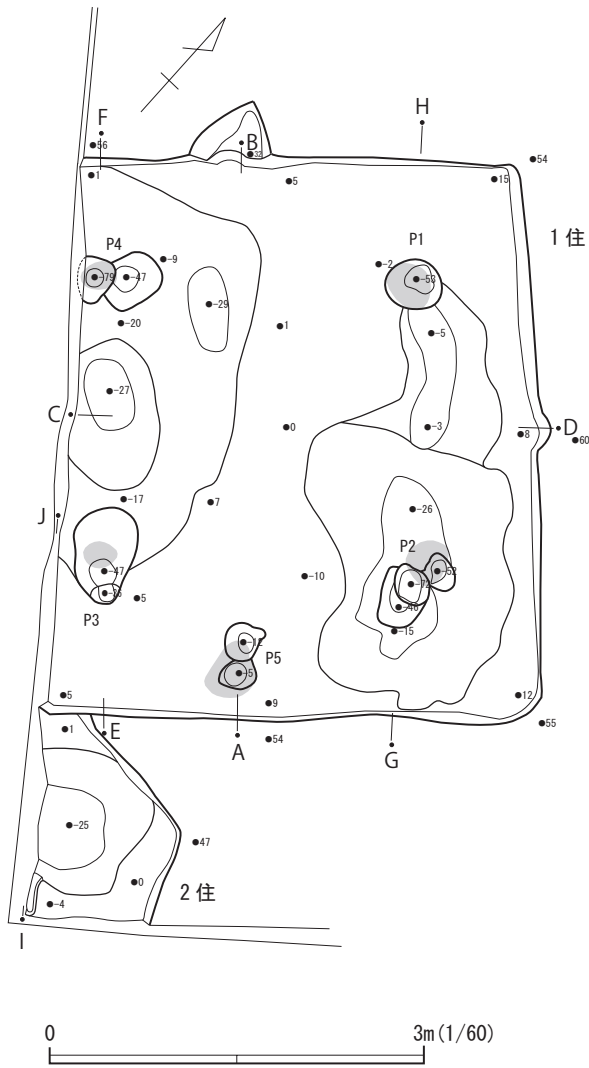
- 1 黒褐色 (ローム粒含む ロームブロック少量含む)
- 2 暗褐色 (ロームブロック含む ローム粒多量含む)

第51図 西中島遺跡第5次調査区第1号住居跡

法量：口径(10.0)，器高(3.1) 色調：にぶい褐～黒褐色 胎土：砂(白多，透多) 焼成：良好 技法等：内外面とも口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ，体部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理されている。使用痕：一 備

考：一

6 台帳：P5，3区フク土 材質：土師器 器種：鉢 残存：口縁部20%，胴部50%，底部80% 法量：口径(16.4)，器高8.1，底径6.4



AB・CD 土層断面

- 1 明褐色 (ロームブロック多量含む 黒褐色土ブロック含む
パミスブロック少量含む 締まりあり)
- 2 黒褐色 (締まり無し)
- 3 明褐色 (ローム粒多量含む ローム小ブロック少量含む 締まり無し)
- 4 黄褐色 (ローム土主体 黒褐色土混じる)
- 5 暗褐色 (白褐色粘土粒含む 焼土粒含む)
- 6 白褐色 (竈粘土の流出土)
- 7 明褐色 (白褐色粘土多量含む)
- 8 白褐色 (竈粘土)
- 9 橙色 (第8層が焼けた土)

IJ 土層断面

- 1 暗褐色 (焼土)
- 2 暗褐色 (ローム粒多量含む 焼土粒少量含む)
- 3 褐色 (ローム粒含む 焼土粒含む)
- 4 明褐色 (白褐色粘土多量混じる ローム粒・焼土粒含む 2住掘形埋土)
- 5 明褐色 (ロームブロック多量含む 焼土粒少量含む 非常に締まりあり 2住床面)
- 6 明褐色 (ローム小ブロック多量含む 2住掘形埋土)

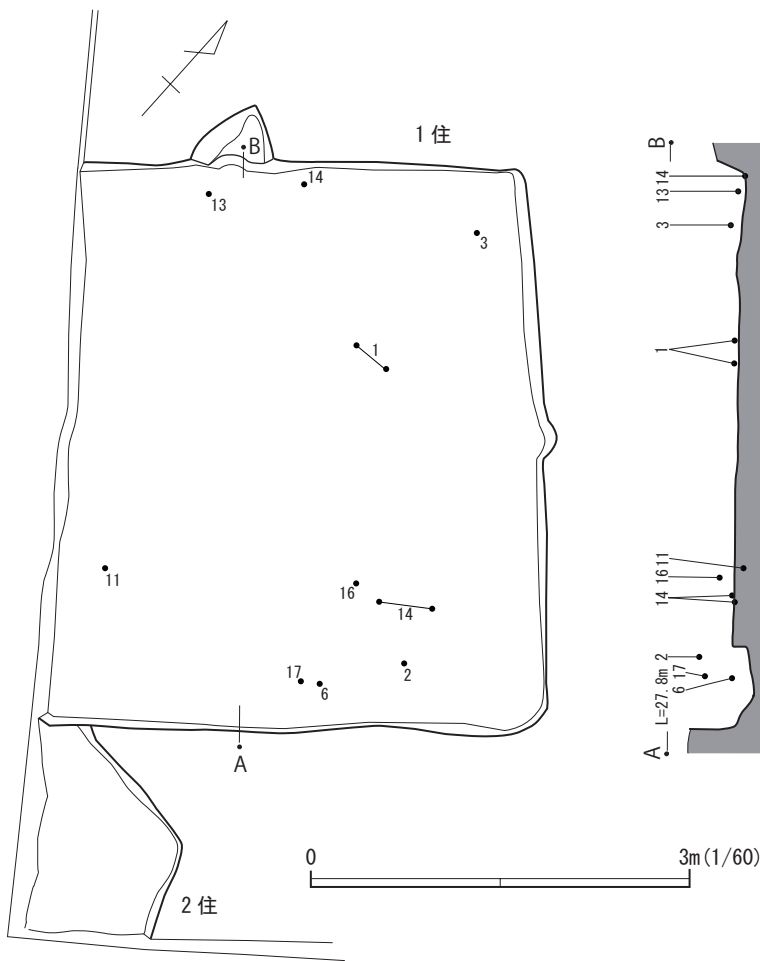
第52図 西中島遺跡第5次調査区第1号住居跡掘形 (小数字は比高差 cm。住居床面の柱穴跡を薄いトーンで示した。)

色調：外面浅黄～黄橙色，内面浅黄～にぶい褐色 胎土：礫(透微)，砂(白多，透多，黒微) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラ削り，底部木葉痕。内面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラナデ。使用痕：内外面ともやや摩滅している。備考：－

7 台帳：4区フク土 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部10% 法量：口径(21.0)，器高(4.0) 色調：外面黒褐色，内面浅黄橙～黒褐色 胎土：礫(白多)，砂(白多，透多) 焼成：良好 技法等：内外面ともヨコナデ。使用痕：－ 備考：－

8 台帳：3区フク土 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部10% 法量：口径(17.0)，器高(3.1) 色調：浅黄橙～にぶい褐色 胎土：砂(白多，透多) 焼成：良好 技法等：内外面ともヨコナデ。使用痕：外面にスス状物の付着がみられる 備考：－

9 台帳：カマド内一括 材質：土師器 器種：甕 残存：胴部下位～底部20% 法量：器高(10.7)，底径(7.0) 色調：外面にぶい黄橙～黒褐色，内面にぶい褐色 胎土：礫(白微，灰微)，砂(白多，透多，赤微)，骨針を含む 焼成：良好 技法等：外面胴部ヘラ削り，底部木葉痕。内



第53図 西中島遺跡第5次調査区第1・2号住居跡遺物出土状況

面ヘラナデ。使用痕：外面が二次焼成を受けている。備考：－

10 台帳：2区フク土 材質：土師器 器種：甕 残存：底部10% 法量：器高(3.6)，底径(8.0) 色調：外面浅黄橙～黒色，内面浅黄橙色 胎土：礫(白少)，砂(白多，透多，赤微) 焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り。

内面ヘラナデ。使用痕：外面がやや摩滅している。備考：－

11 台帳：P3 材質：土師器 器種：甕？ 残存：底部20% 法量：器高(2.4)，底径(7.5) 色調：浅黄橙色 胎土：砂(白多，透多，灰少) 焼成：良好 技法等：外面胴部ヘラ削り，底部木葉痕。内面ヘラナデ。

使用痕：－ 備考：－

12 台帳：3区フク土 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部10% 法量：口径(17.8)，器高(6.1) 色調：橙色 胎土：砂(白多，透多，黒多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラ削り後ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラナデ。使用痕：－ 備考：－

13 台帳：支脚1 材質：土師質 種類：支脚 残存：完形 法量：長12.5，上部径2.9，底部径6.8 色調：外面浅黄橙～橙色，内面橙色 胎土：砂(白多，透多) 焼成：良好 技法等：内外面ともナデ。器面が凸凹している。使用痕：外面が二次焼成を受け，カマド材の付着がみられる。備考：－

14 台帳：P8・10，2区フク土，3区フク土 材質：土師質 種類：支脚 残存：－ 法量：長(10.4)，底部径9.0 色調：浅黄～にぶい褐色 胎土：砂(白少，透多，赤少) 焼成：良好 技法等：内外面とも上部ナデ，下位ヨコナデ。器面が凸凹している。使用痕：内外面とも摩滅している。備考：－

15 台帳：2区フク土 材質：土師質 種類：支脚 残存：下位20% 法量：長(7.6)，底部径(8.8) 色調：浅黄褐色 胎土：砂(白少，透多) 焼成：良好 技法等：内外面とも上位ナデ，下位ヨコナデ。器面が凸凹している。使用痕：外面にカマド材の付着が見られる。備考：－

16 台帳：P7 材質：土師器 器種：高杯 残存：脚柱部100% 法量：器高(7.3) 色調：橙色 胎土：砂(白多，透多，黒少) 焼成：良好 技法等：外面ヘラナデ。内面ナデ。使用痕：－ 備考：遺構には伴わない。

17 台帳：I1 材質：鉄 種類：不明 残存：－ 法量：長(5.9)，幅3.2，最大厚1.1，重量9.61g 備考：－

第2号住居跡

遺構 第1号住居跡と重複しており，新旧関係は第2号住居跡→第1号住居跡である。住居北東部分のみの調査であるため，主

軸方向および竪穴部の規模は不明である。遺構確認面付近が床面であったが土層断面からみて壁高は20cmほどとみられる。住居掘形は深さ25cmほど浅く掘りくぼめた程度の掘り込みが認められている。試掘及び本調査の出土遺物からみて10世紀前半頃の住居跡と推定される。

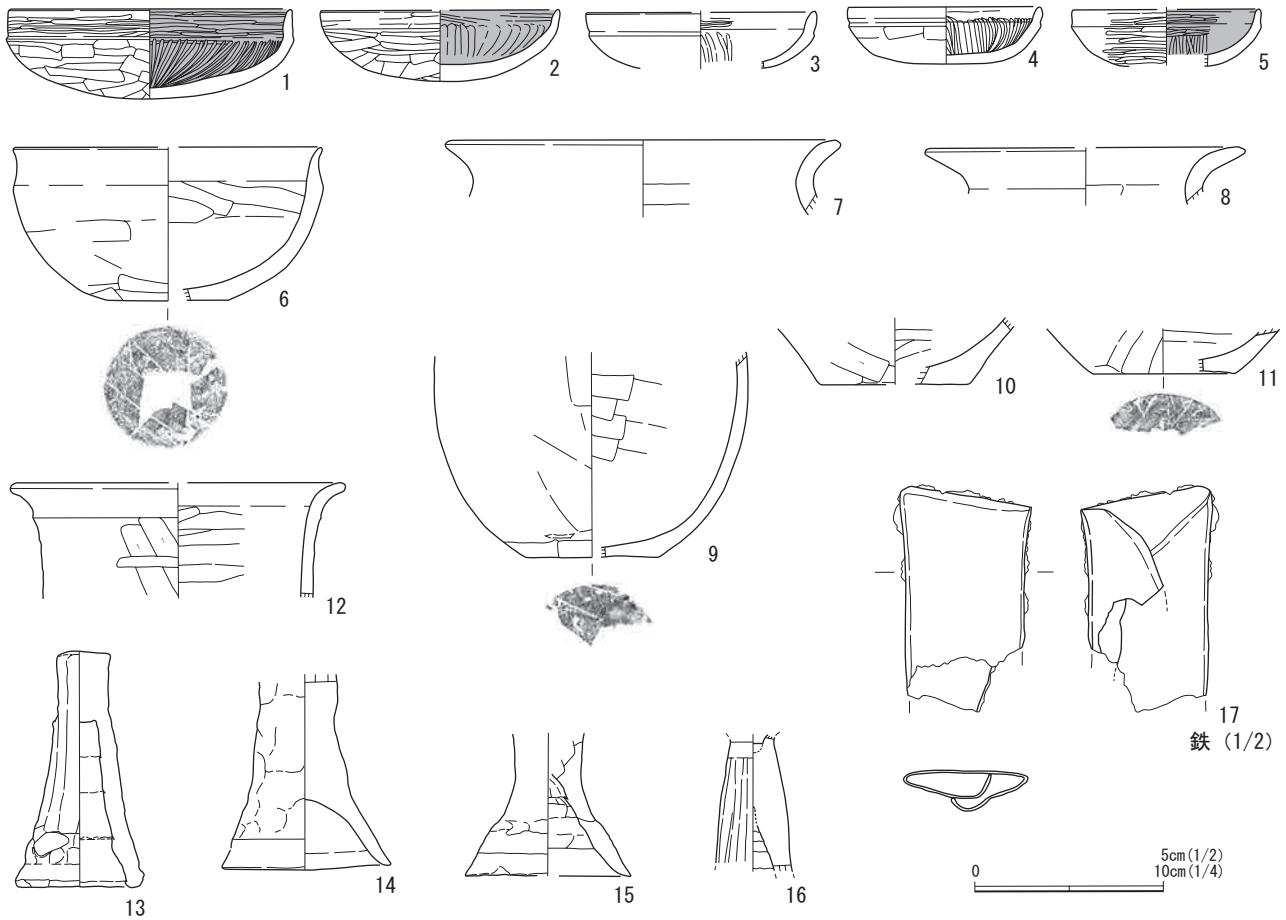
遺物説明

第55図

1 出土位置：2住覆土 材質：土師器 器種：杯 残存：底部40%，体部15% 法量：口径(12.9)，器高4.3，底径(5.6) 色調：外面褐色，内面黒色 胎土：細砂 技法等：外面体部下端・底部手持ちヘラ削り。内面ヘラミガキ(底部1方向)・黒色処理。体部外面に不明瞭な墨書あり。

2 出土位置：2住床下 材質：土師器 器種：椀？ 残存：口縁部20% 法量：口径(12.6) 色調：外面褐色，内面黒色 胎土：細砂，骨針微量 技法等：内面ヘラミガキ(口縁部横方向，底部不定方向)・黒色処理

3 出土位置：2住床下 材質：土師器 器種：甕 残存：底部80%，胴部下端20% 法量：底径9.0 色調：外面…胴部褐色，底部明褐色，内面…明褐色 胎土：礫(明灰少，明褐少)，砂(白透多，透，白少) 技



第54図 西中島遺跡第5次調査区第1号住居跡出土遺物

法等：外面胴部及び底部へラ削り。底部外面環状にくぼむ。内面ナデ。

(4) 調査区からの出土遺物

調査区より縄文・弥生土器片（第57図）および須恵器円面硯（第56図）が出土している。

遺物説明

第56図

1 出土位置：1住覆土 注記：2区覆土 材質：須恵器 器種：円面硯
残存：硯面部 法量：— 色調：灰色，内面緑色自然釉 胎土：礫（白，灰少） 技法等：硯面部研磨される。内面に厚く緑色自然釉がかかる。焼成硬質。備考：木葉下窯産か

第57図

1 出土位置・注記：1住3区フク土 時代時期：縄文時代後期（堀之内1式） 器種：深鉢形土器 法量：最大径137mm（残存率16%） 文様：無節縄文（L），隆帯（隆帯上刻み），沈線文（沈線間刻み），刺突文

2 出土位置・注記：1住1区フク土，1住2区フク土 時代時期：縄文時代後期（加曾利B1式） 器種：深鉢形土器 法量：最大径152mm（残存率15%） 文様：単節縄文（LR），沈線文，刺突文 備考：大洗町大貫

落神北貝塚の土器（第58図）を参考とする 文献：藤本弥城1980『那珂川下流の石器時代研究Ⅱ』（私家版）

3 出土位置・注記：1住3区フク土 時代時期：縄文時代後期（堀之内1式） 器種：深鉢形土器 法量：底径90mm（残存率14%） 文様：単節縄文（RL），沈線文

4 出土位置・注記：1住3区フク土 時代時期：縄文時代後期 法量：底径116mm（残存率9%）

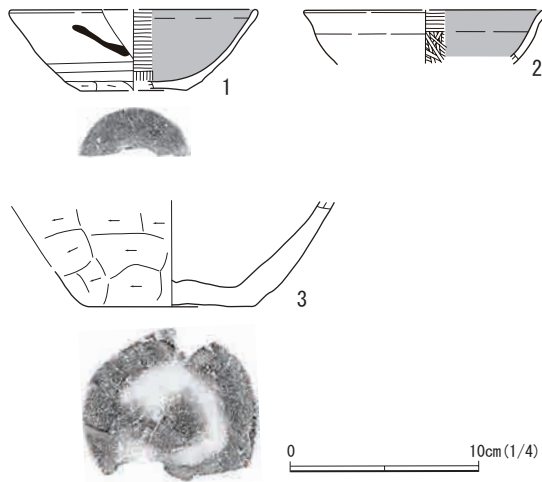
5 出土位置・注記：1住2区フク土 時代時期：縄文時代後期 法量：底径76mm（残存率14%）

6 出土位置・注記：1住2区フク土 時代時期：縄文時代後期 法量：底径58mm（残存率14%） 文様：底面網代痕

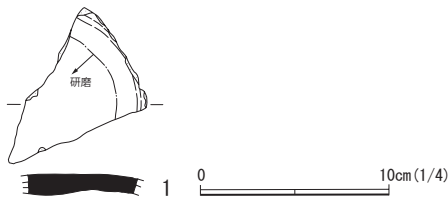
7 出土位置・注記：1住1区掘形 時代時期：縄文時代中期（加曾利E2-3式） 器種：深鉢形土器 文様：隆帯文，単節縄文（RL） 備考：胎土に金雲母を多量に含む

8 出土位置・注記：1住3区フク土 時代時期：縄文時代中期（加曾利E3式） 器種：深鉢形土器 文様：沈線文，単節縄文（RLか） 備考：胎土に金雲母を含む

9 出土位置・注記：1住2区フク土，1住3区フク土 時代時期：縄



第55図 西中島遺跡第5次調査区第2号住居跡出土遺物



第56図 西中島遺跡第5次調査区第1号住居跡覆土出土円面破

文時代後期(堀之内1式) 器種:深鉢形土器 文様:隆帯(M字状), 刺突文(盲孔状)

10 出土位置・注記:1住1区掘形 時代時期:縄文時代後期(堀之内1式) 器種:深鉢形土器 文様:隆帯(M字状), 刺突文(円形竹管)

11 出土位置・注記:1住カマド内 時代時期:縄文時代後期(堀之内1式) 器種:深鉢形土器 文様:隆帯(隆帯上刺突)

12 出土位置・注記:1住3区フク土 時代時期:縄文時代後期(堀之内1式) 器種:深鉢形土器 文様:単節縄文(LRか), 隆帯文(隆帯上斜め刺突), 沈線文

13 出土位置・注記:1住3区フク土 時代時期:縄文時代後期(堀之内1式) 器種:深鉢形土器 文様:隆帯, 無節縄文(L)

14 出土位置・注記:1住4区フク土 時代時期:縄文時代後期(堀之内1式) 器種:深鉢形土器 文様:単節縄文(LR), 沈線文

15 出土位置・注記:1住2区フク土 時代時期:縄文時代後期(堀之内1式) 器種:深鉢形土器 文様:単節縄文(LR), 沈線文

16 出土位置・注記:1住4区フク土 時代時期:縄文時代後期(堀之内1式) 器種:深鉢形土器 文様:単節縄文(LR), 沈線文

17 出土位置・注記:表土 時代時期:縄文時代後期(堀之内1式) 器種:深鉢形土器 文様:単節縄文(LR), 沈線文

18 出土位置・注記:1住3区フク土 時代時期:縄文時代後期(堀之内1式) 器種:深鉢形土器 文様:単節縄文(LR), 沈線文

19 出土位置・注記:表土 時代時期:縄文時代後期 器種:深鉢形土

器 文様:口縁部突起(突起上窪む), 無節縄文(R)

20 出土位置・注記:1住1区フク土 時代時期:縄文時代後期 器種:深鉢形土器 文様:単節縄文(LR)

21 出土位置・注記:1住2区フク土 時代時期:縄文時代後期 器種:深鉢形土器 文様:単節縄文(RL)

22 出土位置・注記:1住1区フク土 時代時期:縄文時代後期 器種:深鉢形土器 文様:単節縄文(LR)

23 出土位置・注記:1住3区掘形 時代時期:縄文時代後期 器種:深鉢形土器 文様:単節縄文(LR)

24 出土位置・注記:1住2区フク土 時代時期:縄文時代後期 器種:深鉢形土器 文様:単節縄文(RLか)

25 出土位置・注記:1住3区フク土 時代時期:縄文時代後期 器種:深鉢形土器 文様:単節縄文(LR)

26 出土位置・注記:1住3区フク土 時代時期:縄文時代後期 器種:深鉢形土器 文様:単節縄文(LR), 条線文

27 出土位置・注記:1住フク土 時代時期:縄文時代後期 器種:深鉢形土器 文様:条線文

28 出土位置・注記:1住3区フク土 時代時期:縄文時代後期 器種:深鉢形土器 文様:条線文

29 出土位置・注記:1住2区フク土 時代時期:縄文時代後期 器種:深鉢形土器 文様:条線文

30 出土位置・注記:1住2区掘形 時代時期:縄文時代後期 器種:深鉢形土器 文様:条線文

31 出土位置・注記:1住2区フク土 時代時期:縄文時代後期 器種:深鉢形土器 文様:条線文

32 出土位置・注記:1住2区フク土 時代時期:縄文時代後期 器種:深鉢形土器 文様:条線文

33 出土位置・注記:1住1区フク土 時代時期:縄文時代後期 器種:深鉢形土器 文様:条線文

34 出土位置・注記:1住床直 時代時期:縄文時代後期 器種:深鉢形土器 文様:条線文

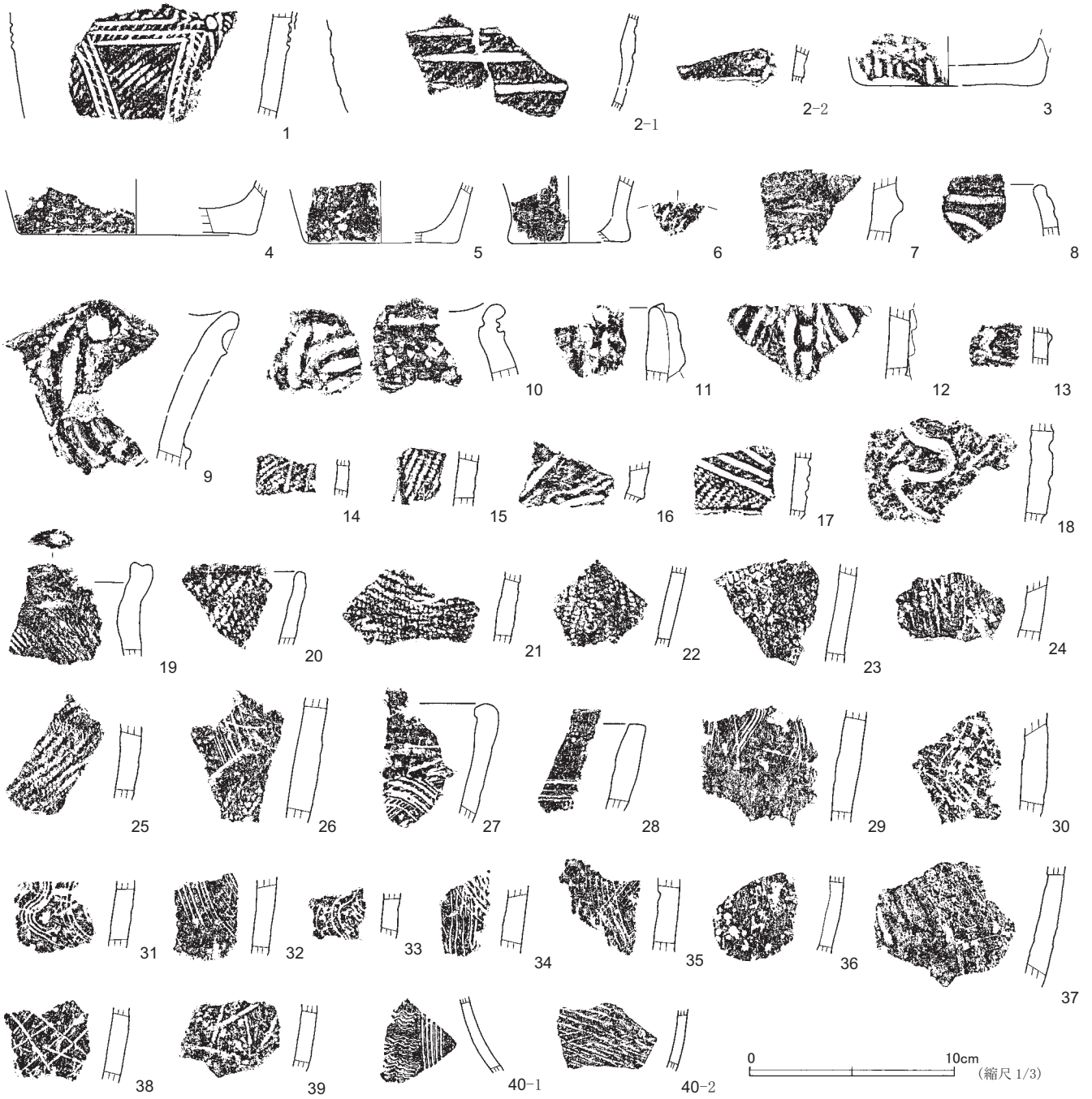
35 出土位置・注記:1住3区フク土 時代時期:縄文時代後期 器種:深鉢形土器 文様:条線文

36 出土位置・注記:1住2区フク土 時代時期:縄文時代後期 器種:深鉢形土器 文様:条線文?

37 出土位置・注記:1住2区フク土 時代時期:縄文時代後期か 器種:深鉢形土器

38 出土位置・注記:1住3区フク土 時代時期:縄文時代後期 器種:深鉢形土器 文様:沈線文(格子状)

39 出土位置・注記:1住4区フク土 時代時期:縄文時代後期 器種:

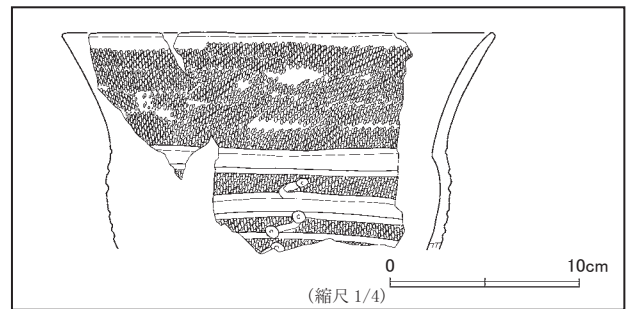


第 57 図 西中島遺跡第 5 次調査区出土縄文・弥生土器

深鉢形土器 文様：沈線文（格子状）

40 出土位置・注記：表土，1 住 4 区フク土 時代時期：弥生時代後期

器種：壺形土器（中・小型） 文様：櫛描文（5 本櫛歯），付加条縄文（L-Z，R-S，上→下） 備考：胎土に金雲母を含む 器外面炭化物付着

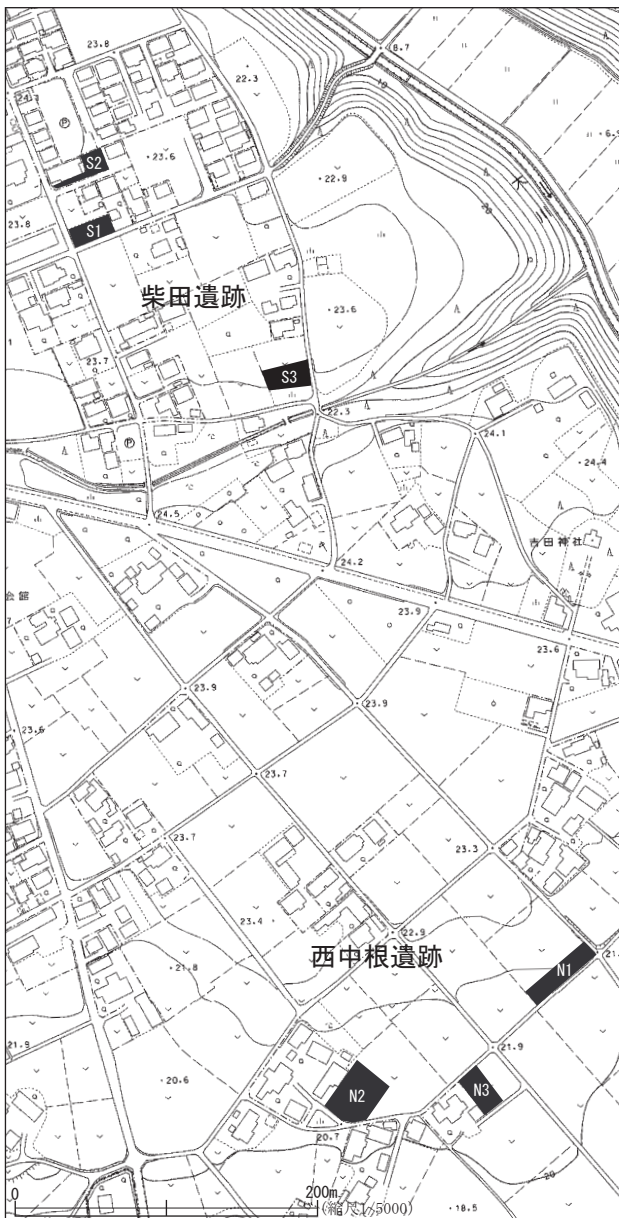


第 58 図 加曾利 B 式の参考資料（大貫落神北貝塚）

IV 柴田遺跡における縄文時代中期「加曽利E式」の集落跡について

1 はじめに

ひたちなか市域は、縄文時代の集落跡の全体が対象となるような大規模な発掘調査を経験していない。縄文時代中期「加曽利E式」の遺跡では、三反田蜆塚貝塚と君ヶ台遺跡が古くから知られていた。1960年代までは学術調査、1960年代からは開発に伴う小規模な発掘調査が、他の遺跡にも繰り返されてきた。本稿では、個人住宅建



第59図 柴田遺跡と西中根遺跡の調査区

設に対応する部分的な発掘調査が3次を数えた柴田遺跡について、「加曽利E式」の集落跡としての知見を概括し、周辺に位置する遺跡との比較を進めておきたい。

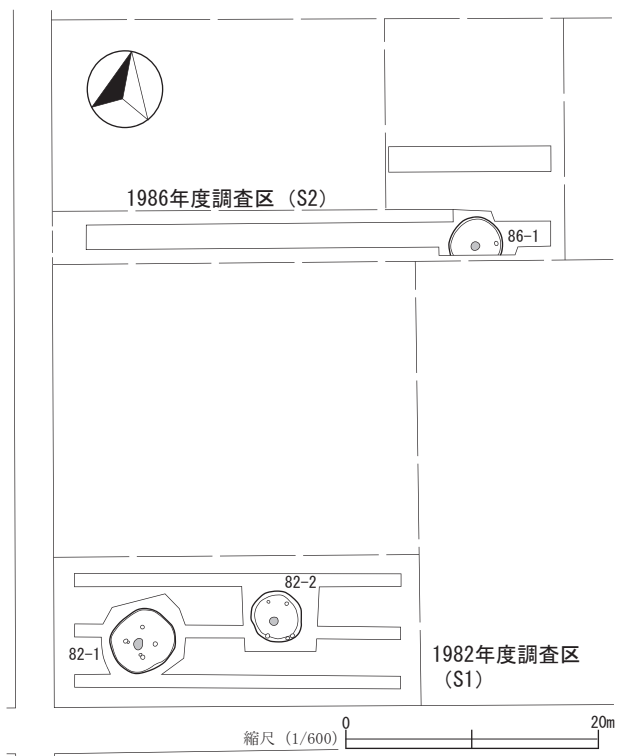
2 集落跡としての柴田遺跡

柴田遺跡は、中丸川支流の大川を望む台地上に形成された遺跡であり、1981年の分布調査で発見された。「遺物の散布はきわめて少なくまばらに縄文時代中期の土器片がみられたにすぎない」[住谷他1983]という状況が記録されている。

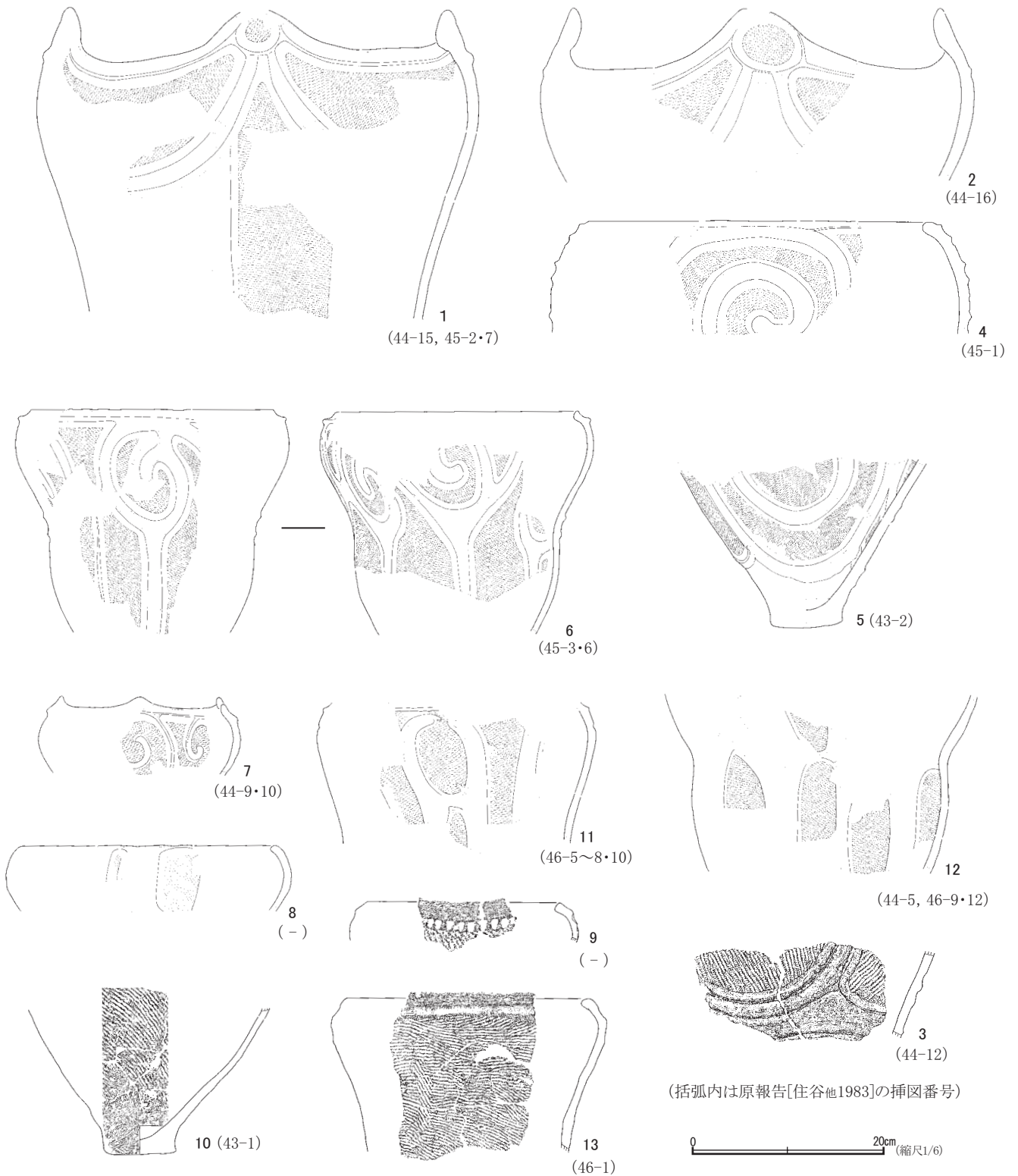
第1次調査は、1982年度に実施された(第59図S1)。調査の結果、住居跡が2基検出されている。2基の住居跡は、6mほどの距離にある(第60図)。

82-第1号住居址は、平面が4.8m×5.25mの楕円形を呈する。残存する壁高は28cmほど。炉址は地床炉である。ピットが6基検出され、4本主柱の構造で建て替えられたことが推定されている。出土した土器(第61図1~11)は、炉址内(2)、床面(3~5.6の一部、10)、覆土(1.6の一部、7~9,11)に分けて報告された。

82-第2号住居址は、平面が3.95m×4.3mの楕円形を呈する。残存する壁高は40cmほどで、壁周溝が全周する。炉址は地床炉。ピットが6基検出され、2本主柱の構造が推定されている。土器(第61図11~13)は、



第60図 柴田遺跡第1・2次調査の遺構



第61図 柴田遺跡第1次調査出土土器 (1～10:1住, 11:1住及び2住, 12・13:2住)

全て覆土から出土した。

第2次調査は、1986年度に実施された(第59図S2)。調査の結果、住居跡が1基検出されている。第1次調査で検出された82-第2号住居址とは、30mほどの距離がある(第60図)。

86-第1号住居址は、平面が直径4.35mほどの円形

と推定される。壁高は28cmほど。炉址は地床炉である。ピットが1基検出されたが、支柱の構造は明らかでない。「覆土などから縄文式土器片が20片ほどみられたにすぎない」[住谷他1987]という。

第1次及び第2次調査は、対象地が近接し、検出された3基は、いずれも「加曾利E3式」の時期の住居跡で

あった。住居跡は、重複せずに形成されているが、82-第1号の覆土中には、多量の土器片が廃棄されており、82-第1号と第2号の覆土に同一個体の土器の廃棄が認められることから、形成された住居跡の全てが同時に集落を構成したのではなく、集落跡は時間的に分解されると考えられる。

2013年度に実施した第3次調査は、第1・2次調査より南東方向に150mほど離れた地点が対象であり、住居跡と推定される遺構を確認したが、その時期は「加曾利E4式」に位置付けられるものであった。この調査区には、「加曾利E3式」の分布は見られない。つまり、柴田遺跡における縄文時代中期「加曾利E式」の集落跡は、「加曾利E3式」と「4式」とで、地点を変えて形成されていることが明らかになった。

「加曾利E3式」と「4式」の集落跡が形成された、その空間の総和が柴田遺跡という範囲で括られている。この範囲には、現在まで、貝塚は確認されていない。「加曾利E4式」の第3次調査区には、土器片錘が見られた。

3 柴田遺跡第1次調査区の土器群

柴田遺跡の第1次調査で出土した遺物を観察し、一部を新たに実測して再報告する。

第61図1～5・10は大型、6・8・11～13は中型、7・9は小型の深鉢形土器である。文様の属性により、大きく4つに分類して解説する。

1類(第61図1～3) 口縁部と胴部とに区分される文様構成の土器であり、2・3類とは、文様構成が大きく異なる。1・2は波状口縁、2の波頂部は4つと推定された。頸部は括れが小さい。区画文は隆帯であり、上縁は1条、胴部との境界は2条を単位とする。隆帯は両側が窪むように調整され、2条の隆帯は断面が扁平なM字状を呈する。口縁部文様は、波状口縁の波頂部に円形、波頂部間に三日月形に区画された縄文を配置する。太い沈線による渦状文は見られない。胴部文様は、沈線で区画された幅の広い縄文帯と無文帯を交互に配置する。3は、口縁部と胴部の間に無文部を設けて、胴部文様の上端を水平にしている。

2類(第61図4～7) 隆帯で体部に文様を構成する土器である。隆帯には1条と2条の単位があり、1類と特徴を同じくする。文様の形象は渦状文を基本としてお

り、小川和博は、この類を「隆起帯入組渦巻文土器」[小川1991]と呼んでいる。口縁には、緩やかな波状と平縁があり、頸部は括れが大きい。渦状文は、括れより上位に配置されるが、5のように下位にも渦状文を配置するもの、6のように懸垂文へと接続するもの等がある。

3類(第61図8・11・12) 沈線区画された縄文帯で体部に文様を構成する土器である。口縁には平縁があり、頸部は括れの大きなものと小さなものがある。括れより上位には楕円形、下位には逆U字状の区画文が配置されている。11の区画文の形象には、「加曾利E4式」への連絡が窺える。

4類(第61図9・10・13) 縄文のみが体部に施文された土器である。口縁には平縁があり、頸部には括れの小さなものがある。9・13は、隆帯で区画された口縁部に無文帯が形成されており、9の隆帯下には刺突文が施されている。10の底部は、2類の5とともに、突出したような形状に成形され、全体の法量に対して底径が小さい。

82-第1号住居址においては、床面から1・2・4類が、覆土から1～4類が出土した。覆土の1類1は、図示した以外にも同一個体の破片が比較的多量に出土している。調査された覆土の堆積は28cmほどであり、本稿では、1～4類の土器群を同一時期のものとして捉えて、比較のための定点としたい。特に、2条を単位とした隆帯の2類が、この時期の表徴となろう。86-第1号住居址の覆土にも、2類の破片が含まれている。

4 柴田遺跡と西中根遺跡

西中根遺跡は、柴田遺跡と同じ台地上にあり、県道水戸馬渡線より南側の広い範囲が相当する。1930年代から知られていた遺跡であり、「時期は縄文中期(阿玉台^{註1}～加曾利E)から後期(堀之内I式)にかけて形成されたものであり、遺跡の規模、保存状態から言って現在では勝田市内で最大規模の遺跡」[川崎他1975]と記録されたが、その内容は、ほとんど報告されてこなかった。1992年度から現在まで3次の調査が実施されている。第2次[鴨志田1993]及び第3次[佐々木編2012]の調査区からは、遺物は出土しても、縄文時代の遺構は検出されていない(第59図N2・N3)。

1992年度に実施された第1次調査では、縄文時代と



上部検出状況



下部検出状況

第 62 図 西中根遺跡第 1 次調査出土土器

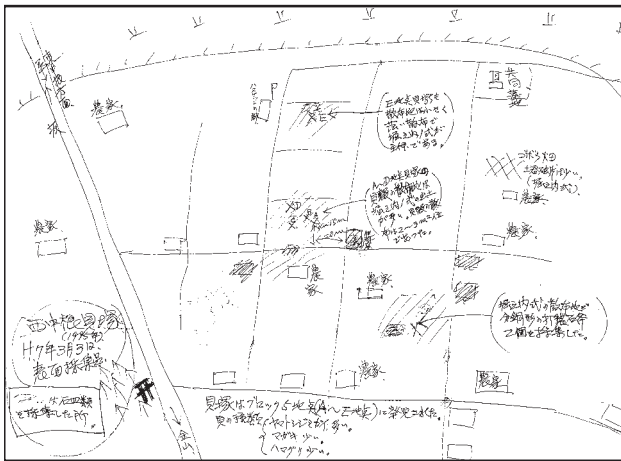
確実に考えられる遺構が 2 基検出されている。1 基は、「第Ⅲ区第 1 遺構」として報告された粘土採掘坑である。湧水等を理由に、調査は下底面に及ぶことなく終了されており、掘削の時期は明確でない。埋没の時期についても、報告書に記載がないので、遺構に伴う土器の特定など、今後に再検討が必要である。もう 1 基は、「第Ⅲ区 P 2」として図示された土坑であり、覆土の上部から「縄文式土器が直立した状態で出土した」という。この土器は、器内面側からの加撃により底部が穿孔されており、出土状況からも土器棺と考えられるものである。つまり、この調査区には、住居跡は検出されず、粘土採掘坑という、おそらくは土器の原料を採掘したと推定される痕跡と、土器棺墓という埋葬の施設が形成されていた。土器棺について、これを新たに実測して再報告する。

土器棺（第 62 図 1）は、口縁部を全く欠き、体部も上部の大半を欠損する。これは、正位の状態にあって、上位を耕作により攪乱されたことによるであろう。大型で、頸部の括れが大きい形態である。体部には、2 条を単位とした隆帯で渦状文が構成されており、柴田遺跡における「加曾利 E 3 式」の 2 類に相当する。括れより下位にも渦状文が配置され、底部付近は懸垂文に接続している。炭化物の付着と変色から、煮沸具として使用されていたことが推定され、それが土器棺に転用された。器外面の変色等の状態は 4 層に分かれ、底部から 9.5cm までの底

部付近は暗褐色、23cm までの下部は淡褐色を基調として赤化、括れの周辺に相当する 46cm までは煤状の炭化物が付着、それより上部は淡褐～褐色を呈している。底部付近に赤化が認められないのは、底径が小さく不安定な底部を埋め込むように固定したことが想定された。柴田遺跡の 3 基の住居跡に見られた地床炉の窪みは、このような土器を固定するためにも利用されていたのであろう。

第 1 次調査では、「加曾利 E 4 式」も出土しており、この周囲に「加曾利 E 3 式」と「4 式」の集落跡が形成されていたことは、ほぼ確実に推定される。しかも、「加曾利 E 3 式」については、柴田遺跡と同時期に形成された集落が含まれていることになる。隣接した遺跡に同時期の集落が推定されたわけではあるが、柴田遺跡の状況からは、これを大規模な 1 つの集落跡と捉えることはできそうにない。

西中根遺跡には、台地上に地点貝塚の存在が報告されているが〔川崎他 1975, 住谷 1982, 藤本・鈴木 1994〕、その形成時期は、藤本武による踏査では、重複する縄文時代後期「堀之内 1 式」であるらしい（第 63 図）。「加曾利 E 式」の時期には、少なくとも規模の大きな貝塚の形成は見られない。第 1 次調査では、礫石錘と土器片錘が出土している。土器片錘は、後期の土器を利用したものであった。



第 63 図 藤本武による西中根貝塚のメモ (左下方向が概略の北)

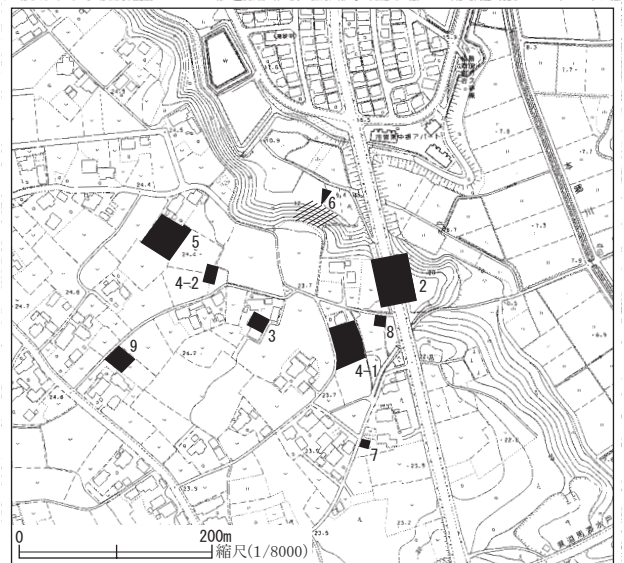
5 柴田遺跡と君ヶ台貝塚

君ヶ台貝塚は、中丸川支流の本郷川を望む台地上に形成された遺跡である。柴田・西中根遺跡との距離は 1km 余であるが、台地は大川で隔てられている。1951 年に、甲野勇を招いた勝田町郷土史編纂委員会が学術調査を実施しており、これが第 1 次調査に相当する。遺構配置図のみが公表されており [伊東・川崎 1966]、調査地点は明らかでない。小竪穴遺構と溝状遺構が検出されたらしいが、出土遺物も報告されないままになった。第 2 次調査は、道路建設に伴う発掘調査であり、住居跡 2 基の他に小竪穴遺構、土坑が検出されている。2 基の住居跡は、3 号住居跡が「加曾利 E 3 式」、4 号住居跡が「加曾利 E 4 式」であった。第 3～7・9 次調査は、市内遺跡の調査である。1994 年度の第 3 次調査 [鴨志田他 1995] では 2 基の住居跡など、2001 年度の第 5 次調査 [鴨志田他 2002] でも 2 基の住居跡などが検出されたが、その時期について報告書に記載がなく、遺構に伴う土器の特定など、今後には再検討が必要である。2003 年度の第 6 次調査 [鴨志田 2004] は、未周知であった斜面部から、建設工事に伴い貝層が露出したため、その記録を目的に実施された。2006 年度の第 8 次調査は、鉄塔建設に伴う発掘調査であり、1 基の住居跡が検出された。時期は「加曾利 E 2 式」。この調査も未だ報告されないままである。第 4・7・9 次調査では、縄文時代の遺構は検出されていない。(第 64 図 地点番号は調査回数に一致する)

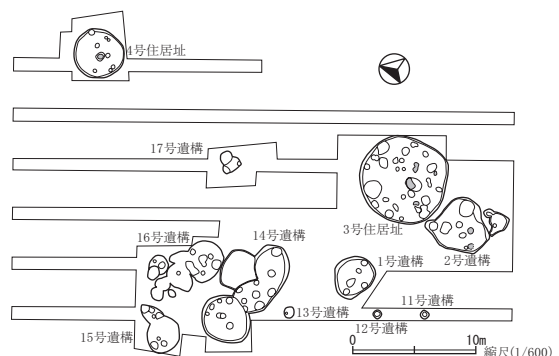
現在のところ、君ヶ台貝塚における既往の調査全てを再検討して総括するには至っていない。第 2 次調査の一部、4 号住居跡については既に再検討を報告してあるの

で [鈴木 2007]、本稿では、これに加えて同調査の 1 号遺構及び 3 号住居跡の遺物を観察し、一部を新たに実測して再報告する。

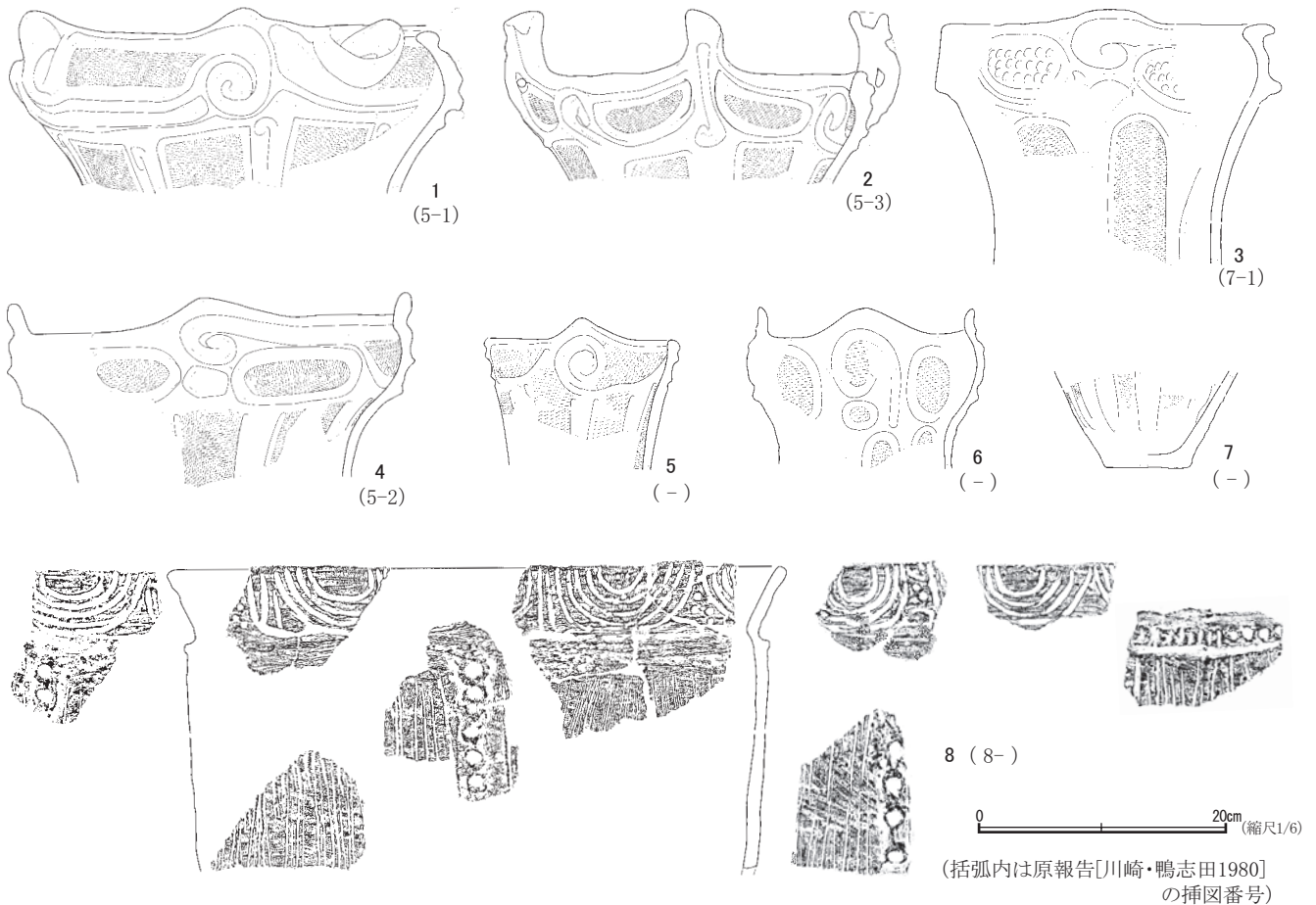
1 号遺構・3 号住居跡の土器群 1 号遺構は、平面が 3.6 m × 3.2 m の楕円形を呈し、床面に柱穴状のピットを有した小竪穴遺構である。炉址は検出されていない。遺物は、覆土中位の層中に集中し、床面から 30cm 以上も浮いて出土した。つまり、遺構が廃絶された後に、その埋没の途中で廃棄されたものと捉えられる。一方の 3 号住居跡は、平面が 7.1 m × 6.8 m の楕円形を呈した大型の住居跡である。炉址は地床炉。底部を欠く大型の深鉢形土器 (第 67 図 1) が床面に埋設されていた。1 号遺構と 3 号住居跡の距離は 3 m 余であり、1 号遺構の覆土へと遺物を廃棄した主体者が 3 号住居跡に想定できる位置関係にある (第 65 図)。3 号住居跡の覆土からは、「加曾利 E 4 式」(第 67 図 5～7) も出土しており、これは、4 号住居跡もしくは周囲の未調査区に廃棄の主体者を想定すべきことになる。



第 64 図 君ヶ台貝塚の調査区



第 65 図 君ヶ台貝塚第 2 次調査の遺構



第66図 君ヶ台貝塚第2次調査1号遺構出土土器

第66図8, 第67図1・4は大型, 第66図1～4・7, 第67図2・3は中型, 第66図5・6は小型の深鉢形土器である。文様の属性により, 大きく5つに分類して解説する。

1類(第66図1～5・7, 第67図1) 口縁部と胴部とに区分される文様構成の土器である。頸部の括れが小さいもの, 大きいもの, ほとんど括れないものがあり, これらの形態が大型, 中型, 小型の法量に, それぞれ対応している。口縁部文様は, 渦状文と区画文で構成され, 中型で括れの大きい形態には, 突起や橋状の把手を造形するなど口縁部に立体的な装飾が加えられている。波状口縁の波頂部下には, 渦状文を配置する構成が典型である。区画文内は, 縄文の施文を典型とするが, 刺突文の充填も見られる。胴部文様は, 沈線で区画された縄文帯と無文帯を交互に配置する。縄文帯の上部にも沈線が施文されて, 逆U字状の区画文となるもの, 無文帯に蕨手状の懸垂文が加えられたものもある。

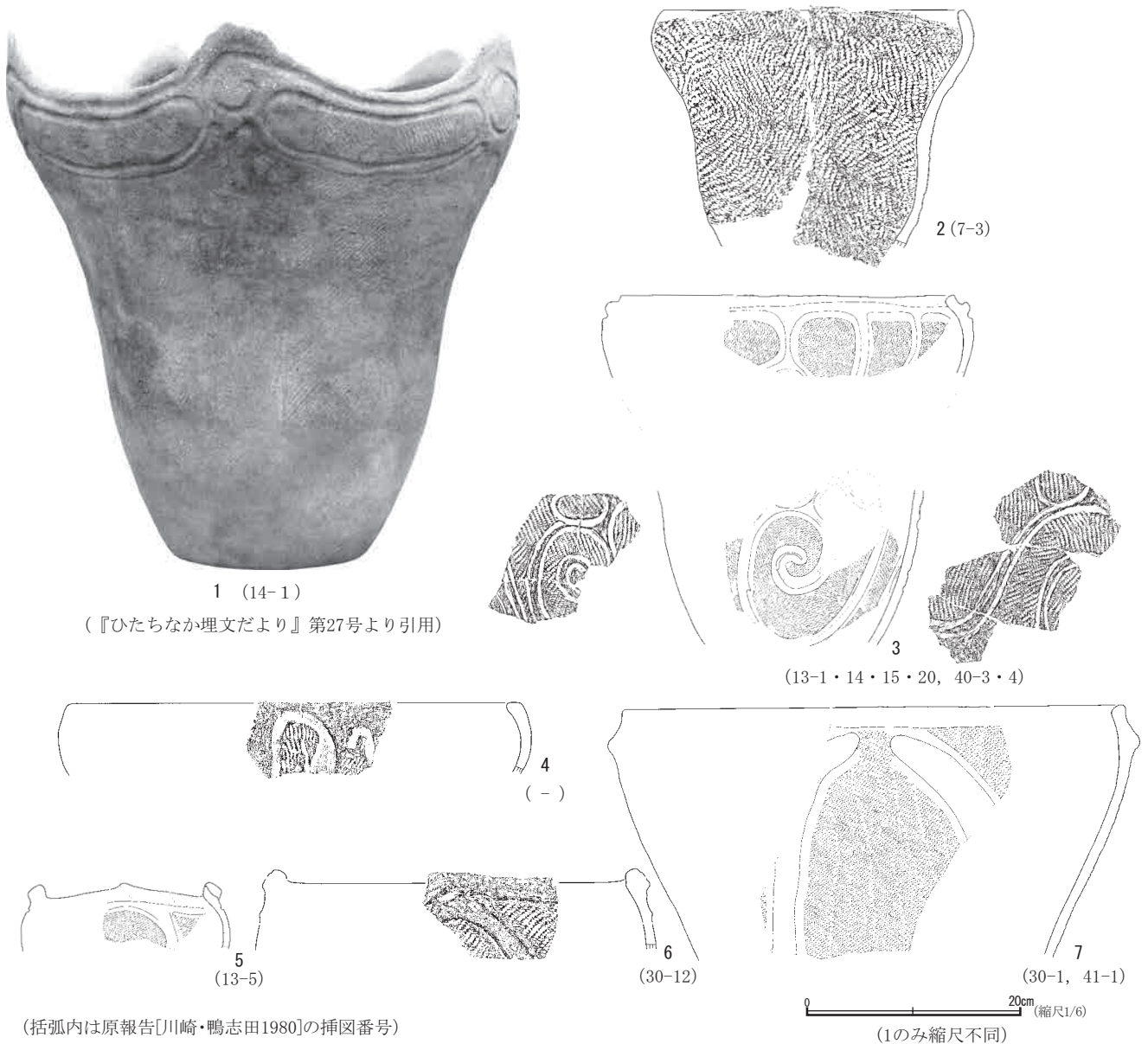
2類(第67図3) 隆帯で体部に文様を構成する土器であり, 隆帯は1条であるらしい。3は, 口縁が平縁で

あり, 頸部の括れは大きいと推定される。括れより下位は, 隆帯でなく, 隆帯に相当する幅を沈線区画した無文帯により渦状文が構成されている。

3類(第66図6, 第67図4) 沈線区画された縄文帯で体部に文様を構成する土器である。口縁には波状と平縁があり, 頸部の括れは大きいと推定される。6の括れより上位には楕円形, 下位には逆U字状の区画文が配置されている。縄文を囲む縦位の渦状文には, 「大木9式」との連絡を窺うことができる。4には, 蕨手状の懸垂文が加えられている。

4類(第67図2) 縄文のみが体部に施文された土器である。2は, 口縁が平縁であり, 頸部の括れは大きい。縄文は口唇部直下から施文されており, 無文帯は形成されない。

5類(第66図8) 口縁部と胴部が隆帯で区画され, 外反する口縁部には重弧文, 直線的な胴部には条線文が施されている。この形態と文様が1～4類とは明確に異なる。「曾利式」の所謂「籠目文土器」と連絡した変遷が推定される土器である。

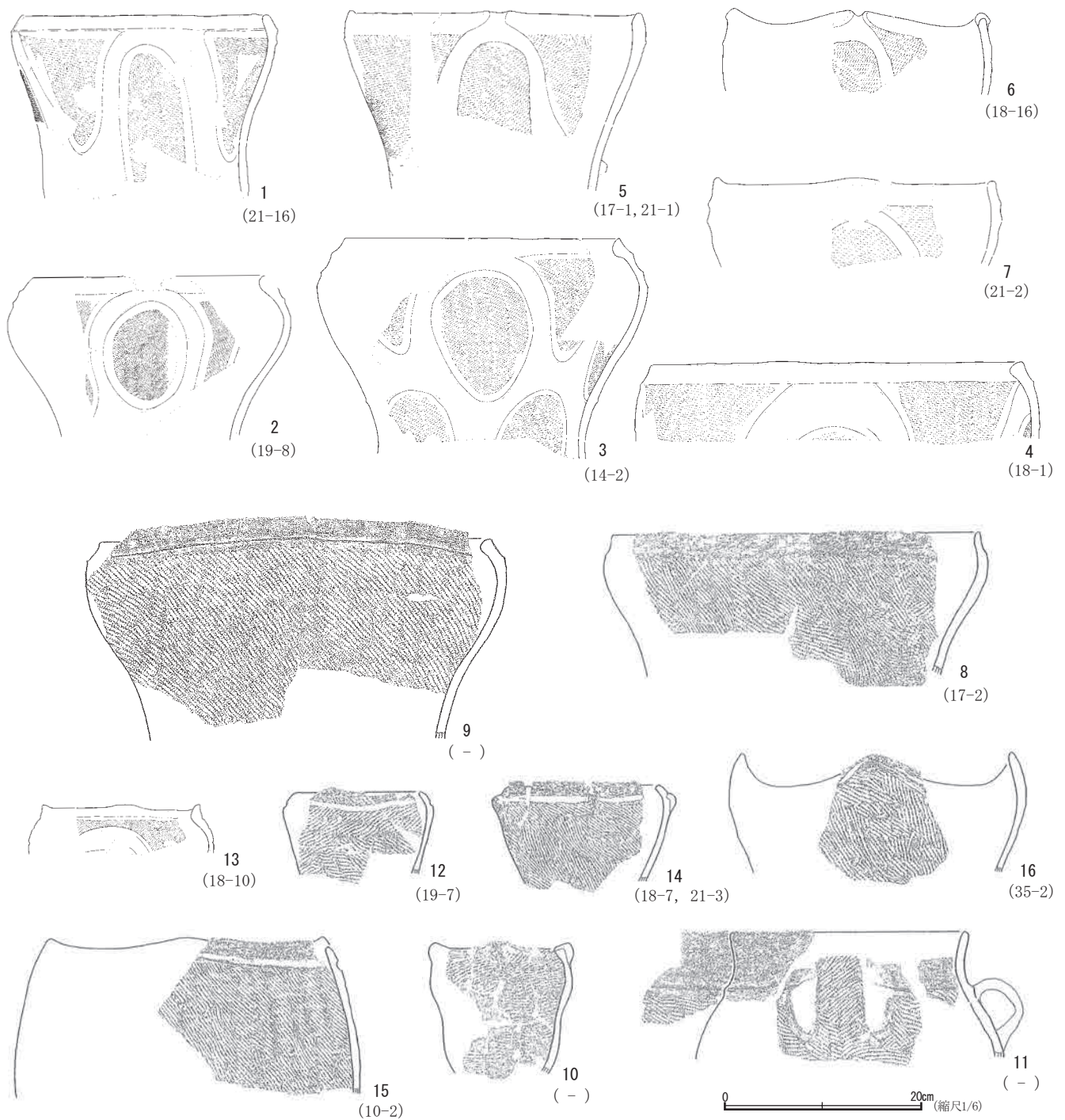


第67図 君ヶ台貝塚第2次調査3号住居址出土土器

君ヶ台貝塚と柴田遺跡の「加曾利E3式」を比較してみると、まず、1～3類のうち、君ヶ台貝塚では1類を主体とするのに対して、柴田遺跡では、2・3類が主体となっている。1類の口縁部文様は、君ヶ台貝塚は渦状文と区画文が組合う構成であるのに対して、柴田遺跡は区画文のみで構成されている。つまり、太い沈線で描出された渦状文が姿を消す。また、立体的な装飾や区画内を充填する刺突文も、柴田遺跡には見られない。大型どうしを比較してみると、君ヶ台貝塚3号住居址(第67図1)の波頂部下の渦状文が、柴田遺跡82-第1号住居址(第61図1・2)の円形区画文へと変遷したことがよく理解できる。軌を一にするように、胴部文様では、蕨手状の沈線文が姿を消している。2類の隆帯は、君ヶ台

貝塚が1条で、しかも下部は沈線区画の無文帯であるのに対して、柴田遺跡は2条単位を典型としている。3類については、文様形象を比較できるほど資料が充実していない。4類は、柴田遺跡が口縁部に無文帯を形成しており、これが柴田遺跡の1～4類に共通した特徴となっている。5類は、君ヶ台貝塚にのみ見られる。底部の形状の変化も含めて、これらの異なりから、君ヶ台貝塚の「加曾利E3式」を「古段階」、柴田遺跡の「加曾利E3式」を「新段階」と位置付けておきたい。

4号住居址・3号住居址の土器群 4号住居址は、平面が4.1m×3.9mの略円形を呈した住居跡である。炉址は、半環状に検出された粘土の存在から、土器埋設炉であった可能性が考えられる。住居跡の廃絶時期は、炉



第68図 君ヶ台貝塚第2次調査4号住居址出土土器

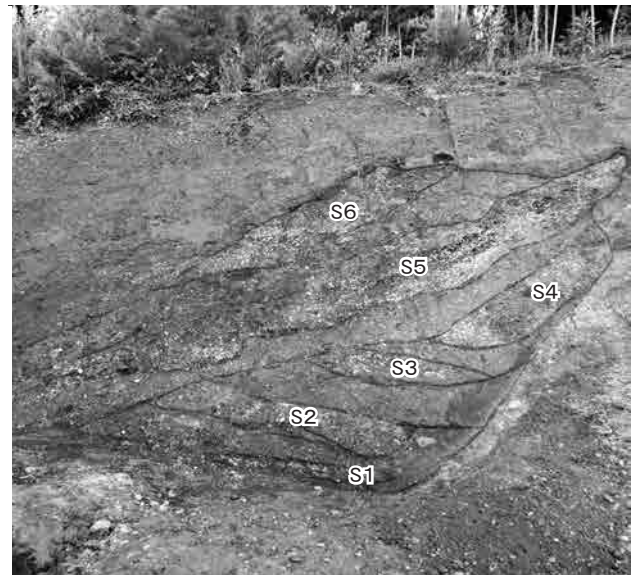
址内から出土した土器により、「加曾利E 4式」と捉えられた。覆土中に地点貝塚が形成されており、貝層の下端は、床面から20cmほど浮いている。この貝層を含む覆土「第2層」中から、土器が集中して出土した。

4号住居址から出土した土器には、「加曾利E 3式」の破片(第68図16)も混在するが、「加曾利E 4式」の土器群がまとまる。那珂川下流域における「加曾利E 4式」については、水戸市砂川遺跡[渡辺1982]の第33号住居跡の土器群を「古段階」、水戸市十万原遺跡[皆

川2001]の第550B号土坑の土器群を「新段階」とした基準を提示してある[鈴木2007]。「古段階」においては、頸部の括れが小さく、胴上部の略三角形と胴下部に及ぶ長楕円形もしくは逆U字形を交互に配置する文様構成の土器(第68図1・4, 第67図6・7)を「君ヶ台類型」、頸部の括れが大きく、胴上部に略三角形と楕円形を交互に配置する土器(第68図2・3)を「砂川類型」と呼んで、細別の表徴とした。「新段階」については、口縁部の無文部が途切れて、胴部の文様が口唇部へと突き抜

ける形象(第68図5~7)を「岩坪類型」と呼んでいる。「古段階」の「君ヶ台類型」は、「加曾利E3式新段階」の柴田遺跡1類からの変遷が推定される。これは、「岩坪類型」へと変遷を遂げる系列である。また、「砂川類型」には、柴田遺跡2類からの変遷が推定されよう。渦状文から楕円形の区画文への変化には、施文工程を省略する「潜在文様の現出」[鈴木1998]を想定しておきたい。これらの類型は、隆帯から変化した隆起線で文様が描出されるが、沈線により文様が描出された土器(第68図13,第67図5)も、これに伴う。縄文のみが体部に施文された土器には、口縁部の無文帯が隆起線で区画されるもの(第68図8・9)と、沈線で区画されるもの(第68図12・14・15)が見られる。

第2次調査では、君ヶ台貝塚における小規模な地点貝塚の形成が確認され、それは「加曾利E3式古段階」と「4式古段階」の時期に相当していた。全てヤマトシジミを主体とした貝層の堆積である。調査区内からは、土器片錘と礫石錘が多量に出土し、3号及び4号住居址の覆土からもそれぞれが検出されている。また、4号住居址内の貝層中からは、ハマグリ^{註3}の貝殻を素材とした貝刃が2点出土し、僅かながら魚骨片も含まれていた。その後2003年に、斜面貝塚が発見されて、第6次調査が実施されることになる。谷部を埋めるように堆積した貝層が、東西の幅約6m、高さ約4.5mで露出していた。貝層は、さらに削平面の下へも連続している。露出面の観察では、貝層1(第69図S1)から貝層3(S3)までがほぼ水平に堆積した後、地崩れであろうか、これらの堆積の東側(左側)が消失し、貝層4(S4)から貝層6(S6)までが急傾斜に堆積した。それぞれの貝層の間には、混貝土層が堆積している。全てヤマトシジミを主体とした貝層であり、他に23種の貝類、ウニ類、フジツボ類が報告された。現地では、魚骨、獣骨が含まれていることも確認している。出土位置を記録して採取された土器の報告からは、貝層1~3の貝層群が「加曾利E2式」、貝層4~6の貝層群が「加曾利E3式古段階」に形成されたものと推定される。「加曾利E2式」には、第7次調査が検出した住居跡、「加曾利E3式古段階」には第2次調査の3号住居址が対応し、規模の大きな貝塚が、集落に伴い形成されたことを確認できる。



第69図 君ヶ台貝塚第6次調査の貝層

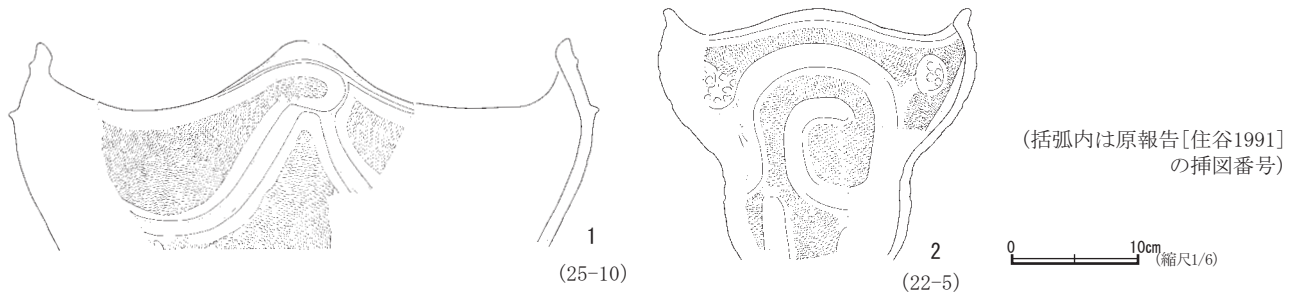
6 中丸川流域における遺跡群の検討に向けて

柴田遺跡を起点とした比較は、今後、三反田蜆塚貝塚、上の内貝塚をも対象として、中丸川流域における縄文時代中期後葉の遺跡群の形成へと検討を進めることになる。本稿では、君ヶ台貝塚の「加曾利E3式古段階」、柴田・西中根遺跡の「加曾利E3式新段階」、君ヶ台貝塚の「加曾利E4式古段階」という序列を確認し、大規模な貝層の形成は、「加曾利E2式」から「3式古段階」までの期間に限定されることを捉えた。土器群の序列が、遺跡間を行き来したように、柴田・西中根遺跡と君ヶ台貝塚は、集落跡としても補完の関係にあったのかもしれない。

三反田蜆塚貝塚の調査のうち、1990年度の第9次調査[住谷1991]で出土した土器については、本稿に掲載しておくことにしよう。90-第1号住居跡の覆土から出土した「加曾利E3式」である。第70図1・2の土器は、「古段階」と「新段階」の属性を具有しており、両段階の中間に位置付けられる。遺跡群の形成が、集落の軌跡として解読される可能性を、ここにも見るのである。

註1 「1935年頃から藤本弥城と筆者(引用註:藤本武)が調査を行ってきた所である」[藤本・鈴木1994]と記載されている。

註2 西中根遺跡として報告された資料に土偶の破片[鴨志田1972]があるが、これは縄文時代後期である。『勝田市史』[川崎他1979]に掲載された「中根遺跡出土石器」は、西中根遺跡の採集品かもしれないが、確認できていない。



第70図 三反田蜆塚貝塚第9次調査第1号住居跡出土土器

註3 「魚骨と獣骨は含まれていない」[川崎・鴨志田 1980]と報告されていたが、貝層サンプルを再検討した結果、魚骨を認めた。

参考文献

- 石井 篤 2007 『平成18年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会 (君ヶ台貝塚第7次調査)
- 伊東重敏・川崎純徳 1966 『津田・天神山遺跡調査報告』勝田市教育委員会
- 小川和博 1991 『平原B貝塚 一茨城県那珂郡東海村縄文貝塚の調査一』東海村教育委員会
- 鴨志田篤二 1972 「西中根遺跡」『縄文時代土偶・土版・岩偶・岩版・資料(その1)』常総台地研究会資料(1)常総台地研究会 17-18頁
- 鴨志田篤二 1993 『平成4年度市内遺跡発掘調査報告書』勝田市教育委員会 (西中根遺跡第1次調査)
- 鴨志田篤二他 1995 『平成6年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会 (君ヶ台貝塚第3次調査)
- 鴨志田篤二他 1999 『平成10年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会 (君ヶ台貝塚第4次調査)
- 鴨志田篤二他 2000 『平成11年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会 (西中根遺跡第2次調査)
- 鴨志田篤二 2002 『平成13年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会 (君ヶ台貝塚第5次調査)
- 鴨志田篤二 2004 『平成15年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会 (君ヶ台貝塚第6次調査)
- 川崎純徳他 1975 『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書』勝田市文化財調査報告第1集 勝田市教育委員会
- 川崎純徳他 1979 『勝田市史 別編Ⅱ 考古資料編』勝田市
- 川崎純徳・鴨志田篤二 1980 『君ヶ台貝塚の研究』勝田文化研究会 (君ヶ台貝塚第2次調査)
- 佐々木義則編 2011 『平成22年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会 (君ヶ台貝塚第9次調査)
- 佐々木義則編 2012 『平成23年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会 (西中根遺跡第3次調査)
- 鈴木素行 1994 「西中根遺跡」『フィールドノート』vol.6 14頁
- 鈴木素行 1998 「泉原貝塚における土器群の編年と系統 一土器に関する問題・Ⅱ一」『泉原貝塚発掘調査報告書』日立市文化財調査報告第45集 日立市教育委員会 24-55頁
- 鈴木素行 2007 「向野E遺跡における縄文時代中期後葉の集落跡について 一君ヶ台貝塚の再検討を添えて一」『向野遺跡群』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第36集 財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 235-254頁
- 住谷光男 1982 『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書 昭和56年度版』勝田市教育委員会
- 住谷光男他 1983 『昭和57年度市内遺跡発掘調査報告書』勝田市教育委員会 (柴田遺跡第1次調査)
- 住谷光男他 1987 『昭和61年度市内遺跡発掘調査報告書』勝田市教育委員会 (柴田遺跡第2次調査)
- 住谷光男 1991 『平成2年度勝田市内遺跡発掘調査報告書』勝田市教育委員会 (三反田蜆塚貝塚第10次調査)
- ひたちなか市埋蔵文化財調査センター 2007 『ひたちなか埋文だより』第27号
- 藤本 武・鈴木素行 1994 『久慈川・那珂川流域の貝塚 一藤本弥城先史資料整理調査報告書Ⅷ一』(財)勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第10集 財団法人勝田市文化・スポーツ振興公社
- 皆川 修 2001 『十万原地区市街地開発事業地内埋蔵文化財調査報告書 十万原遺跡Ⅰ』茨城県教育財団文化財調査報告第179集 財団法人茨城県教育財団
- 渡辺俊夫 1982 「砂川遺跡」『常磐自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 4 宮部遺跡 鹿の子A遺跡 砂川遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告XVI 財団法人茨城県教育財団



1 磯崎東古墳群第10次調査区(南東から)



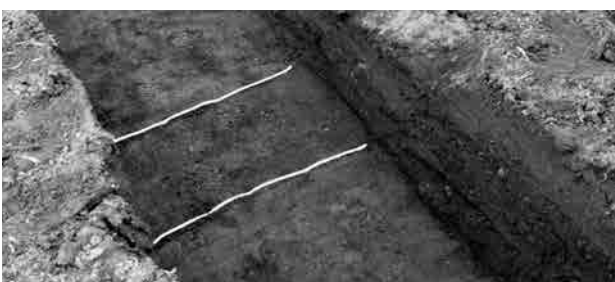
2 磯崎東古墳群第10次調査区1トレンチ(東から)



3 磯崎東古墳群第10次調査区3トレンチ(東から)



4 磯崎東古墳群第10次調査区第1号墳石室(東から)



5 磯崎東古墳群第10次調査区第1号墳西側周溝(南東から)



6 老ノ塚遺跡第2次調査区(北西から)



7 柴田遺跡第3次調査区(南東から)



8 柴田遺跡第3次調査区ピット3(北東から)



9 雷遺跡第1次調査区(東から)



10 雷遺跡第2次調査区(南東から)

図版2 試掘調査(2)



11 雷遺跡第3次調査区(南東から)



12 高野富士山遺跡第7次調査区(北西から)



13 岡田遺跡第24次調査区(南から)



14 西中島遺跡第4次調査区(北西から)



15 堀口遺跡第13次調査区(南から)



16 堀口遺跡第13次調査区1トレンチ(南西から)



17 堀口遺跡第14次調査区(西から)



18 堀口遺跡第14次調査区第1・2号住居跡(北東から)



19 市毛上坪遺跡第13次調査区(南から)



20 市毛上坪遺跡第13次調査区第1号住居跡(南西から)



21 枯松戸遺跡第3次調査区(西から)



22 三反田蜆塚遺跡第6次調査区第1号住居跡(南から)



23 三反田蜆塚遺跡第6次調査区第1号住居跡竈(南から)



24 三反田蜆塚遺跡第6次調査区第1号住居跡ピット6(南から)



25 三反田蜆塚遺跡第6次調査区第1号住居跡ピット6(東から)



26 三反田蜆塚遺跡第6次調査区第1号住居跡ピット6脇遺物出土状況(東から)



27 三反田蜆塚遺跡第6次調査区第1号住居跡覆土(南東から)



28 三反田蜆塚遺跡第6次調査区第1号住居跡ピット4覆土



29 三反田蜆塚遺跡第6次調査区第11号住居跡



30 三反田蜆塚遺跡第6次調査区第11号住居跡遺物出土状況

図版4 本調査(2)



31 三反田蜆塚遺跡第6次調査区第2C号住居跡・第12号土坑(東から)



32 三反田蜆塚遺跡第6次調査区第11号土坑(北から)



33 西中島遺跡第5次調査区(北から)



34 西中島遺跡第5次調査区第1号住居跡(南東から)



35 西中島遺跡第5次調査区第1号住居跡竈(東から)



36 西中島遺跡第5次調査区第1号住居跡竈内支脚出土状況(東から)



37 西中島遺跡第5次調査区第1号住居跡掘形(東から)



38 西中島遺跡第5次調査区第1号住居跡床面粘土出土状況(南東から)



39 西中島遺跡第5次調査区第1号住居跡覆土(南東から)



40 西中島遺跡第5次調査区第2号住居跡掘形(北東から)

報告書抄録

フリガナ	ヘイセイニジュウゴネンドヒタチナカシナイイセキハクツツチョウサホウコクシヨ
書名	平成 25 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
編集者名	佐々木義則
著者名	鈴木素行, 稲田健一, 栗田昌幸, 矢野徳也, 佐々木義則
編集機関	公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化課文化財調査事務所
編集機関所在地	茨城県ひたちなか市大字中根 3499 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター内
発行機関	ひたちなか市教育委員会
発行機関所在地	茨城県ひたちなか市和田町 2 丁目 12-1
発行年	2014 年 3 月 14 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	標高	調査期間	面積	備考
		市町村	遺跡番号						
イソザキヒガシコフンゲン 磯崎東古墳群	ひたちなか市 磯崎町	08221	240	36° 37' 96"	140° 62' 31"	24.0 m	201301	39 m ²	
オイノヅカ 老ノ塚	ひたちなか市 稲田	08221	066	36° 43' 88"	140° 53' 64"	33.0 m	201301	33 m ²	
シバタ 柴田	ひたちなか市 中根	08221	101	36° 23' 0"	140° 32' 59"	23.0m	201302	54 m ²	
イカズチ 雷	ひたちなか市 東石川	08221	145	36° 24' 27"	140° 31' 14"	26.0m	201302	125 m ²	
イカズチ 雷	ひたちなか市 東石川	08221	145	36° 24' 27"	140° 31' 12"	26.0m	201302	40 m ²	
イカズチ 雷	ひたちなか市 東石川	08221	145	36° 24' 27"	140° 31' 10"	26.0m	201305	22 m ²	
コウヤフジヤマ 高野富士山	ひたちなか市 高野	08221	062	36° 25' 45"	140° 33' 14"	32.0m	201303	39 m ²	
オカダ 岡田	ひたちなか市 三反田	08221	039	36° 22' 10"	140° 32' 36"	22.0m	201303	57 m ²	
ニシナカジマ 西中島	ひたちなか市 津田	08221	006	36° 24' 7"	140° 29' 31"	27.0m	201306	51 m ²	
ニシナカジマ 西中島	ひたちなか市 津田	08221	006	36° 24' 7"	140° 29' 31"	27.0m	201308	97 m ²	
ホリグチ 堀口	ひたちなか市 堀口	08221	004	36° 23' 24"	140° 30' 38"	26.0m	201307	34 m ²	
ホリグチ 堀口	ひたちなか市 堀口	08221	004	36° 23' 26"	140° 30' 40"	26.0m	201312	40 m ²	
イチゲカミツボ 市毛上坪	ひたちなか市 市毛	08221	131	36° 24' 1"	140° 30' 3"	26.0m	201307	67 m ²	
カレマツド 枯松戸	ひたちなか市 中根	08221	102	36° 23' 13"	140° 32' 53"	24.0m	201311	343 m ²	
ミタンダシイツカ 三反田蜆塚	ひたちなか市 三反田	08221	284	36° 22' 4"	140° 33' 29"	22.0m	201302	92 m ²	

平成 25 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

平成 26 (2014) 年 3 月 14 日発行

編 集 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

発 行 ひたちなか市教育委員会

〒311-1214 茨城県ひたちなか市和田町 2 丁目 12-1

TEL 029-273-0111

公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

〒312-0011 茨城県ひたちなか市中根 3499

TEL 029-276-8311

印 刷 大富印刷株式会社

〒312-1251 茨城県ひたちなか市山崎 160